



日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究—語構成の異同と文法的振る舞いを中心に—

藤原, 優美

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2013-09-25

(Date of Publication)

2014-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第5978号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005978>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究
—語構成の異同と文法的振る舞いを中心に—

平成 25 年 6 月
神戸大学大学院国際文化学研究科
氏名 藤原優美

博士論文

日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究
—語構成の異同と文法的振る舞いを中心に—

審査委員　： 定延　利之　教授
 湯淺　英男　教授
 中西　泰洋　教授

平成 25 年 6 月
神戸大学大学院国際文化学研究科
氏名　藤原優美

論文要旨

中国語では、漢語を用いて表現する。現代日本語でも、表記の1つとして漢字が使われている。また、日本語と中国語には、「科学」、「文化」などのような、字形が同じである語、つまり同形漢語が多数存在している。しかし、同じ漢字で書かれていても、日本語としての意味と中国語としての意味が常に同じとは限らない。しかも、日本語と中国語の同形漢語の文法的ズレもよく見られる。その理由としては、中川（2008）では、同じ語に対する日中両言語での解釈が異なるためであると指摘している。こうした日本語の漢語の使用状況を踏まえて、本研究では、2字漢語を用いた日本語のサ変動詞と中国語における同形漢語の文法的な立場を比較対照し、中国語母語話者が日本語を学習するに際して、どのような文法的事項に留意すべきかを考察した。

一方、これまでの漢語動詞、いわゆる日本語のサ変動詞の語構成研究では、造語パターンを分類・整理することに重点が置かれており、その動詞が統語的にどのように振る舞うかという研究は遅れているが、森田（1995）では、漢語の語構成の観点から自他の問題について議論し、「漢語の文法的研究は語義論をベースにして行わなければ新しい展開は望めないであろう」と指摘している。本研究においても同様の視点に立ち、漢語の自他性を考察する際には、語の構成要素から分析することとした。

特に、日本語のサ変動詞に用いられる2字漢語は中国語ではどのような品詞になるのか、2字漢語の個々の構成要素は中国語ではどのような文法的特徴を持っているのかを明らかにした。そして、日中両語において2字漢語の語の構成要素と動詞自他性との関わりについて考察し、同時に日本語のサ変動詞の自他性とそれに対応する中国語の2字漢語動詞の自他性の異同も見た。

以下、各章の内容を簡潔に要約することとする。

第1章では、上記の観点に立って、研究目的と研究方法について述べた。とりわけ日中同形漢語の意味的文法的違いを提示しつつ、同時に語の構成要素について考察する必要性も指摘した。

第2章では、まず日本語の語彙体系の中で漢語がどのような存在であるかについて述べ、中国語母語話者が日本語学習に際して、漢字がどのような影響を持つかについても指摘した。また、本研究で対象とする日本語の漢語については「2字漢語+スル」の形に限定することの述べた。

第3章では、日中同形漢語のそれぞれの構成要素に基づく日中両語の対照の可能性について論じた。日中両語の2字漢語の個々の語の構成要素の品詞性について、先行研究を紹介するとともに、個々の品詞の日中対照の難しさも示した。

第4章では、日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の2字漢語について主に品詞性を中心に比較対照した。まず本研究の調査対象となるサ変動詞を提示するとともに中国語の品詞の分類基準についても検討した。また、日本語ではサ変動詞になるが、中国語ではどのような品詞になるのか、その品詞になる語の構成要素はどのような文法的特徴を持っているのかを明らかにした。例えば、日本語ではサ変動詞となるが、対応する中国語の2字漢語の中には動詞のほかに、名詞、形容詞、副詞となるものがある。さらに、中国語の2字漢語で動詞となるものはすべて構成要素に動詞要素が入るが、名詞や形容詞になるものの中には、それぞれ名詞要素や形容詞要素の入っていない2字漢語が存在することがわかった。

第5章では、日中両語において、2字漢語の個々の構成要素と動詞自他性との関わりについて分析するとともに両言語で比較対照した。まず、日中両語それぞれにおける自動詞と他動詞の基準を検討した。上記の第4章で分析した構成要素に基づいてまず、2字漢語を用いた動詞を各タイプに分類した。そして、日中両語で同じタイプとなっている2字漢語の動詞を取り上げ、構成要素となる動詞の自他性と2字漢語としての動詞の自他性との関わりなどを分析・考察した。これによって、日中両語で同じ構成要素を持つ2字漢語の動詞を比較対照することとなった。とりわけ、日中両語においてAV型とMV型となる個々の2字漢語については、自他性に関しては日中両語で一致することがわかった。また、VN型となる2字漢語については、中国語ではすべて自動詞となるが、日本語のサ変動詞では自動詞、他動詞、自他両用動詞の使われ方がされている。

第6章では、ここまでの分析結果を踏まえながら、中国語母語話者がサ変動詞の自他性をどの程度理解しているかを確認するために、アンケート調査を行った。1つ目は自他性に関わる格助詞を選ばせる問題であり、2つ目は日中同形漢語を提示して作文させる問題である。結果として、中国語母語話者にとっては、日中両語で語構成も自他性も同じであるサ変動詞が習得しやすいなどのことがわかった。

第7章では、本研究で得られた2字漢語の語構成と動詞の自他性との関わりについて分析の結果などに基づいて、今後の中国語母語話者の日本語学習についていくつかの示唆を行った。

目 次

第1章 はじめに	1
1.1 研究目的	1
1.2 研究方法	3
1.3 本論文の構成	4
第2章 日中同形漢語について	6
2.1 日本語の語彙体系における漢語の位置づけ	6
2.2 日中同形漢語の位置づけ	7
2.3 日本語のサ変動詞について	7
第3章 構成要素による日中同形漢語対照の可能性	9
3.1 語の構成要素について	9
3.1.1 日本語の2字漢語の語の構成要素について	9
3.1.2 中国語の「語構成法（构词法）」について	9
3.1.3 構成要素による日中対照の難点	11
3.2 前字と後字の結合関係について	12
3.2.1 日本語の2字漢語の語の結合関係について	12
3.2.2 中国語の合成語（合成词）の構成方法について	14
第4章 日本語のサ変動詞をめぐる日中対照分析	15
4.1 分析対象となるサ変動詞	15
4.2 日本語のサ変動詞と対応する中国語の品詞性	15
4.2.1 中国語における品詞性について	15
4.2.1.1 中国語の品詞	15
4.2.1.2 各品詞の分類基準	18
4.3 サ変動詞と対応する中国語の品詞の種類	22
4.4 各品詞になる語の構成	22
4.4.1 日本語のサ変動詞の語構成	22

4.4.2	サ変動詞と対応する中国語の語構成	23
4.4.2.1	中国語で名詞になる語の語構成	24
4.4.2.2	中国語で形容詞になる語の語構成	26
4.4.2.3	中国語で動詞になる語の語構成	28
4.4.2.4	中国語で副詞になる語の語構成	31
4.5	まとめ	31

第5章 語の構成要素に基づく日中動詞の自他性の異同 33

5.1	動詞の他動性について	33
5.2	日本語の他動詞と自動詞	34
5.3	中国語の他動詞と自動詞	36
5.4	構成要素に基づく日中動詞の自他性について	38
5.4.1	VV 型における日中動詞の自他性	38
5.4.1.1	日本語のサ変動詞の VV 型	38
5.4.1.2	中国語の動詞の VV 型	43
5.4.2	AV 型における日中動詞の自他性	49
5.4.2.1	日本語のサ変動詞の AV 型	49
5.4.2.2	中国語の動詞の AV 型	51
5.4.3	MV 型における日中動詞の自他性	52
5.4.3.1	日本語のサ変動詞の MV 型	52
5.4.3.2	中国語の動詞の MV 型	53
5.4.4	VN 型における日中動詞の自他性	55
5.4.4.1	日本語のサ変動詞の VN 型	55
5.4.4.2	中国語の動詞の VN 型	58
5.4.5	VA 型における日中動詞の自他性	59
5.4.5.1	日本語のサ変動詞の VA 型	59
5.4.5.2	中国語の動詞の VA 型	60
5.4.6	NV 型における日中動詞の自他性	62
5.4.6.1	日本語のサ変動詞の NV 型	62
5.4.6.2	中国語の動詞の NV 型	63

5.5	まとめ	64
第6章	中国語母語話者によるサ変動詞の誤用について	67
6.1	サ変動詞と共起する格助詞について	67
6.1.1	他動詞となるサ変動詞の場合	67
6.1.2	自動詞となるサ変動詞の場合	68
6.1.3	自他両用動詞となるサ変動詞の場合	69
6.2	中国語母語話者によるサ変動詞の誤用についての仮説	70
6.3	自他性の誤用に関するアンケート調査	71
6.4	アンケート調査の結果	75
6.5	アンケート調査の分析と考察	77
6.5.1	選択問題についての分析	77
6.5.1.1	正解率が比較的高い問題について	77
6.5.1.2	誤答率が比較的高い問題について	80
6.5.1.3	選択問題のまとめ	85
6.5.2	作文問題についての分析	86
6.6	まとめ	90
第7章	おわりに	93
7.1	日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の品詞性について	93
7.2	日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の動詞の自他性について	94
7.3	アンケート調査の結果と日本語教育への示唆	98
7.4	問題点および今後の課題	101
参考文献		103
添付資料1 日本語のサ変動詞と対応する中国語の品詞性		106
添付資料2 サ変動詞と共起する格助詞		107
添付資料3 アンケート調査の質問紙		109

日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究 —語構成の異同と文法的振る舞いを中心に—

第1章 はじめに

1.1 研究目的

中国語では、漢語を用いて表現する。現代日本語でも、表記の1つとして漢字が使われている。また、日本語と中国語には、「科学」、「文化」などのような、どちらでも同じ形が用いられる漢語が多数存在している。統計によれば、現代中国語および現代日本語の中に、約4600余りの同形漢語がある¹。そのため、中国語を母語とする日本語学習者の漢語学習においても、日本語を母語とする学習者の中国語の学習においても、同形漢語が大きな手助けになっている。

しかし、同じ漢字で書かれていても、日本語としての意味と中国語としての意味が常に同じとは限らない。例えば、「勉強」は日本語では「学ぶこと」という意味であり、中国語では「むりやり何かをさせること」という意味である。確かに、日本語としての意味と中国語としての意味が同じ場合も多いが、中には意味がずれているものがあり、まったく意味が異なるものもある。

しかも、日本語と中国語の同形漢語の文法的ズレもよく見られる。

例(1-1) 中：他 很 **紧张**。(形容詞)

彼 とても 緊張

日：彼はとても**緊張している**。(サ変動詞)

中川(2008)

例(1-1)の「緊張(する)」という同形漢語は、中川(2008)によると、中国語では形容詞として用いられるが、日本語ではサ変動詞として用いられる。

なぜ日中同形漢語にはこのような文法的ズレがあるのか、それは日中両言語における解釈が異なるためであると中川(2008)は指摘している。

¹ 橋純信(1994)「現代中国語における中日同形語の占める割合」『国際関係学部研究年報(日本文学)』15号,99-116頁 日本大学国際関係学部

例 (1-2)	日本語	中国語
	低下する (サ変動詞)	低下 (形容詞)
	低く下がる	低 下

中川 (2008)

例 (1-2) が示しているように、「低下 (する)」という同形漢語は、日本語では「低く下がる」という解釈なので、サ変動詞として用いられる。中国語では“低”と“下”は同じ意味で、「低い」という意味を表しているので、形容詞として用いられる。このように、日中両言語における解釈が異なるため、日中同形漢語には文法的ズレが見られる。したがって、より細かく語の構成要素を考察する必要がある。

一方、日中両言語において、同じ動詞であっても、自他性の異同も見られる。

例 (1-3) : 1-a 经济 发展 了。(自動詞としての用法)

経済 発展する ～た

1-b 経済が発展した。(自動詞としての用法)

2-a 发展 经济。(他動詞としての用法)

発展する 経済

2-b ① *経済を発展する。(*は非文を表す。以下も同様)

② 経済を発展させる。(他動詞としての用法)

石・王 (1983)

例 (1-3) の「発展」という同形漢語について言えば、石・王 (1983) によると、中国語では自動詞 (1-a)、他動詞 (2-a) とともに用いられるが、日本語では自動詞 (1-b) にしか用いられない。他動詞の用法を成立させるためには使役形 (2-b の②) にしなければならない。このように、日本語と中国語の同形漢語には文法的ズレがある。実際に、中国語母語話者の日本語学習においては、以上のような「経済を発展する」といった自他性に関する誤用が少なくない。つまり、日本語の動詞の自他性は中国語母語話者にとって難しい学習項目と言える。

これまでの漢語動詞、いわゆる、日本語のサ変動詞の語構成研究は、造語パターンを分

類・整理することに重点が置かれており、その動詞が統語的にどのように振る舞うかという研究は遅れているように思われる。しかし、森田（1995）においては、漢語の語構成の視点から自他という統語的振る舞いの問題について議論している。そこでは、「漢語の文法的研究は語義論をベースに行わなければ新しい展開は望めないであろう」と指摘している。したがって、漢語の自他性を考察する際には、語の構成要素について分析する必要がある。そうした研究の中で、サ変動詞の自他性に関して、中国語母語話者がどのような同形漢語が誤用しやすいのか、誤用しにくいのかについては、先行研究が存在する（庵 2009、など）が、誤用の原因がどこにあるのかについてはこれまであまり論じられてこなかった。さらに、どのように母語である中国語の知識を活用すれば、同形漢語である日本語のサ変動詞の自他性の学習に役に立つのか、あるいは、自他性が判断できるのかについて、これまであまり分析されてこなかった。

一方、中国語においては、2 字漢語においても個々の語の品詞性が合成語（2 字漢語）の品詞性に影響を与える。同様に、中国語母語話者が日本語を学ぶ場合、中国語の合成語と同じように、日本語の 2 字漢語の個々の語の品詞性から 2 字漢語のサ変動詞を解釈する可能性がある。そのため、日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語について、2 字漢語の個々の品詞性、自他性を分析・対照させるとともに、前字、後字の要素ごとに細かく分析・考察する必要がある。

本研究では、語構成という視点から、使用頻度の高い日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語を対照する。具体的に言えば、日本語ではサ変動詞になるが、中国語ではどのような品詞になるのか、その品詞になる語の個々の構成要素はどのような文法的特徴を持っているのかを明らかにする。そして、語の構成要素と 2 字漢語全体の自他性との関連性や日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の動詞の自他性の異同も考察する。そこで明らかになったことは、今後の中国語母語話者の日本語教育にとっても貢献する点があると考えられる。

1.2 研究方法

本研究では、まずは、これまでの日本語と中国語の同形漢語に関する先行研究の成果と問題点を踏まえながら、語の構成要素による日中同形漢語の比較対照を行う。そこでは、以下の①～⑧のように対照研究を行う。

- ① 研究対象とする同形漢語を選定する。

ア. 日本語における使用頻度に基づく同形漢語リストを作る。

国立国語研究所 (2006)『現代雑誌 200 万字言語調査語彙表』公開版 (ver.1.0) の中から、上位 5000 番 (和語、漢語、外来語などを含める) までの 2 字の同形漢語を抽出する。計 1207 語。

イ. 『明鏡国語辞典 (第 2 版)』、『大辞泉 (1998)』、『大辞林 (第 3 版)』に従い、同形漢語リストにおけるサ変動詞を抽出する。計 425 語。

- ② 中国語の品詞の種類をまとめて、それらの分類基準を提示する。
- ③ 中国語の品詞判断の基準に基づいて、サ変動詞と対応する中国語の品詞性について考察する。
- ④ 語の構成要素、前字と後字の品詞性および結合関係を分析する。
- ⑤ サ変動詞とそれに対応する中国語の動詞の自他性の異同を考察する。
- ⑥ 各タイプの動詞と共起する格助詞について考察する。
- ⑦ 中国語母語話者を対象に、アンケート調査を行う。そこで得られた結果はどのように前で分析してきた内容と結びつくのかについて分析する。
- ⑧ 今後の中国語母語話者の日本語教育への示唆を示す。

1.3 本論文の構成

第 1 章では、研究目的と研究方法について述べる。研究目的のところでは、日中同形漢語の意味的文法的違いを提示し、語の構成要素について考察する必要性を示す。

第 2 章では、まず日本語の語彙体系の中で漢語がどのような存在であるかについて述べ、同時に同形漢語が中国語母語話者の日本語の学習において、どのような影響があるのかについて考察する。その上で日本語のサ変動詞について分析する。そこでは、本研究で扱う中国語の動詞と対応する日本語のサ変動詞が「漢語+スル」という形であることを明示する。

第 3 章では、構成要素による日中同形漢語の対照の可能性について考察する。まずは、日中両言語の語の構成要素の品詞性についての先行研究を挙げながら、構成要素による日中対照分析の難しい点と本研究の観点を示す。それから、日中両言語の 2 字漢語の前字と後字の結合関係について分析し、構成要素による日中同形漢語の対照の可能性を明示する。

第 4 章からは、実際にサ変動詞とそれに対応する中国語との比較対照に入る。分析・考察する前に、まずは本研究の調査対象となるサ変動詞を提示する。それから、中国語の品

詞の種類をまとめて、その分類基準を検討する。その後は、日本語ではサ変動詞になるが、中国語ではどのような品詞になるのか、その品詞になる語の構成要素はどのような文法的特徴を持っているのかを明らかにする。

第5章では、語の構成要素と動詞自他性との関わりについて、日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の動詞の自他性の異同も考察する。そこでまずは、日中両言語の自動詞、他動詞について述べて、本研究ではどのように自動詞、他動詞を見分けるのかを示す。そして第4章で分析した構成要素に基づき、動詞を各タイプにわけ、日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の動詞の構成要素と動詞の自他性との関係を明らかにする。

第6章は第4章と第5章で得られた結果を活用して、それを実際に学習者の誤用と結びつけて分析する。具体的には、中国語母語話者の日本語学習者を対象とし、アンケート調査を行う。必要に応じて、インタビューもする。アンケート調査は大きく2つの問題に分けられる。1つ目は選択問題で、そこでは動詞に適切な格助詞を選ばせる。それは学習者が日本語のサ変動詞の自他について習得しているかどうか、どのような誤用が出るのかなどを考察する。2つ目は作文で、そこでは日中同形漢語を与え、それらを使って、異なる品詞ごとに日本語と中国語の文を作らせる。それは中国語の2字漢語の理解程度と日本語の2字漢語の理解程度の相関性を探るためである。このように、アンケート調査を通じて、中国語母語話者の学習実態を考察する。

第7章は以上の内容をふまえ、本研究で得られた結果およびそれがどのように今後の中国語母語話者の日本語教育において貢献するかをまとめる。それから、今後の課題も示す。

第2章 日中同形漢語について

2.1 日本語の語彙体系における漢語の位置づけ

日本語の語彙は和語、漢語、外来語と混種語に分かれている。「国立国語研究所の1964（昭和39）年の調査によれば、雑誌における語種の割合は異なり語数で漢語47.5%、和語36.7%、外来語9.8%、混種語6%であり、話し言葉の場合（野元他1980）は異なり語数で和語46.9%、漢語40.0%、外来語10.1%、混種語3%である。延べ語数では、前者の場合、和語53.9%、漢語41.3%であり、後者の場合は和語71.8%、漢語23.6%であるから、よく使われる基本的な語は和語が多いが、単語の種類でいうと漢語が多いことがわかる。²」また、宮島（1993）の調査によると、時枝誠記編『例解国語辞典』は漢語が53.6%を占めている。したがって、漢語は日本語を学習する際になくしてはいけない項目である。また、野村（2000）では、近代になってから漢語が日本語の基本語彙で無視できない位置を占めると述べられている。

漢語については、『新編日本語教育事典』が以下のように定義している。

「語種による語の分類の1つで、古代から中世にかけて、中国大陆から漢字とともに日本語に入ってきた語のことをいう。すなわち、当時の中国語の語彙が、発音・表記とも言語のまま導入され、やがて日本語化したものが漢語である。漢語は漢字で書かれ、中国語に由来する発音（古いほうから呉音、漢音、唐宋音）で読まれる点に特徴がある。漢字の発音を漢字音あるいは字音と呼ぶことから、漢語を字音語ということもある。日本語の語彙には、中国から取り入れた本来の漢語のほかに、日本で独自に漢字を組み合わせでつくった大量の和製漢語が存在する。それらのほかには『大根、返事』のように和語の『おほね、かへりごと』を漢字表記したものが、音読みされて（すなわち字音で読まれて）生まれたものもある。また、江戸時代以降には欧米から外来語の概念を導入する際に、中国語の古語をその訳語として利用したり、新たに日本人が訳語を造語したりしてできたものもある。字音語は、本来の漢語に対して、これらを含めた総称として用いるのに便利な用語である。」

簡単にまとめてみると、漢語は日本語の中で、漢字で書かれた字訓ではなく、字音で読まれる語である。昔、中国から伝わり、日本語として定着したもののほかに、日本で作られたものもある。

² 日本語教育学会（2005）『新編日本語教育事典』大修館書店 227頁

2.2 日中同形漢語の位置づけ

漢字文化圏の言語間では、漢字を通じて他の漢字文化圏へ単語が広まることもある。例えば、明治時代に日本で作られた「科学」という言葉は、中国語では“科学 (kē xué)”³という形で受け入れられている。実際、日本語と中国語の間には同形漢語が多い。

中国語を母語とする日本語学習者が日本語における「文化」や「科学」など、同形漢語を見ると、母語としての中国語と日本語との近さを感じていると言ってよい。また、漢字は意味を持っているため、発音がわからなくても、漢字で書かれている日本語を見て、その意味を知ることができる。こういう点では、中国語を母語とする日本語学習者は非漢字圏の学習者より、日本語学習において著しく有利な立場にあると言える。しかし、同じ漢字であっても、意味は必ずしも同じとは限らない。しかも、日中の文法的違いも加われば、学習者は母語、いわゆる、中国語からの干渉を受け、誤用になることもしばしばある。したがって、中国語を母語とする日本語学習者にとって、同形漢語はプラス、マイナス両方の働きを持っている。

一方、上述したように、日本語と中国語の間には同形漢語がたくさん存在している。松下(2009)では、「日中対照常用漢字語データベース」を開発するため、国立国語研究所(2006)『現代雑誌 200 万字言語調査語彙表』と北京語言学院語言教學研究所(1986)『現代漢語頻率詞典』の上位 5000 語を調査した。そこで、日中同形漢語は全体の 3 分の 1 を占め、同形漢語の 4 分の 3 が 2 字漢語であるという結果が得られている。また、筆者の調べによると、国立国語研究所(2006)の上位の 5000 番までに、2 字同形漢語は 1207 語あり、約 24.14% を占めている。国家語言文字工作委員會(2008)『現代漢語常用詞表(草案)』の上位 5000 番までに、同形漢語は 1641 語あり、約 32.82% を占めている。

したがって、中国語を母語とする日本語学習者にとって、同形漢語は重要な学習項目である。また、日本語教育を考える上でも、無視できないものと言えよう。

2.3 日本語のサ変動詞について

現代日本語の動詞は、語形変化のタイプによって、次の 3 つに分けることができる。村木(1991)に即してまとめると、以下のようになる。

- ① 一段動詞(母音(vowel)語幹動詞、弱変化動詞).....[Vv]

語幹が母音(i,e)で終わる。原形は-ruで終わる。

³ 中国語の例の引用については、“ ” で表記することとする。

例：落ちる (oti-ru)、着る (ki-ru)、入れる (ire-ru)、寝る (ne-ru) など

② 五段動詞 (子音 (consonant) 語幹動詞、強変化動詞)[Vc]

語幹が子音で終わる。原形は-u で終わる。

例：書く (kak-u)、話す (hanas-u)、思う (omo-u)、帰る (kaer-u) など

③ 不規則動詞

カ変動詞[Vk]：来る (k-uru)

サ変動詞[Vs]：

例：する (s-uru)、見学する (kenngakus-uru)、カットする (kattos-uru)、感ずる (kanz-uru)
など

語幹が mas- で終わる (ていねい動詞)。命令形と否定形が不規則。

例：ございます、あります、寝ます、読みます、来ます、します

以上からサ変動詞について見れば、不規則動詞に含まれていて、「スル」、「漢語+スル」、「外来語+スル」という三つの形がある。いずれも「スル」のところで活用がある。また、「感ずる」、「論ずる」のように、濁音で活用するものもサ変動詞であり、「ズル」のところで活用がある。以下、表 1 ではサ変動詞の活用を示す。

表 1 サ変動詞の活用

基本形	する	見学・する	カット・する	感・ずる
未然形	し・さ・せ	し・さ・せ	し・さ・せ	じ・ぜ
連用形	し	し	し	じ
終止形	する	する	する	ずる・じる
連体形	する	する	する	ずる・じる
假定形	すれ	すれ	すれ	ずれ・じれ
命令形	しろ・せよ	しろ・せよ	しろ・せよ	じろ・じよ・ぜよ

本研究では日中同形漢語を対象とするため、「スル」、「外来語+スル」及び「～ずる」を対象の範囲に入れない。「漢語+スル」という形のサ変動詞のみを扱うことにした。

第3章 構成要素による日中同形漢語対照の可能性

2字漢語は漢字2文字（前字と後字）から形成されている。造語機能によって分析すると、前字と後字の品詞性、前字と後字の結合関係という2つの側面が語の構成要素として挙げられる。本研究はこの2つの構成要素を、日本語と中国語を対照する際のチェックポイントとして取り入れたいと考えている。以下はまず、この2つの構成要素による日中同形漢語の比較対照の可能性について検討してみよう。

3.1 語の構成要素について

3.1.1 日本語の2字漢語の語の構成要素について

日本語の2字漢語の構造を究明する研究には野村（1999）がある。野村（1999）は、漢字1字で表記される最小の意味を持った単位を「字音形態素」と呼び、その下位分類として「語基」と「接辞」の2種を設けた。「語基」は、2字漢語の場合なら、つまり漢字1字に相当するが、その品詞性については、「事物類（N）」「動態類（V）」「様相類（A）」「副用類（M）」の4種類に類別している。

- ① 事物類（N）…叙述の対象となる物や事を表す。
例：鉄、国、水、土、道、心、品 など
- ② 動態類（V）…事物の動作・作用を表す。
例：見、増、置、感、立、発 など
- ③ 様相類（A）…事物や精神の性質・状態を表す。
例：新、軽、大、高、激、逆、同 など
- ④ 副用類（M）…動作や状態の程度・内容を限定・修飾する。
例：特、再、絶、予、最、専、即 など

3.1.2 中国語の「語構成法（构词法）」について

中国語には、独立して用いられ、意味をもつ最小の言語単位は「語（词）」である。語（词）をその内部構造から分けた場合には「単純語（单纯词）」と「合成語（合成词）」になる。以下、中国語の語構成に関する研究については林（1991）を参照することとする。

- ① 単純語（单纯词）：1つの語素で単独で形成された語。この語素は主に単音節であるが、双音節と多音節もある。単純語の語全体は1つの意味を表

す。分けることができない。(由一个语素⁴单独构成的词。这种语素以单音节为主，也有双音节和多音节的。单纯词整个词只能表示一个意思，不能拆开。)

例：马（馬）、蝴蝶（蝶々）、冰淇淋（アイスクリーム）など

- ② 合成語（合成词）：2 つまたは 2 つ以上の語素で形成される。(由两个或两个以上的语素组成。)

例：说服（説得する）、价值（価値）、光溜溜（つるつる）など

合成語（合成词）はさらに、「派生語（派生词）」と「複合語（复合词）」に分けている。

A 派生語（派生词）：語根（词根⁵）＋接辞（词缀⁶）

例：小鸟（鳥）、鞋子（靴）、阿妹（妹）など

B 複合語（复合词）：語根（词根）＋語根（词根）

例：眼花（めまい）、泥土（泥と土）、头痛（頭が痛い）など

以上の内容をまとめると、中国語の語（词）は表 2 のように分類されている。

表 2 中国語の「語（词）」

語（词）	単純語（单纯词）	
	合成語（合成词）	派生語（派生词）：語根＋接辞（词根+词缀）
		複合語（复合词）：語根＋語根（词根+词根）

中国語の語構成法（构词法）については張（1987）が以下のように定義している。「語構成法とは、2 つまたは 2 つ以上の語素から新しい語を形成する規則である。(构词法是由两个或两个以上词素构成新词的规则)」つまり、語構成法（构词法）は合成語（合成词）を対象としている。本研究でも 2 つの要素で形成されたもののみで、それ以上のものはふれ

⁴ 中国語の「語素（语素）」は、例えば呂（1955）によると、「語素は最小の音と意味の結合体、最小の文法単位であり、最小の言語単位である（语素是最小的语音语义结合体, 是最小的语法单位, 也是最小的语汇单位）」と説明されている。これは野村（1999）の「語基」と同じものとみなされる。

⁵ 中国語の「語根」は、盛（2003）などによると、「具体的な意味を持ち、語の主な意味を担う語素である。実語素とも言う。語を構成する重要な要素である（词根是指具有具体实在的词汇意义，同时在词中承担整个词的主要词汇意义的语素。所以又称实语素，是构成词的根本要素）」と述べている。

⁶ 中国語の「接辞」は、盛（2003）などによると、「語根に付加して、文法意味あるいはある付加意味を表す語素であり、単独では実の意味を持っていないので、虚語素とも言う（词缀是指附加在词根上表示语法意义和某些附加意义的语素。因为本身没有具体实在的词汇意义，所以又称虚语素）」と述べている。

ないことにする。

合成語（合成詞）の品詞性については、顧（2004）は以下のように述べている。「合成語の品詞性は語根の品詞性によって決められる。例えば、汽車。汽と車は2つとも名詞なので、汽車も名詞である。（词性上，组合词的词性要看词根的词性，如汽车，汽和车都是名词，那么汽车也是名词。）」つまり、中国語の2字漢語においては、2字の品詞性が漢語の品詞性を決める。

さらに、中国語の「語素（语素）」には「名詞性語素（名词性语素）」、「動詞性語素（动词性语素）」、「形容詞性語素（形容词性语素）」、「副詞性語素（副词性语素）」⁷がある。

- ① 名詞性語素（名词性语素）：人や事物の名称を表す。

例：鉄、筆、脚 など

- ② 動詞性語素（动词性语素）：動作・行為および発展・変化を表す。

例：行、跳、飛 など

- ③ 形容詞性語素（形容词性语素）：事物の性質、状態・特徴を表す。

例：高、大、細 など

- ④ 副詞性語素（副词性语素）：動詞・形容詞を修飾・制限する。程度や範囲を表す。

例：最、不、对 など

3.1.3 構成要素による日中対照の難点

日中同形漢語を対照する際、その漢語を構成する漢字の扱いについて、難しい点としては2つある。

まずは、複数の品詞にまたがる漢字の品詞性の処理である。それは日中両言語においても難しい点である。例えば、中国語の“足”。単独では名詞であるが、副詞の“不”と組み合わせれば、“足”が形容詞性語素にも動詞性語素にもなれる。形容詞性語素になる場合は、“不足”は“不充足”（十分でない）という意味を表して、形容詞として用いられる。“足”が動詞性語素になる場合では、“不足”は“不值得”（価値がない）“不满（某个数目）”（ある数値に満たしていない）“不可以，不能”（できない）という意味を表して、動詞として用いられる。日本語の例も1つ挙げる。漢字の「書」は日本語では動詞としての字訓「かく」を優先させたために、動詞性漢字として動態類にふり分けられた。しかし、「辞書」「書物」などの場合になると、「書」が動詞性漢字という説明が難しくなる。そこでは字音

⁷ 汉语词性对照表（北大标准/中科院标准）（2004）

「ショ」となるので、「書」は名詞性漢字として用いられる。したがって、漢字の品詞性を考える際、同一漢字が持つ複数の品詞性を認め、それぞれの品詞性、つまり文法的役割に応じて、その品詞性を決めることが重要である。

また、日中漢字の間で品詞認定にもズレが存在している。例えば、漢字「勝」/“胜”は、日本語では「勝つ」、動態類に属しているが、中国語では形容詞性語素とされている。しかし、品詞認定のズレがあるとはいえ、日中漢字の品詞性についての比較対照は不可能というわけではない。その品詞性のズレこそ、日本語と中国語の相違点を示す手がかりになると考えられる。

本研究では、日中両言語の共通性を考え、「名詞要素」、「動詞要素」、「形容詞要素」、「副詞要素」を使い、ローマ字略称は野村（1999）の N、V、A、M に従うことにした。

3.2 前字と後字の結合関係について

3.2.1 日本語の 2 字漢語の語の結合関係について

2 字漢語の前字と後字の結合関係については、日本語では、野村（1999）が補足関係、修飾関係、並列関係、対立関係、反復関係という結合関係を設定し、2 字漢語を分類した。以下は野村（1999）の定義にしたがって、具体例を挙げながら説明する。

① 補足関係

例：就職する、提案する、読書する、改善する、延長する、説明する など

「就職する」は「職に就く」という意味、「提案する」は「案を提出する」という意味、「読書する」は「書物を読む」という意味である。「改善する」は「改めてよくする」という意味、「延長する」は「長く延ばす」という意味、「説明する」は「わかりやすく述べる」というそれぞれの意味を持つ。「補足関係」とは、前字の動詞要素を動詞の後に置かれた後字である名詞要素や形容詞要素が文法的、意味的に補足する関係を言う。具体的に言えば、動詞とその動詞が要求する目的語との関係（例えば、「就職する」、「提案する」、「読書する」など）や動詞とその動詞の意味をより完全にするために使用した副詞化した形容詞などとの関係を意味する（例えば、「改善する」、「延長する」、「説明する」など）。これらの場合、後字は前字を補足すると見なす。

② 修飾関係

例：重視する、活用する、中止する、意図する、再現する、不足する など

「重視する」は「重く見る」という意味、「活用する」は「生かして用いる」という意味

である。「中止する」は「途中で止める」、「意図する」は「何かをしようとする」という意味となる。「再現する」は「再び現れる」、「不足する」は「足りない」という意味である。このように、形容詞要素、名詞要素、副詞要素が動詞要素の前に置かれ、連用修飾的に後字の動詞要素を修飾する場合、「修飾関係」と呼ぶ。これらの例では、前字は後字を修飾する。

③ 並列関係

例：使用する、販売する、恋愛する、関係する、学習する、死亡する など

「使用する」の前字は「使う」という意味で、後字は「用いる」という意味で、前字と後字は同じ意味である。「販売する」の前字と後字は「売る」という意味を表す。「恋愛する」の前字は「恋する」という意味で、後字は「愛する」という意味で、前字と後字は同じ意味である。「関係する」の前字と後字は「かかわる」という意味を表す。「学習する」の前字は「学ぶ」という意味で、後字は「習う」という意味で、前字と後字は同じ意味である。「死亡する」の前字は「死ぬ」という意味で、後字は「亡ぶ」という意味で、前字と後字は同じ意味である。これらの場合では、同じ文法的役割を持つ語が並置されていて、しかも、それら2つの要素が同義的である場合を「並列関係」と呼ぶ。

④ 対立関係

例：呼吸する、勝負する、加減する、上下する など

「呼吸する」の前字は「息を吐く」という意味で、後字は「息を吸う」という意味で、前字と後字は逆の意味である。「勝負する」の前字は「勝つ」という意味で、後字は「負ける」という意味で、前字と後字は逆の意味を表す。「加減する」の前字は「加わる/加える」という意味で、後字は「減る/減らす」という意味で、前字と後字は逆の意味を表す。「上下する」の前字は「上がる/上げる」という意味で、後字は「下がる/下げる」という意味で、前字と後字は逆の意味を表す。これらの場合、2つの要素は同じ文法的役割を持つが、意味的には対立していて、前字と後字は「対立関係」にあるとされる。

⑤ 反復関係

例：転々、清々、云々、次々、点々、時々 など

「転々」、「清々」、「云々」、「次々」、「点々」、「時々」は同じ字の繰り返しなので、前字と後字は「反復関係」となる。

3.2.2 中国語の合成語（合成詞）の構成方法について

中国語では、合成語（合成詞）の構成方法には「支配式（支配式）」、「補充式（補充式）」、「陳述式（陳述式）」、「並列式（並列式）」、「偏正式（偏正式）」と「重迭（重疊）」がある。以下、説明は林（1991）による。

- ① 支配式（支配式）：前の語素は動作・行為を表す。後の語素はその対象となる。
例：雪耻（恥をそそぐ）、埋头（没頭する）、开门（ドアを開ける）など
- ② 補充式（補充式）：前の語素は意味の中心となり、後の語素は補足・説明である。
例：证明（証明）、缩小（縮小）、扩大（拡大）など
- ③ 陳述式（陳述式）：前の語素は主語で、後の語素は述語である。
例：眼花（めまい）、心虚（心細い）、头疼（頭が痛い）など
- ④ 並列式（並列式）：前の語素と後の語素は同じまたは逆の意味を表す。
例：泥土（泥と土）、呼吸（呼吸）、上下 など
- ⑤ 偏正式（偏正式）：前の語素は後の語素を修飾する。
例：大衣（コート）、轻视（軽視）、重视（重視）など
- ⑥ 重迭（重疊）：同じ語素が繰り返す。
例：弟弟（弟）、星星（星）、姐姐（姉）など

呼び方が違うが、中国語の語の結合関係は日本語の語の結合関係と同じく、補足関係、修飾関係、並列関係、対立関係、反復関係がある。具体的に言えば、中国語の支配式、補充式、陳述式の3つでは、前字と後字は補足関係である。並列式には並列関係と対立関係が含まれている。偏正式は修飾関係であり、重迭は反復関係である。本研究では、日本語と中国語の2字同形漢語の前字と後字の結合関係を考察する際、日中を統一し、「修飾関係」、「補足関係」、「並列関係」、「対立関係」、「反復関係」という呼び方にする。

第4章 日本語のサ変動詞をめぐる日中対照分析

4.1 分析対象となるサ変動詞

本研究では日中同形漢語における日本語のサ変動詞を対象とするが、すべてのサ変動詞を分析するのが不可能なため、使用頻度の高い語から考察を行うことにした。現在、学術研究において使用されている代表的な語彙頻度資料として国立国語研究所（2006）『現代雑誌 200 万字言語調査語彙表』公開版（ver.1.0）がある。国立国語研究所（2006）は研究課題「現代日本語における書き言葉の実態解明と雑誌コーパスの構築」における「現代雑誌 200 万字言語調査」（2001 年度～2005 年度実施）の成果として、学術研究・教育利用のために公開している。ジャンルとしては、総合・文芸、女性・服装、実用、趣味・娯楽、芸術・科学などが含まれている。データ全体では延べ語数は 1065617 語（自立語 738377 語、付属語 327240 語）あり、異なり語数は 59397 語（自立語 59222 語、付属語 175 語）である。付属語には漢語がないため、本研究では自立語のデータを使用することにした。

まず、本研究では国立国語研究所（2006）の使用語彙上位 5000 語（和語、漢語、外来語などを含む）から二字漢語（日本語と中国語の繁体字と簡体字の違いは問わない）を取り出して、中国語と形が同じである同形漢語 1207 語にしぼった。そして、日本語の辞書『大辞林（第 3 版）』、『大辞泉（1998）』、『明鏡国語辞典（第 2 版）』を参考にしながら、上記の同形漢語 1207 語から日本語のサ変動詞 425 語を抽出した。本研究の調査対象はこの 425 語である。

4.2 日本語のサ変動詞と対応する中国語の品詞性

4.2.1 中国語における品詞性について

4.2.1.1 中国語の品詞

史（1982）においては、「語は語素からなる最小の文の単位である。性質から見ると、実詞と虚詞とに分けることができる。実詞、つまり、実際に意味がある語には、名詞、動詞、形容詞、数詞、量詞と代詞がある。虚詞、実際の意味を持っていない語。副詞、介詞、連詞、助詞、嘆詞、擬声詞を含めている。（词是由语素组成的最小的造句单位。从词性来看，可以分为：实词和虚词。实词：有实际意义的词。包括：名词、动词、形容词、数词、量词和代词。虚词：没有实际意义的词。包括：副词、介词、连词、助词、叹词、拟声词。）」と述べられている。

以下は各実詞を表 3 に表にまとめて、定義する。各虚詞は表 4 にまとめて、定義する。

各実詞、虚詞の分類については、史（1982）に基づくが、定義については、『現代漢語詞典（第5版）』、『新華字典（第10版）』を参照した。

表3 実詞の種類

品詞とその定義	分類	例
名詞：人や事物の名称を表す	人物名詞	学生、维吾尔族（ウイグル族）など
	事物名詞	笔（筆）、杉木（杉の木）など
	時間名詞	上午（午前）、过去（過去）など
	方位名詞	东南（東南）、上面（上）など
動詞：動作・行為または発展・変化を表す	行為動詞	跑（走る）、唱（歌う）など
	発展動詞	生长（成長する）、枯萎（枯れる）など
	心理動詞	喜欢（好く）、觉得（思う）など
	存現動詞	消失（消える）、有（いる/ある）など
	使令動詞	使（させる）、禁止（禁止する）など
	能願動詞	会（できる）、愿意（願う）など
	駆向動詞	来（来る）、上（上がる）など
	判断動詞	是（～は）、为（～は）など
形容詞：事物の性質、状態・外貌の特徴を表す	形状を表す	大（大きい）、高（高い）など
	性質を表す	甜（甘い）、好（良い）など
	状態を表す	快（速い）、迅速（素早い）など
数詞：事物の数量を表す	確数詞	一、二分之一など
	概数詞	一些（少し）、左右（くらい）など
	序数詞	第一、第二など
量詞：事物と動作の単位	名量詞	公里（キロ）、元など
	動量詞	把、回など
代詞：事物の名称の代わりに使える語	人称代詞	我（わたし）、你（あなた）など
	疑問代詞	谁（誰）、什么（何）など
	指示代詞	那里（そこ/あそこ）、那边（その辺）など

表 4 虚詞の種類

品詞とその定義	分類	例
副詞：動詞、形容詞を修飾・制限する、程度あるいは範囲を表す	程度副詞	很（とても）、非常（非常に）など
	時間副詞	已（すでに）、要（もうすぐ）など
	範囲副詞	全（すべて）、仅（わずか）など
	情態副詞	正好（ちょうど）、依然（依然として）など
	語気副詞	确实（確実に）、絶対（絶対に）など
	重複副詞	又（また）、再（再び）など
介詞：名詞、代詞あるいは「名詞性短語（名詞性短語） ⁸ 」の前で、方向・対象などを表す	从（～から）、在（～で/～に）など	
連詞：語、「短語（短語） ⁹ 」あるいは文を連立させる語	和（と）、不但（～だけではなく）など	
助詞：他の詞の後に付加され、独立性もなく、実義もない特別な虚詞	結構助詞	的（の）、地（～に）など
	時態助詞	着（～ている）、了（～た）など
	語気助詞	吧（でしょう）、吗（か）など
嘆詞：感嘆あるいは答えを表す	啊（あ）、哦（お）など	
擬声詞：事物の音を表す	轰隆隆（ごろごろ）、淅淅沥沥（しとしと）など	

⁸ 名詞性短語（名詞性短語）については、許（1991）などによると、文法用語であり、名詞相当の「短語」（語法学术語、指功能相当于名词的短语）と定義されている。例としては、伟大的祖国（偉大な祖国）、农民商人（農民と商人）、首都北京（首都の北京）、桌面上（机の上）、中国的解放（中国の解放）などが挙げられる。

⁹ 短語（短語）については、中国小学教学百科全书（1993）などによると、「語から組み合わせた文法単位、語の組み合わせとも言う。短語は2つ以上の語から組み合わせたものである（由词组成的语法单位，又称词组。短语由两个以上的词组成）」と定義されている。

4.2.1.2 各品詞の分類基準

4.2.1.1 で示したように、中国語にはさまざまな品詞がある。その中には、特に実詞の中の名詞、動詞、形容詞の区別が付きにくい。ほかには、修飾や限定の作用を持つ形容詞と副詞の区別もしにくい。以下各品詞の分類基準について述べたい。分類基準の定義は黄（1981）を参照した。

① 名詞について

ア．名詞は文の中では、「主語（主語）」、「目的語（宾语）」、「連体修飾語（定语）」になる。「連用修飾語（状語）」にもなれるが、時間や場所を表す。

例：在 2002 年釜山亚运会，他以 13 秒 27 的成绩获得金牌。（2002 年の釜山アジア競技会で、彼は 13 秒 27 の成績で金メダルを獲得した。）

— “刘翔获得 110 米栏冠军 成就亚运三连冠”《人民日报》2010.11.25

“2002 年”は時間を表す名詞で、“釜山”は場所を表す名詞である。この文の「連用修飾語（状語）」である。“他”、“金牌”、“13 秒 27”、“成绩”は名詞である。“他”はこの文の「主語（主語）」で、“金牌”はこの文の「目的語（宾语）」である。“13 秒 7”は名詞の“成绩”を修飾して、「連体修飾語（定语）」となる。

イ．名詞の前は副詞の“很”が付かない。副詞の“不”で否定を表すこともできない。

例：他 是 老师。

彼 は 先生

*他 很 老师。

彼 とても 先生

*他 不 老师。⇒他 不 是 老师。

彼 でない 先生 彼 でない は 先生

“很”は名詞を修飾することができないから、“他很老师”は非文になる。最近、ネット上では、“很中国”という言い方をよく見かけるが、それは「中国文化に合う、中国人らしい」などの意味を表していて、“很”は「とても」の意味のほかに、「～が含まれる、～に合う」という意味もある。“中国”も単なる国名を表す名詞だけではなく、「中国の事、もの、感情、個人行為、言語など」の意味も含まれている。しかし、それはあくまでも流行語なので、中国語の正式の文法には入れない。

“他是老师（彼は先生です）”の否定は“他不老师”ではなく、“他不是老师”である。名詞の前に直接“不”が付かない。否定する際、必ず判断を表す動詞の“是”を用いなく

ればならない。つまり、“不中国人”、“不老师”などは非文である。正しい言い方は“不是中国人”、“不是老师”などである。

ウ．名詞はほとんど繰り返すことができない。繰り返すことができる語も少数あるが、それは親族呼称に関するもの、例えば、“哥哥”（お兄さん）、“弟弟”（弟）などに限られる。それ以外は、あまり例が見られない。一般名詞の場合、“饭饭”（まんま）のような幼児語や“缝衣做饭纺线线，天明忙到二更天”（ぬいものめしたき糸つむぎ、朝から夜まで忙しい）のような詩歌で修飾的に用いられる例が存在するだけである。なお、一音節の名詞のなかでそのまま量詞としても用いるものは、繰り返して、“年年”（毎年）、“人人”（だれもかれも）など、「すべての、それぞれみな」という意味を表すが、これは量詞の重ね形と考え、名詞の繰り返しとはしない。

② 動詞について

ア．動詞は文の中では、「述語（谓语）」になる。そして、目的語を持つことができる。

例：外交部长杨洁篪 23 日下午与南非国际关系与合作部长马沙巴内通电话。（「楊潔チ
外交部長は 23 日午後、南アフリカのマシャバネ国際関係・協力相と電話した。」）

— “南非正式加入‘金砖国家’合作机制”《人民日报》2010.12.24

例文には“通”は動詞で、述語（谓语）であり、“电话”がその目的語となる。

イ．動詞は副詞の“不”で否定を表す。心理や感情を表す動詞の前は程度副詞の“很”が付く。

例：吃饭（ご飯を食べる）⇒不吃饭（ご飯を食べない）

喜欢（好く）⇒不喜欢（好かない）

很喜欢（とても好く）

“吃饭”（ご飯を食べる）の否定は動詞の前に副詞の“不”を付けて、“不吃饭”（ご飯を食べない）という形である。心理動詞“喜欢”（好く）の否定も動詞の前に副詞の“不”を付けて、“不喜欢”（好かない）という形になる。心理動詞は程度副詞の“很”も付けるので、“很喜欢”（とても好く）という言い方ができる。

ウ．動詞は繰り返しができる。その繰り返し方は AA または ABAB である。動詞が繰り返すとき、「～してみる」のような試行の意味や、語気を和らげる、動作の時間が短いといった意味を表す。

例：说（話す）⇒说说（ちょっと話す）

讨论（討論する）⇒讨论讨论（ちょっと討論する）

③ 形容詞について

ア. 形容詞は文の中では、「連体修飾語（定语）」になる。目的語を持つことができない。

例：她是一个很懂事的孩子。（彼女はとても聡明な子です。）

— “阮露斐赴美继续读博士”《人民日报》2010.12.28

例文中の“懂事”は形容詞で、名詞“孩子”の連体修飾語（定语）となる。

イ. 形容詞は副詞の“不”で否定を表す。形容詞の前に程度副詞の“很”が付く。

例：红（赤い）⇒不红（赤くない）

很红（とても赤い）

清楚（はっきりする）⇒不清楚（はっきりしない）

很清楚（とてもはっきりする）

ウ. 一部の形容詞は繰り返すことができる。その繰り返し方は AA、AABB である。ただし、状態を表す 2 音節の形容詞の繰り返し方は AABB ではなく、そのまま繰り返すことになって、ABAB という形になる。形容詞が繰り返すとき、程度の高さや描写性を強調した表現となる。

例：红（赤い）⇒红红（赤い）

清楚（はっきりする）⇒清清楚楚（はっきりする）

雪白（雪のように白い）⇒雪白雪白（雪のように白い）

④ 副詞について

副詞は動詞や形容詞と一緒に使う。文の中では「連用修飾語（状語）」、「補語（補語）」になる。以下の例で説明する。

例：想到这些，我感到很兴奋。（「これらを思い出すと、ドキドキしちゃう。」）

— “过去的一年 今后的一年”《人民网》2009.12.8

例文では“很”は副詞で、“兴奋”を修飾し、連用修飾語（状語）になる。

例：舞蹈、音乐、服装都棒极了！（踊り、音楽、服装、すべて素晴らしい。）

— “大型民族舞剧《丝路花雨》亮相华盛顿”《人民日报》2011.12.10

例文では“极”は副詞で、形容詞“棒”の補語（補語）となる。

以上の内容をまず、実詞の名詞、動詞、形容詞に限って、表の形でまとめると、表 5 となる。

表 5 名詞、動詞、形容詞の区別

各品詞とその定義	前には“不”が付く	前には“很”が付く	目的語を持つ	繰り返し方
名詞：人や事物を表す語	×	×	×	×
動詞：人や物の行為、動作、変化、存在を表す語	不说（言わない） 不讨论（討論しない） 不喜欢（好かない）	×	说话（話す） 讨论问题（問題を討論する） 喜欢劳动（労働することが好きだ）	AA 说说（少し話す） ABAB 讨论讨论（少し討論する）
形容詞：人や物、または行為や動作の性質、状態を表す語	不红（赤くない） 不清楚（はっきりしていない）	很红（とても赤い） 很清楚（とてもはっきりしている）	×	AA 红红（とても赤い） AABB 清清楚楚（とてもはっきりしている） ABAB 雪白雪白（雪のように白い）これは状態形容詞に限る

副詞は虚詞（4.2.1.1 を参照）なので、単独で用いられない。主に動詞や形容詞と一緒に使う。形容詞は実詞（4.2.1.1 を参照）なので、単独で用いられる。そして、形容詞は正疑問文ができる。例えば、“红不红”（赤いか赤くないか）、“清楚不清楚”（はっきりしているかはっきりしていないか）など。副詞はできない。

4.3 サ変動詞と対応する中国語の品詞の種類

中国語の品詞の定義にしたがって、サ変動詞の同形漢語を各品詞に分類すると、表 6 になる。右の欄が日本語のサ変動詞と対応する中国語の品詞上の立場である。(具体的に各品詞において、どのような 2 字漢語があるかについては、本論文末尾の添付資料 1 を参照。)

表 6 サ変動詞と対応する中国語の品詞性

日本語	中国語
サ変動詞	名詞のみ
	形容詞のみ
	動詞のみ
	動詞・名詞
	動詞・形容詞
	動詞・副詞

以上の抽出したサ変動詞で用いられている 425 語の同形漢語を中国語の品詞の基準にしたがって、分類すると、名詞、動詞、形容詞、副詞のみが相当することになる。よって、日本語のサ変動詞では、中国語のそれ以外の品詞は用いられていない。ただ、中国語において、名詞、動詞、形容詞、副詞のサ変動詞の同形漢語の場合、複数の品詞にまたがって用いられる漢語もある。

4.4 各品詞になる語の構成

4.4.1 日本語のサ変動詞の語構成

語構成をみると、日本語サ変動詞の前字と後字の品詞性および結合関係は以下のようなものである。(記号の N、V、A、M と前字と後字の結合関係については、本論文の第 3 章を参照。)

① VV 型 (321 語)

ア. V_1 と V_2 が並列関係である。(315 語)

例：使用する、販売する、消費する、移動する、学習する、恋愛する、関係する、
解答する、出現する、展開する、参加する、死亡する、促進する、継続する、
失敗する、表示する、挑戦する、休憩する、負担する、経過する など

イ. V_1 と V_2 が対立関係である。(6 語)

例：呼吸する、勝負する、前後する、加減する、上下する、進出する

② AV 型 (18 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：苦勞する、優勝する、重視する、活用する、冷蔵する、強化する、同居する、優先する、冷凍する、無視する、強調する、確立する、遠征する、活躍する 平行する、確認する、確保する、平均する、主張する、主宰する

③ MV 型 (12 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：再現する、不足する、実施する、専攻する、完備する、実現する、実戦する、共通する、完成する、実行する、再生する、実用する

④ VN 型 (57 語)

後字が前字を補足する補足関係である。

例：就職する、提案する、登場する、出版する、取材する、出力する、下車する、作曲する、入学する、防水する、排気する、入場する、就職する、脱毛する、融資する、観戦する、創刊する、投稿する、着陸する、出席する など

⑤ NV 型 (7 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：意図する、幻想する、電話する、機能する、中止する、公演する、公認する

⑥ VA 型 (10 語)

後字が前字を補足する補足関係である。

例：証明する、説明する、改善する、延長する、改良する、発達する、拡大する、保湿する、加速する、減少する

以上、日本語のサ変動詞の前字と後字の品詞性を見ると、すべてのタイプには動詞要素が含まれている。

4.4.2 サ変動詞と対応する中国語の語構成

各要素の品詞性を表す記号の N、A、V、M と前字と後字の結合関係については日本語と共通であり、本論文の第 3 章を参照。

4.4.2.1 中国語で名詞になる語の語構成

サ変動詞と対応する中国語において、名詞として用いられる場合、前字と後字の品詞性および結合関係は以下のようである。

① NN 型 (5 語)

前字と後字が並列関係、対立関係、修飾関係である。

例：电话（電話）、机能（機能）、契约（契約）、意图（意图）、会议（会議）

上記の例では、“电话”（電話）は“用电的话机”（電信を使った電話機）という意味を表し、“机能”は“机体的功能”（機械の功能）という意味を表す（語義は『現代漢語詞典（第5版）』、『新華字典（第10版）』などを参照、以下同様）。2つの語において、前字は後字の属性を示していることから、前字が後字を修飾することがわかる。他も同様である。したがって、前字と後字の結合関係は修飾関係となる。

② VN 型 (9 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：提案、用意、演技、录音（録音）、投资（投資）、作业（作業）、入门（入門）、成人、攻略

以上の2字漢語の語構成には動詞要素 V があるが、VN 全体は動詞として用いられない。それは、動詞要素 V が名詞要素 N を修飾し、名詞要素 N が語全体の意味の中心となるから、VN 全体は名詞になる。例えば、“提案”の場合は「案を提出する」という意味とはならず、「提出した案」という意味となる。つまり、後字の“案”が意味の中心となり、“提案”の品詞性を決める。よって、“提案”は名詞となる。他も同様である。

しかし、“投资”（投資），“作业”（作業），“录音”（録音），“入门”（入門），“成人”、“攻略”の語においては、前字と後字の結合関係は修飾関係のほかに、補足関係にもなれる。その場合、“投资”（投資）は「資金を投入する」という意味であり、“录音”（録音）は「音声を記録する」という意味である。つまり、V が語全体の意味中心となる。よって、VN 全体は動詞としても用いられる。ただ、VN 全体が名詞として用いられるときには、前字と後字は修飾関係に限る。

③ AN 型 (2 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：勤务（勤務）、苦劳（苦勞）

AN 型には形容詞要素 A があるが、AN 全体は形容詞として用いられない。ここでは、

A が N を修飾するので、N が語全体の意味中心となり、AN 全体は名詞になる。“勤務”（勤務）は「よくする仕事」という意味であり、“苦勞”（苦勞）は「苦しい労働」という意味である。よって、2 つとも名詞である。

④ VV 型（63 語）

前字と後字が並列関係である。

例：教授、恋愛（恋愛）、料理、生活、存在、建筑（建築）、认识（認識）、组织（組織）、

決断（決断）、请求（請求）、练习（練習）、表示、监督（監督）、规定（規定）、裁

判（裁判）、报道（報道）、议论（議論）、区别（区别）、负担（負担）、上下 など

以上のような 2 字漢語はすべて、前字と後字がともに動詞要素であるが、名詞として使われる。“教”と“授”はともに、「教える」という意味を表す。“恋”と“愛”はともに、「恋する、愛する」という意味を表す。つまり、動詞要素が表す具体的な動作・行為からその動作・行為をする人、あるいは動作性・行為性といったものに変化した。他も同様である。以上の例については、“教授”、“監督”（監督）、“裁判”（裁判）の場合、2 字漢語全体は動詞要素 V が表す動作・行為をする人、いわゆる職業を表す専有名詞¹⁰になり、それ以外の 2 字漢語は動詞要素 V が表す動作・行為を表す抽象名詞¹¹になる。

⑤ AA 型（1 語）

前字と後字が対立関係である。

例：胜负（勝負）

ここでは、“勝”と“負”は形容詞要素で、“勝”と“負”は逆の意味を表す。“胜负”は形容詞にはならないが、専有名詞である。今回の調査では、この 1 語しかないが、中国語にはまだ“大小”（大きさ）、“长宽”（長さ）、“高矮”（背の高さ）、“高低”（高さ）、“粗细”（太さ）、“多少”（数量）などの語が多数ある。

以上の内容をまとめると、表 7 になる。中国語では名詞として用いられる語の前字と後字の品詞性については、名詞要素が含まれる NN 型、VN 型、AN 型もあれば、含まれない VV 型、AA 型もある。特に、VV 型の場合には、名詞要素が含まれず、前字と後字が同じ意味の動詞要素となり、語全体は専有名詞、あるいはその 2 字が表している動作・行為の抽象名詞になる。さらに、名詞要素が含まれない AA 型の場合では、前字と後字が逆の意

¹⁰ 専有名詞（专有名词）とは「具体的な人や事物、場所、団体、国家、祭日などの名称を表す語（表示具体的人或事物、地点、机构、团体、国家、节日等名称的词）」を意味する。（朱 1982 などを参照）

¹¹ 抽象名詞（抽象名词）とは「動作、状態、品質、あるいは他の抽象概念を表す名詞（表示动作、状态、品质或其他抽象概念的名词）」を意味する。（朱 1982 などを参照）

味で、語全体はその２字が表す状態の抽象名詞になる。

表 7 中国語で名詞になる語の語構成

前字と後字の品詞性		前字と後字の結合関係	語全体の品詞性
名詞要素が含まれる場合	NN 型	並列関係	名詞のみ
	VN 型	修飾関係	名詞のみ
	AV 型	修飾関係	名詞のみ
名詞要素が含まれない	VV 型	並列関係	動詞としても用いられる
	AA 型	対立関係	名詞のみ

4.4.2.2 中国語で形容詞になる語の語構成

サ変動詞と対応する中国語において、形容詞として用いられる場合、前字と後字の品詞性および結合関係は以下のようである。

① AA 型（7 語）

ア．前字と後字が並列関係である。（6 語）

例：优胜（優勝）、干燥（乾燥）、混乱、低下、平均、共通

イ．前字と後字が対立関係である。（1 語）

例：紧张（緊張）

AA 型の形容詞の前字と後字の結合関係はほとんど並列関係である。結合関係が対立関係の語は今回の調査では、“紧张”（緊張）1 語だけある。一方、AA 型については 4.4.2.1 で見たように、名詞になる場合もある。その場合には、その前字と後字の結合関係は対立関係となっている。今回の調査では名詞になる AA 型は“胜负”（勝負）1 語であるが、中国語にはほかにも多数ある。例えば、“大小”（大きさ）、“长宽”（長さ）、“高矮”（背の高さ）、“高低”（高さ）、“粗细”（太さ）、“多少”（数量）など。

② VA 型（3 語）

後字が前字を補足する補足関係である。

例：充实（充実）、发达（発達）、迷惑

ここでは、“充实”（充実）、“发达”（発達）、“迷惑”は動詞としても用いられるが、形容詞として使う場合はその動作・行為の結果状態を表している。

③ MA 型 (1 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：不足

ここでは、“足”は形容詞要素であるので、語全体は形容詞になる。そのほかに、“足”は動詞要素としても用いられる。そのとき、“不足”は動詞になる。

④ AV 型 (4 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：完備（完備）、活跃（活躍）、实用（応用）、平行

ここでは、“活跃”（活躍）、“实用”、“平行”は動詞としても使えるが、形容詞として使う場合はその動作・行為が継続している状態を表している。

一方、“完備”（完備）のような形容詞のみ使う語もある。この場合では、動詞要素 V の“备”は「存現動詞（4.2.1.1 の表 3 を参照）」なので、ものが揃っている状態を表す。よって、AV 型の“完備”（完備）は形容詞である。今回の調査では、形容詞のみ使う語は“完備（完備）”1 語であるが、中国語において、ほかには“灵动”（変化に富んでいて、生き生きする）などもある。

⑤ VN 型 (6 語)

後字が前字を補足する補足関係である。

例：彻底（徹底）、安心、成功、集中（集中）、进步（進歩）、统一（統一）

“彻底”（徹底）、“安心”、“成功”、“集中”（集中）、“进步”（進歩）、“统一”（統一）は形容詞として使う場合は、動作・行為の結果状態を表している。この 6 語には、“彻底（徹底）”は形容詞のみの使い方、“安心”、“成功”、“集中”（集中）、“进步”（進歩）、“统一”（統一）は動詞としても使える。

⑥ VV 型 (8 語)

前字と後字が並列関係である。

例：安定、配合、开放（開放）、感动（感動）、调和（調和）、兴奋（興奮）、公开（公開）、洗练（洗練）

ここでは、“安定”、“配合”、“开放”（開放）、“感动”（感動）、“调和”（調和）、“兴奋”（興奮）、“公开”（公開）は動詞としても使えるが、形容詞として使う場合はその動作・行為が継続している状態を表している。一方、“洗练”（洗練）は形容詞のみの使い方である。

以上の内容をまとめると、表 8 になる。中国語では形容詞として用いられる語の前字と

後字には、形容詞要素が含まれる AA 型、VA 型、MA 型、AV 型もあれば、含まれない VN 型、VV 型もある。形容詞要素が含まれない VN 型の場合では、後字が前字を補足して、語全体は動作・行為の結果状態を表しているので、形容詞になる。VV 型の場合では、前字と後字が同じ意味で、語全体は動作・行為が継続している状態を表している。よって、形容詞になる。

表 8 中国語で形容詞になる語の語構成

前字と後字の品詞性		前字と後字の結合関係	語全体の品詞性
形容詞要素が含まれる場合	AA 型	並列関係	形容詞のみ
		対立関係	形容詞のみ
	VA 型	補足関係	動詞としても用いられる
	MA 型	修飾関係	形容詞のみ
	AV 型	修飾関係	一部が動詞としても用いられる
形容詞要素が含まれない	VN 型	補足関係	動詞としても用いられる
	VV 型	並列関係	動詞としても用いられる

4.4.2.3 中国語で動詞になる語の語構成

サ変動詞と対応する中国語において、動詞として用いられ場合、前字と後字の品詞性および結合関係は以下のである。

① VV 型 (304 語)

ア. V_1 と V_2 が並列関係である。(300 語)

例：使用（使用する）、販売（販売する）、消費（消費する）、派遣（派遣する）、学习（学習する）、妊娠（妊娠する）、违反（違反する）、解答（解答する）、失败（失敗する）、上升（上昇する）、开发（開発する）、发展（発展する）、死亡（死亡する）、料理（料理する）、教授（教授する）、生活（生活する）、开始（開始する）、安定（安定する）、开放（開放する）、感动（感動する） など

上記の語の前字と後字はすべて動詞要素であり、同じ意味を表している。具体的に見れば、“使用”（使用する）の前字と後字はともに「使う、用いる」という意味で、動詞要素である。よって、“使用”（使用する）の語全体も動詞として用いられる。“販売”（販売す

る)の前字と後字はともに「売る」という意味で、動詞要素である。よって、“販賣”(販売する)の語全体も動詞として用いられる。他も同様である。上記のような多くの例においては、VV 全体は動詞として用いられるが、4.4.2.1 で述べたように、VV が動作・行為の専有名詞や抽象名詞になる場合もある。

イ. V_1 と V_2 が対立関係である。(4 語)

例：上下(上下する)、呼吸(呼吸する)、加減(加減する)、進出(進出する)

ここでは、“上”と“下”が逆の意味を表しているが、2 つとも動詞要素である。同じように、“呼”と“吸”、“加”と“減”、“進”と“出”も逆の意味を持ち、すべて動詞要素である。VV 全体が対立関係の場合、動詞のみで用いられ、専有名詞や動作・行為の抽象名詞にはならない。

② AV 型 (17 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：実施(実施する)、確認(確認する)、同居(同居する)、平行(平行する)、确立(確立する)、冷凍(冷凍する)、冷蔵(冷蔵する)、活用(活用する)、実現(実現する)、実行(実行する)、強調(強調する)、優先(優先する)、无视(無視する)、重視(重視する)、远征(遠征する)、活躍(活躍する)、实用(応用する)

ここでは、上記の 2 字漢語は中国語においてはすべて動詞として用いられるが、4.4.2.2 で述べたように、AV 型には形容詞として用いられるものもある。それは“完備”(完備)、“活躍”(活躍)、“实用”(応用)、“平行”(平行)である。

③ MV 型 (5 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：再現(再現する)、不足(不足する)、再生(再生する)、专攻(専攻する)、专用(専用する)

ここでは、“再現”(再現する)は「もう一度現れる/現す」という意味であり、“不足”(不足する)は「足りない」という意味である。動詞が後字となる修飾関係においては動詞となる。ただし、“足”は形容詞要素としても使えるので、その場合“不足”は形容詞となる。

④ VN 型 (41 語)

後字が前字を補足する補足関係である。

例：观光(観光する)、出版(出版する)、结婚(結婚する)、登场(登場する)、取材

(取材する)、入学(入学する)、就職(就職する)、融資(融資する)、观战(観戦する)、着陆(着陸する)、出席(出席する)、投稿(投稿する)、录音(録音する)、投資(投資する)、成人(成人する)、入门(入門する)、成功(成功する)、集中(集中する)、进步(進歩する)、统一(統一する) など

ここでは、“观光”(観光する)は「景色を見る」という意味であり、“出版”(出版する)は「本や新聞などを出す」という意味である。他も同様である。すべての語は後字が前字を補足している。意味の中心は動詞要素 V であるので、VN 全体は動詞として用いられる。しかし、4.4.2.1 で述べたように、“投資”(投資)、“录音”(録音)、“成人”、“入门”(入門)のように、前字と後字の結合関係が修飾関係で、名詞要素 N が意味の中心となる場合もある。ここでは、“投資”(投資)、“录音”(録音)、“成人”、“入门”(入門)の語の意味は「投入した資金」、「録音した音声」、「大人になった人」、「始まるのところ」となる。よって、VN 全体は名詞として用いられる。

一方、4.4.2.2 で述べたように、“成功”、“集中”、“进步”(進歩)、“统一”(統一)のような VN 型は形容詞としても用いられる。その場合には、VN 全体では動作・行為の結果状態を表している。

⑤ VA 型 (9 語)

後字が前字を補足する補足関係である。

例：扩大(拡大する)、改善(改善する)、加速(加速する)、延长(延長する)、改良(改良する)、减少(減少する)、证明(証明する)、充实(充実する)、发达(発達する)

ここでは、“扩大”(拡大する)、“改善”(改善する)、“加速”(加速する)、“延长”(延長する)、“改良”(改良する)、“减少”(減少する)、“证明”(証明する)、“充实”(充実する)、“发达”(発達する)は動詞として用いられるが、4.4.2.2 で述べたように、“充实”(充実)、“发达”(発達)のような語は動作・行為の結果状態を表す場合では、VA 全体は形容詞としても用いられる。

⑥ NV 型 (1 語)

前字が後字を修飾する修飾関係である。

例：中止(中止する)

ここでは、“中止”(中止する)は「途中でやめる」という意味で、動詞要素 V が意味の中心となり、NV 全体は動詞として用いられる。

以上の内容をまとめると、表 9 になる。中国語でも動詞として用いられる語の前字と後字は、すべてのタイプに動詞要素が含まれている。この点については、日本語のサ変動詞と同じである。4.4.1 で見たように、日本語のサ変動詞もすべて動詞要素が含まれている。

表 9 中国語で動詞になる語の語構成

前字と後字の品詞性		前字と後字の結合関係	語全体の品詞性
すべてのタイプには動詞要素が含まれる	VV 型	並列関係	一部が名詞としても用いられる
		対立関係	動詞のみ
	AV 型	修飾関係	一部が形容詞としても用いられる
	MV 型	修飾関係	動詞のみ
	VN 型	補足関係	一部が形容詞としても用いられる
	VA 型	補足関係	一部が形容詞としても用いられる
	NV 型	修飾関係	動詞のみ

4.4.2.4 中国語で副詞になる語の語構成

サ変動詞と対応する中国語において、2 字漢語が副詞として用いられる場合は“比较”（比較）という同形漢語 1 語のみである。

MM 型

M_1 と M_2 が並列関係である。

例：比较（比較）

“比较”（比較）は前字、後字ともに副詞要素で、並列関係となっている。もちろん、“比较”（比較）は動詞としても用いられるが、その場合には、前字、後字とも動詞要素となり、VV 型である。

4.5 まとめ

以上、語構成という視点から日本語のサ変動詞と対応する中国語の品詞性およびその中国語を形成する前字と後字の品詞性、結合関係を考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

① 日本語ではサ変動詞として用いられるが、中国語では動詞以外の品詞、名詞、形容詞、副詞としても用いられる。

② サ変動詞と対応する中国語では、名詞になる語には名詞要素が含まれる NN 型、VN 型、AN 型もあり、名詞要素が含まれない VV 型、AA 型もある。名詞要素がない場合、その名詞は専有名詞、または動作・行為の抽象名詞である。形容詞になる語には形容詞要素が含まれる AA 型、VA 型、MA 型、AV 型もあり、形容詞要素が含まない VN 型、VV 型もある。その場合、形容詞は動作・行為の結果・状態を表している。動詞になる語にはすべて動詞要素が含まれている。

以上の内容をまとめると、表 10 になる。

表 10 サ変動詞と対応する中国語の語構成

前字と後字の品詞性	前字と後字の結合関係	2 字同形漢語の中国語における品詞
NN	並列関係	名詞
VN	修飾関係	名詞
	補足関係	動詞、形容詞
AN	修飾関係	名詞
VV	並列関係	動詞、名詞、形容詞
	対立関係	動詞
AA	並列関係	形容詞
	対立関係	名詞、形容詞
AV	修飾関係	動詞、形容詞
MA	修飾関係	形容詞
VA	補足関係	動詞、形容詞
NV	修飾関係	動詞
MV	修飾関係	動詞
MM	並列関係	副詞

第5章 語の構成要素に基づく日中動詞の自他性の異同

動詞の自他性、いわゆる、自動詞と他動詞については、これまでの先行研究に多く取り上げられている。自動詞・他動詞は、意味的にはある動詞がほかの事物に影響を及ぼすかどうか、形式的には目的語を取るかどうかで分類される。以下ではまず他動性について述べ、それから日本語の自動詞と他動詞、中国語の自動詞と他動詞について述べたい。

5.1 動詞の他動性について

他動詞とは自動詞文との関係も含めて、他動詞文に関する言語現象一般を指す¹²。Hopper & Thompson (1980) によれば、他動性は表11で示した10の意味特徴を持ち、それぞれの特徴から他動性の高低が分かる。他動性の高い特徴が見られる動詞ほど他動詞らしく、逆ならば自動詞に近づく。

表11 Hopper&Thompson(1980)の他動性の10の意味特徴

	High (高い)	Low(低い)
Participants (参加者)	2 or more,A and O (2人以上 : 動作主と対象)	1 participant(1人)
Kinsesis (動作様態、動き)	action(動作)	non-action(非動作)
Aspect (アスペクト)	telic(動作限界あり)	atelic(動作限界なし)
Punctuality (瞬間性)	punctual(瞬間)	non-punctual(非瞬間)
Volitionality (意志性)	volitional(意図)	non-volitional(非意図)
Affirmation (肯定)	affirmative(肯定)	negative(否定)
Mode (現実性)	realis(現実)	irrealis(非現実)
Agency (動作主性)	A high in potency(高い)	A low in potency(低い)

¹² 角田太作 (2008)『世界の言語と日本語 - 言語類型論から見た日本語 - 』くろしお出版 67 頁

Affectedness of O (被動作性)	O totally affected(全体的に影響)	O not affected(部分的に影響)
Individuation of O (対象の個性性)	O high individuated(高い)	O not individuated(低い)

これらの意味特徴については後に様々な検討がなされた。例えば、「被動作性」について、角田（2008など）の考えでは、動作が対象に及ぶかどうかのみならず、対象が変化するかどうかである。

① 太郎 が 箱 を 壊した。

② 太郎 が 箱 に 触った。

対格「を」が使われている①の文では、太郎の動作が箱に及び、箱が壊れるという変化が起こった。一方、与格「に」が用いられている②では、動作は箱に及んだが、箱が変化したかどうかは分からない。①のように、動作が対象に及び、かつ変化を起こす場合の動詞は他動詞である。

また、これらの意味特徴のうちの1つが高くて、他の意味特徴も高いとは限らない。

③ I **hit** him. (私は彼を殴った／彼にぶつかった)

④ I **hit at** him. (私は彼に殴りかかった)

③の **hit** は目的語を取っている所以他動詞であるが、「ぶつかった」という意味の場合、意図的な行為でなくても言える文である。意志性が低くてもよい。④は意図的な動作であるが、彼に命中しなくても言える。つまり、被動作性が低くてもよい。このように、英語では「意志性」と「被動作性」が食い違う場合、被動作性が高ければ他動詞になるが、意志性が高くて必ずしも他動詞にはならない。

5.2 日本語の他動詞と自動詞

日本語の自動詞・他動詞の議論では、目的語としてヲ格が取り上げられる。奥津（1967）では、「動詞の自・他は、文構成の上で、自動詞は目的語をとらず、他動詞は目的語をとる、という著しいちがいのあることを認めなければならない。そして名詞につく格助詞の「を」

が、目的語の目印となる。」と述べ、森田（1987）では、「他の対象に対して働き掛けが他動詞で、その主体自体の働きが自動詞だと一応は説明する…その動詞が自動詞か他動詞かを弁別する一つの目安として、ヲ格の目的語を取り得るか否かということが判定基準となっている」と述べている。つまり、両者の考えをふまえれば、形式的には他動詞はヲ格を取り、自動詞はヲ格を取らないと言える。

例：太郎が花子**を**殺す。

太郎が花子**に**触った。

以上のように、「太郎が花子を殺す」の場合、「殺す」はヲ格を取っているので、他動詞である。「太郎が花子に触った」の場合、「触る」は二格を取っている。ヲ格ではないので、自動詞である。

しかし、ヲ格を取るのは必ずしも他動詞とは限らない。例えば、「空を飛ぶ」、「成田を発つ」などのように、「飛ぶ」、「発つ」もヲ格を取るが、森田（1995）によると、意味論的に見れば、他動詞ではないとされる。これらのヲ格は、主語の移動動作の実現する場所・空間を示す。つまり、経路や起点のヲ格を取る動詞は自動詞という位置付けになる。よって、他動詞にとって、ヲ格を取る形式上の特徴は必ずしも自他弁別の決め手とは限らない。つまり他動詞においては、動詞が表す動作・行為が「他の対象に対して働きかけ」があるかどうかも含めて考えなければならない。

一方、角田（2008）では、「触る」、「噛みつく」などのような、二格を取る一部の動詞を受動文成立の可能性から他動詞と見る考え方を示唆している。そして、角田は他動詞文の原型の定義¹³に基づいて、他動詞の原型を「相手に及び、かつ、相手に変化を起こす動作を表す動詞」（角田 2008:77）と定義している。そして、形の側面では、「が＋を」という構文ができるか、直接受動文、間接受動文、再帰文と相互文ができるかによって、原型的他動詞であるかを判断する。つまり、以下で示した項目が多ければ多いほど他動性が高い。また、他動性が高いと見られる動詞ほど、他動詞の原型に近づくことになる。

意味的側面：①参加者二人以上、②動作が及ぶ、③変化を起こす

形式的側面：①「が＋を」、②直接受動文、③間接受動文、④再帰文、⑤相互文

他方、日本語の動詞は和語動詞と漢語動詞に分けられ、和語動詞はさらに有対動詞と無対動詞に分けられる。有対動詞は「始まる（自動詞）/始める（他動詞）」、「開く（自動詞）

¹³ 角田（2008）は他動詞文の原型を「参加者が二人（動作者と動作対象）又はそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。（動作者と対象は無生物の場合もある。したがって、二人でなく、二つの場合もある。）」と定義している。

「開ける（他動詞）」などのように、意味・形態上、対をなす動詞を指す。それに対して、無対動詞は意味・形態上、対をなしていない動詞を指す。漢語動詞には有対・無対という区別がない。（建石 2009 などを参照）その代わりに、「～が開始する（自動詞）/～を開始する（他動詞）」、「～が出店する（自動詞）/～を出店する（他動詞）」などのような自動詞と他動詞の両方で使える自他両用動詞が存在している。

本研究で扱うサ変動詞は漢語動詞の範疇であり、自動詞、他動詞と自他両用動詞がある。そして、中国語母語話者が日本語のサ変動詞の自他性を判断する際、ヲ格を重要な手がかりとすることから、本研究では自他性の判断基準については、形式的にはヲ格を取り、その上で、意味的にはそのヲ格が作用・動作・行為の対象を表し、対象に対する働きかけを意味する場合に限定する。よって、受動文などの形成が可能な二格を取る動詞については別の機会に譲ることとする。

日本語の自動詞については、一般に 2 つのタイプがあるとされる。つまり、意図的な動作を行う「動作主 (Agent)」を主語に取る非能格自動詞、例えば、「踊る」、「読書する」などと「対象 (Theme)」を主語に取り、変化などを表す非対格自動詞、例えば、「枯れる」、「爆発する」である（影山 1993）。この区別を分析に取り入れることについては別の機会に譲り、本研究では、中国語との対照を目的語の有無に焦点を当てて行うこととする。

5.3 中国語の他動詞と自動詞

中国語の動詞は目的語（宾语）が取れるかどうかで「他動詞（及物动词）」、「自動詞（不及物动词）」に分けることができる。「他動詞（及物动词）」は目的語（宾语）を取ることができ、「自動詞（不及物动词）」は目的語（宾语）を取ることができない。日本語の他動詞と自動詞の多くは、「始める・始まる」、「壊す・壊れる」などのように対をなしているが、中国語の動詞にはこのような形はなく、他動詞と自動詞の多くは“开始比赛”（試合を始める）・“比赛开始”（試合が始まる），“集合学生”（学生を集める）・“学生集合”（学生が集まる）などのように同形であり、位置によって区別をする。

一方、“一组唱三人”（1 グループでは、3 人を出して、歌う），“前面来了一个人”（前から一人がやってきた）などの場合、前述のように、中国語の動詞の自他性の弁別が位置によるなら、動詞“唱”の目的語は“三人”で、動詞“来”の目的語は“一个人”である。しかし、“唱”、“来”は自動詞であるので、目的語を取ることができない。では、ここで出てきた“三人”と“一个人”は一体何であろうか。

朱（1982）では、目的語（宾语）は「真目的語（真宾语）」と「準目的語（准宾语）」に分けられる。準目的語（准宾语）は動作・行為の回数を表す動作量目的語（动量宾语）、動作・行為の行われる時間、あるいは状態の持続する時間を表す時間量目的語（时量宾语）、比較の結果を表す数量目的語（数量宾语）を含むと指摘している。現在の中国語文法（林 1991、など）では、準目的語（准宾语）は朱（1982）が述べた 3 種類以外、さらに、存在・出現・消滅を表す存現目的語（存现宾语）と動作・行為の帰着点や運動の終点・起点を表す場所目的語（场所宾语）を加えられている。

例（下線が目的語）：

走 <u>一趟</u> （一度出かける）、看 <u>一眼</u> （一目見る）など	動作量目的語（动量宾语）
学 <u>一年</u> （一年間学ぶ）、等 <u>一会儿</u> （しばらく待つ）など	時間量目的語（时量宾语）
长了 <u>三尺</u> （三尺長くなった）、多 <u>十倍</u> （十倍多くなる）	数量目的語（数量宾语）
生产队里死了 <u>一头牛</u> 。（生産隊で牛が一頭死んだ。）	存現目的語（存现宾语）
我明天去 <u>北京</u> 。（私は明日北京に行く。）	場所目的語（场所宾语）

真目的語（真宾语）は「準目的語（准宾语）」以外の目的語（宾语）となる。他動詞は真目的語（真宾语）と準目的語（准宾语）、その両方を取ることができ、自動詞は真目的語（真宾语）は取れないが、準目的語（准宾语）は取れる。前述の“一组唱三人”（1 グループでは、3 人を出して、歌う），“前面来了一个人”（前から一人がやってきた）などの場合、“三人”と“一个人”は自動詞“唱”、“来”の準目的語（准宾语）である。

一方、他動詞が目的語（宾语）を取るといっても、正しくは真・準の目的語（宾语）を取ることができるのであって、すべての他動詞がいかなる場合にも目的語（宾语）を持つとは限らない。文脈上それと分かれば、しばしば目的語（宾语）なしに他動詞を用いるが、それでも他動詞であることに変わりはない。（林 1991）

例：你看见（他）了吗？（君は「彼」を見ましたか。）

看见了。（見ました。）

ただし、“具有～”（～をそなえている），“成为～”（～になる）など、目的語（宾语）を取ってはじめてその意味が整う他動詞もあり、この場合に目的語（宾语）が欠かせない。

本研究では、真目的語（真宾语）を取るかどうかを中国語の自動詞・他動詞を区別する基準とする。

5.4 構成要素に基づく日中動詞の自他性について

5.4.1 VV 型における日中動詞の自他性

5.4.1.1 日本語のサ変動詞の VV 型

野村（1999）によれば、日本語の 2 字漢語の前字、後字がともに V の場合、2 字の結合関係には「修飾関係」、「並列関係」、「対立関係」がある。本研究で分析するデータ上位の 2 字同形漢語には修飾関係がないため、以下では V_1 と V_2 が並列関係と対立関係の場合のみ考察する。なお、対立関係の場合は並列関係の場合に比べ、サ変動詞の用例は少ない。以下、日常的使用について判断の難しい用例に関しては、出典を明記する。

① V_1 と V_2 が並列関係の場合

ア. V_1 と V_2 がともに他動詞の場合

A. VV 全体が他動詞となる場合

例：使用する、学習する、販売する など

「使用する」の V_1 「使」は「～を使う」のように、他動詞の用法を持つ。 V_2 「用」は「～を用いる」のように、他動詞の用法を持つ。「使」と「用」による 2 字漢語のサ変動詞「使用する」も「～を使用する」のように、他動詞となる。他も同様な解釈が可能。なお、「販売する」の「販」は「ひさぐ」と読む。

B. VV 全体が自動詞となる場合

例：恋愛する、衝突する（本データでは 2 語のみ）

「恋愛する」の V_1 「恋」は「～を恋う」のように、他動詞の用法を持ち、 V_2 「愛」は「～をいとおしむ」のように、他動詞の用法を持つ。しかし両方とも他動詞の漢語を用いた「恋愛する」は自動詞となる。「衝突する」の V_1 と V_2 がともに「～をつく」となり、他動詞の用法を持つが、VV 全体は「～に衝突する」のように、二格を取り、自動詞と見なせる。

上記の AB をまとめると、 V_1 と V_2 が並列関係で、 V_1 と V_2 が 2 つとも他動詞の場合には、VV 全体は他動詞、または自動詞となる。

イ. V_1 と V_2 がともに自動詞の場合

V_1 と V_2 がともに自動詞の場合では、VV 全体が自動詞となる場合しかない。

例：関係する、存在する など

「関係する」の V_1 「関」は「～に/～が関わる」のような自動詞の用法を持ち、 V_2 「係」は「～に/～に係わる」のような自動詞の用法を持つ。「関係する」は「～と関係する」の

ように自動詞となる。他も同様な解釈が可能。

ウ. V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合

A. VV 全体が他動詞となる場合

例：開発する、消費する（本データでは2語のみ）

「開発する」の V_1 「開」は「～が開く」のような自動詞の用法もあり、「～を開ける」のような他動詞の用法もある。 V_2 「発」は「～が/～を発する」のように、自動詞と他動詞の用法を持つ。「開発する」は「～を開発する」のように、他動詞となる。「消費する」の V_1 「消」は「～が消える」のような自動詞の用法もあり、「～を消す」のような他動詞の用法もある。 V_2 「費」は「～が費える」のような自動詞の用法もあり、「～を費やす」のような他動詞の用法もある。「消費する」は「～を消費する」のように、他動詞となる。

B. VV 全体が自動詞となる場合

例：解答する、出現する、進出する など

「解答する」の V_1 「解」は「～が解ける」のような自動詞の用法もあり、「～を解く」のような他動詞の用法もある。 V_2 「答」は「～に答える」のような自動詞の用法もあり、「～を答える」（用例は少ないが、例えば「真実を答える」、「正解を答える」など）のような他動詞の用法もある。「解答する」は「～に解答する」のように、自動詞となる。他も同様な解釈が可能。

C. VV 全体が自他両用動詞となる場合

例：展開する、移動する、連続する、露出する など

「展開する」の V_1 「展」は「～がひろがる」のような自動詞の用法もあり、「～をひろげる」のような他動詞の用法もある。 V_2 「開」は「～が開く」のような自動詞の用法もあり、「～を開ける」のような他動詞の用法もある。「展開する」は「～が/～を展開する」のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。他も同様な解釈が可能。

上記の ABC をまとめると、 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合には、VV 全体は自動詞、他動詞と自他両用動詞の3つの用法となる。

エ. V_1 が自動詞、 V_2 が自他両用動詞の場合

V_1 が自動詞で、 V_2 が自他両用動詞の場合では、VV 全体が自動詞となる場合しかない。

例：参加する、死亡する（本データでは2語のみ）

「参加する」のV₁「参」は「～に参る」のような自動詞の用法を持つ。V₂「加」は「～に/～が加わる」のような自動詞の用法もあり、「～を加える」のような他動詞の用法もある。「参加する」は「～に参加する」のように、自動詞となる。「死亡する」のV₁「死」は「～が死ぬ」のような自動詞の用法を持つ。V₂「亡」は「～が亡びる」のような自動詞の用法もあり、「～を亡ぼす」のような他動詞の用法もある。「死亡する」は「～が死亡する」のように、自動詞となる。

オ. V₁が他動詞、V₂が自他両用動詞の場合

A. VV全体が他動詞となる場合

例：設備する、促進する、認定する、償還する など

「設備する」のV₁「設」は「～を設ける」のような他動詞の用法を持つ。V₂「備」は「～が備わる」のような自動詞の用法もあり、「～を備える」のような他動詞の用法もある。「設備する」は他動詞となる。例えば、「空気浄化装置を設備する」（『岩波国語辞典（第7版）』）など。他も同様な解釈が可能。なお、「償還する」の「償」は「つぐなう」と読む。

B. VV全体が自他両用動詞となる場合

例：継続する、失敗する、接続する など

「継続する」のV₁「継」は「～を継ぐ」のような他動詞の用法を持つ。V₂「続」は「～が続く」のような自動詞の用法もあり、「～を続ける」のような他動詞の用法もある。「継続する」は「～が/～を継続する」のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。他も同様な解釈が可能。

上記のABをまとめると、V₁とV₂が並列関係で、V₁が他動詞、V₂が自他両用動詞の場合には、VV全体は他動詞、または自他両用動詞となる。

カ. V₁が自他両用動詞、V₂が他動詞の場合

A. VV全体が他動詞となる場合

例：表示する、開設する、支配する など

「表示する」のV₁「表」は「～が表れる」のような自動詞の用法もあり、「～を表す」のような他動詞の用法もある。V₂「示」は「～を示す」のような他動詞の用法を持つ。「表示する」は「～を表示する」のように、他動詞となる。他も同様な解釈が可能。なお、「支

配する」の「支」は「～を支える」のほかに、「深酒は健康に支える」(『明鏡国語辞典(第2版)』)といった自動詞用法もある。

B. VV 全体が自他両用動詞となる場合

例：決断する(本データでは1語のみ)

「決断する」のV₁「決」は「～が決まる」のような自動詞の用法もあり、「～を決める」のような他動詞の用法もある。V₂「断」は「～を断る」のような他動詞の用法を持つ。「決断する」は「～が/～を決断する」のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。

上記のABをまとめると、V₁とV₂が並列関係で、V₁が自他両用動詞、V₂が他動詞の場合には、VV全体は他動詞、または自他両用動詞となる。

キ. V₁が自他両用動詞、V₂が自動詞の場合

V₁が自他両用動詞で、V₂が自動詞の場合では、VV全体が自動詞となる場合しかない。

例：休憩する、挑戦する、満足する など

「休憩する」のV₁「休」は「～が休む」のような自動詞の用法もあり、「～を休める」のような他動詞の用法もある。V₂「憩」は「～が憩う」のような自動詞の用法を持つ。「休憩する」は「～が休憩する」のように、自動詞となる。他も同様な解釈が可能。

② V₁とV₂が対立関係の場合

ア. V₁とV₂がともに他動詞の場合

V₁とV₂がともに他動詞の場合では、VV全体が自動詞となる場合しかない。

例：呼吸する(本データでは1語のみ)

「呼吸する」のV₁「呼」は普通、「～を呼ぶ」という他動詞となる。V₂「吸」は「～を吸う」のような他動詞の用法を持つ。しかし、「呼吸する」は「～が呼吸する」のように、自動詞となる。

イ. V₁とV₂がともに自動詞の場合

V₁とV₂がともに自動詞の場合では、VV全体が自動詞となる場合しかない。

例：勝負する(本データでは1語のみ)

「勝負する」のV₁「勝」は「～が/～に勝つ」のような自動詞の用法を持つ。V₂「負ける」は「～が/～に負ける」のような自動詞の用法を持つ。「勝負する」は「～が/～と勝負

する」のように、自動詞となる。

ウ. V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合

A. VV 全体が他動詞となる場合

例：加減する（本データでは1語のみ）

「加減する」の V_1 「加」は「～が/～に加わる」のような自動詞の用法もあり、「～を加える」のような他動詞の用法もある。 V_2 「減」は「～が減る」のような自動詞の用法もあり、「～を減らす」のような他動詞の用法もある。「加減する」は「～を加減する」のように、他動詞となる。

B. VV 全体が自他両用動詞となる場合

例：上下する（本データでは1語のみ）

「上下する」の V_1 「上」は「～が上がる」のような自動詞の用法もあり、「～を上げる」のような他動詞の用法もある。 V_2 「下」は「～が下がる」のような自動詞の用法もあり、「～を下げる」のような他動詞の用法もある。「上下する」は「～が上下する」「～を上下する」のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。

上記の AB をまとめると、 V_1 と V_2 が対立関係で、 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合、VV 全体は他動詞、または自他両用動詞となる。

③ 日本語のサ変動詞の VV 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 12 になる。日本語のサ変動詞の VV 型は V_1 と V_2 の結合関係は並列関係、または対立関係となる。 V_1 と V_2 が並列関係となる際、 V_1 と V_2 がともに他動詞の場合では、VV 全体は他動詞または自動詞となる。 V_1 と V_2 がともに自動詞では、VV 全体は自動詞となる。 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合では、VV 全体は他動詞、自動詞または自他両用動詞となる。 V_1 が自動詞で、 V_2 が自他両用動詞の場合では、VV 全体は自動詞となる。 V_1 が他動詞で、 V_2 が自他両用動詞の場合では、VV 全体は他動詞または自他両用動詞となる。 V_1 が自他両用動詞で、 V_2 が他動詞の場合では、VV 全体は他動詞または自他両用動詞となる。 V_1 が自他両用動詞で、 V_2 が自動詞の場合では、VV 全体は自動詞となる。 V_1 と V_2 が対立関係となる際、 V_1 と V_2 がともに他動詞の場合では、VV 全体は自動詞となる。 V_1 と V_2 がともに自動詞では、VV 全体も自動詞となる。 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合では、VV 全体は他動詞または自他両用動詞となる。

表 12 日本語のサ変動詞の VV 型語全体の自他性と V の自他性

V ₁ 、V ₂ の結合関係	V ₁ 、V ₂ の自他性	VV 全体の自他性
並列関係	V ₁ 、V ₂ ともに他動詞	自動詞、他動詞
	V ₁ 、V ₂ ともに自動詞	自動詞
	V ₁ 、V ₂ ともに自他両用動詞	自動詞、他動詞、自他 両用動詞
	V ₁ ：自動詞 V ₂ ：自他両用動詞	自動詞
	V ₁ ：他動詞 V ₂ ：自他両用動詞	他動詞、自他両用動詞
	V ₁ ：自他両用動詞 V ₂ ：他動詞	他動詞、自他両用動詞
	V ₁ ：自他両用動詞 V ₂ ：自動詞	自動詞
対立関係	V ₁ 、V ₂ ともに他動詞	自動詞
	V ₁ 、V ₂ ともに自動詞	自動詞
	V ₁ 、V ₂ ともに自他両用動詞	他動詞、自他両用動詞

5.4.1.2 中国語の動詞の VV 型

① V₁と V₂が並列関係の場合

ア. V₁と V₂がともに他動詞の場合

V₁と V₂がともに他動詞の場合では、VV 全体が他動詞となる場合しかない。

例：使用（使用する）、販売（販売する）、参加（参加する）、学習（学習する） など

“使用”（使用する）の V₁ “使”は“使劲”（力を使う）のような他動詞の用法を持つ。

V₂ “用”は“用力”（力を使う）のような他動詞の用法を持つ。“使用”（使用する）は“使用資金”（資金を使用する）のように、他動詞となる。“販売”（販売する）の V₁ “販（販）”は“販药材”（薬を売る）のような他動詞の用法を持つ。V₂ “卖”（売）は“卖东西（物を売る）”のような他動詞の用法を持つ。“販売”（販売する）は“贩卖水果”（果物を販売する）のように、他動詞となる。他も同様な解釈が可能。

イ. V₁と V₂がともに自動詞の場合

V₁と V₂がともに自動詞の場合では、VV 全体が自動詞となる場合しかない。

例：妊娠（妊娠する）、生活（生活する）（本データでは2語のみ）

“妊娠”（妊娠する）のV₁“妊”とV₂“娠”は2つとも「妊娠する」という意味で、自動詞の用法を持つ。“妊娠”（妊娠する）も自動詞となる。“生活”（生活する）のV₁“生”とV₂“活”は2つとも「生きる」という意味で、自動詞の用法を持つ。“生活”（生活する）も自動詞となる。

ウ. V₁とV₂がともに自他両用動詞の場合

A. VV全体が他動詞となる場合

例：違反（違反する）、解答（解答する）（本データでは2語のみ）

“違反”（違反する）のV₁“违”（違）は“事与愿违”（事の成り行きが希望と裏腹になる。意図したとおりに事が運ばない）のような自動詞の用法もあり、“违法”（法律を犯す）のような他動詞の用法もある。V₂“反”は“官逼民反”（役人の圧迫で一撥が起こる）のような自動詞の用法もあり、“反封建”（封建制度、封建的な思想を反対する）のような他動詞の用法もある。“違反”（違反する）は“违反法律”（法律を犯す）のように、他動詞となる。“解答”（解答する）のV₁“解”は“谜底解开了”（謎が解ける）のような自動詞の用法もあり、“解谜语”（謎を解く）のような他動詞の用法もある。V₂“答”は“一问一答”（聞いて答える）のような自動詞の用法もあり、“答问”（問題を答える）のような他動詞の用法もある。“解答”（解答する）は“解答问题”（問題を答える）のように、他動詞となる。

B. VV全体が自動詞となる場合

例：失败（失敗する）、上升（上昇する）、冲突（衝突する）など

“失败”（失敗する）のV₁“失”は“机会失去了”（チャンスがなくなった）のような自動詞の用法もあり、“失血”（血を失う）のような他動詞の用法もある。V₂“败”（敗）は“战败”（戦いが負けた）のような自動詞の用法もあり、“大败侵略军”（侵略軍をやっつける）のような他動詞の用法もある。“失败”（失敗する）は“计划失败”（計画が失敗する）のように、自動詞となる。“上升”（上昇する）のV₁“上”は“他上去了”（彼が上がった）のような自動詞の用法もあり、“上楼”（階段を上る）のような他動詞の用法もある。V₂“升”（昇）は“旭日东升”（旭日が昇る）のような自動詞の用法もあり、“升旗”（旗を上げる）のような他動詞の用法もある。“上升”（上昇する）は“气温上升”（気温が上がる）のように、自動詞となる。他も同様な解釈が可能。

C. VV 全体が自他両用動詞となる場合

例：开发（開発する）、发展（発展する）、展开（展開する）など

“开发”（開発する）の V₁ “开” は“花开”（花が咲く）のような自動詞の用法もあり、“开路”（道を作る）のような他動詞の用法もある。V₂ “发”（発）は“面发了”（小麦粉が発酵した）のような自動詞の用法もあり、“发电”（発電する）のような他動詞の用法もある。“开发”（開発する）は“开发荒山”（荒れ山を開拓する）のように、他動詞としても、“人才开发”（人材を発掘し利用する）のように、自動詞としても用いられる。“发展”（発展する）の V₁ “发”（発）は“开发”（開発する）の V₂ “发” と同じように、自動詞の用法と他動詞の用法がある。V₂ “展” は“愁眉不展”（眉をひそめる）のような自動詞の用法もあり、“展眉”（眉をひろげる）のような他動詞の用法もある。“发展”（発展する）は“经济发展”（経済が発展する）のように、自動詞としても、“发展经济”（経済を発展させる）のように、他動詞としても用いられる。他も同様な解釈が可能。

上記の ABC をまとめると、V₁ と V₂ が並列関係で、V₁ と V₂ がともに自他両用動詞の場合には、VV 全体は他動詞、自動詞、または自他両用動詞となる。

エ. V₁ が自動詞、V₂ が自他両用動詞の場合

V₁ が自動詞、V₂ が自他両用動詞の場合では、VV 全体が自動詞となる場合しかない。

例：死亡（死亡する）（本データでは 1 語のみ）

“死亡”（死亡する）の V₁ “死” は“小狗死了”（犬が死んだ）のような自動詞の用法を持つ。V₂ “亡” は“家破人亡”（一家が離散し肉親を失う）のような自動詞の用法もあり、“亡国”（国を亡ぼす）のような他動詞の用法もある。“死亡”（死亡する）は“因车祸死亡”（交通事故でなくなった）のように、自動詞となる。

オ. V₁ が他動詞、V₂ が自他両用動詞の場合

A. VV 全体が他動詞となる場合

例：禁止（禁止する）、报道（報道する）、认定（認定する）など

“禁止”（禁止する）の V₁ “禁” は“禁渔”（漁業を禁ずる）のような他動詞の用法を持つ。V₂ “止” は“步伐不止”（足並みが止まらない）のような自動詞の用法もあり、“止步”（歩みを止める）のような他動詞の用法もある。“禁止”（禁止する）は“禁止游泳”（水泳を禁止する）のように、他動詞となる。“报道”（報道する）の V₁ “报”（報）は“报时”

（時間を報告する）のような他動詞の用法を持つ。V₂ “道”は“他道：‘很好！’”（とてもいいと彼が言う）のような自動詞の用法もあり、“道谢”（感謝の意を言う）のような他動詞の用法もある。“报道”（報道する）は“报道消息”（消息を報道する）のように、他動詞となる。他も同様な解釈が可能。

B. VV 全体が自他両用動詞となる場合

例：竞争（競争する）、计算（計算する）（本データでは2語のみ）

“竞争”（競争する）のV₁ “竞”（競）は“竞岗”（職を争う）のような他動詞の用法を持つ。V₂ “争”は“意见已经一致，不必再争”（意見がすでに一致しているので、争う必要がない）のような自動詞の用法もあり、“争冠军”（優勝を争う）のような他動詞の用法もある。“竞争”（競争する）は“贸易竞争（貿易で争う）”のように、自動詞としても、“竞争第一名”（一位を競争する）のように、他動詞としても用いられる。“计算”（計算する）のV₁ “计”（計）は“计时”（時間を計る）のような他動詞の用法を持つ。V₂ “算”は“心算”（頭の中で計算する）のような自動詞の用法もあり、“算命”（占う）のような他動詞の用法もある。“计算”（計算する）は“先计算再做”（計算してからする）のように、自動詞としても、“计算人数”（人数を計る）のように、他動詞としても用いられる。

上記のABをまとめると、V₁とV₂が並列関係で、V₁が他動詞、V₂が自他両用動詞の場合には、VV全体は他動詞、または自他両用動詞となる。

カ. V₁が自他両用動詞、V₂が他動詞の場合

A. VV 全体が他動詞となる場合

例：请求（請求する）、解说（解説する）（本データでは2語のみ）

“请求”（請求する）のV₁ “请”（請）は“你请”（お先にどうぞ）のような自動詞の用法もあり、“请假”（休みを取る）のような他動詞の用法もある。V₂ “求”は“求人”（人を求める）のような他動詞の用法を持つ。“请求”（請求する）は“请求援助”（援助を求める）のように、他動詞となる。“解说”（解説する）のV₁ “解”（解）は“谜底解开了”（謎が解いた）のような自動詞の用法もあり、“解谜”（謎を解ける）のような他動詞の用法もある。V₂ “说”は“说话”（話をする）のような他動詞の用法を持つ。“解说”（解説する）は“解说机器的构造”（機械の構造を説明する）のように、他動詞となる。

B. VV 全体が自他両用動詞となる場合

例：思考（思考する）、集合（集合する）、扫除（掃除する）など

“思考”（思考する）の V_1 “思” は“他在深思”（彼は深く考える）のような自動詞の用法もあり、“思家”（ホームシックをする）のような他動詞の用法もある。 V_2 “考” は“考古”（考古学に取り組む）のような他動詞の用法を持つ。“思考”（思考する）は“独立思考”（単独で考える）のように、自動詞としても、“思考問題”（問題を考える）のように、他動詞としても用いられる。“集合”（集合する）の V_1 “集” は“大家集在一起”（みんなが集まる）のような自動詞の用法もあり、“集郵”（切手を集める）のような他動詞の用法もある。 V_2 “合” は“合力”（力を合わせる）のような他動詞の用法を持つ。“集合”（集合する）は“同学们已经在操场集合了”（皆さんはすでに運動場に集まった）、“集合各种材料，加以分析”（さまざまな材料を集めて、分析する）のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。他も同様な解釈が可能。

上記の AB をまとめると、 V_1 と V_2 が並列関係で、 V_1 が自他両用動詞、 V_2 が他動詞の場合には、VV 全体は他動詞、または自他両用動詞となる。

キ. V_1 が自他両用動詞、 V_2 が自動詞の場合

V_1 が自他両用動詞、 V_2 が自動詞の場合では、VV 全体が自動詞となる場合しかない。

例：存在（存在する）（本データでは 1 語のみ）

“存在”（存在する）の V_1 “存” は“父母俱存”（両親がいる）のような自動詞の用法もあり、“存粮”（食べ物を保存する）のような他動詞の用法もある。 V_2 “在” は“他不在”（彼がいない）のような自動詞の用法を持つ。それらを用いた“存在”（存在する）は“这种生物不存在”（この生物は存在しない）のように、自動詞となる。

② V_1 と V_2 が対立関係の場合

ア. V_1 と V_2 がともに他動詞の場合

A. VV 全体が自動詞となる場合

例：呼吸（呼吸する）（本データでは 1 語のみ）

“呼吸”（呼吸する）の V_1 “呼” は“呼气”（息を吐く）のような他動詞の用法を持つ。 V_2 “吸” も“吸气”（息を吸う）のような他動詞の用法を持つ。しかし、“呼吸”（呼吸する）は“金鱼在呼吸”（金魚が呼吸している）のように、自動詞となる。

B. VV 全体が他動詞となる場合

例：加減（加減する）（本データでは 1 語のみ）

“加減”（加減する）の V_1 “加”は“加水”（水を加える）のような他動詞の用法を持つ。 V_2 “減”は“減数量”（量を減らす）のような他動詞の用法を持つ。“加減”（加減する）は“注意加減衣服”（服を着たり、脱いだりするのに気をつける）のように、他動詞となる。

上記の AB をまとめると、 V_1 と V_2 が対立関係で、 V_1 と V_2 がともに他動詞の場合には、VV 全体は自動詞、または他動詞となる。

イ. V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合

V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合では、VV 全体が自他両用動詞となる場合しかない。

例：上下（上下する）、进出（進出する）（本データでは2語のみ）

“上下”（上下する）の V_1 “上”は“他上去了”（彼があがった）のような自動詞の用法もあり、“上楼”（階段を上る）のような他動詞の用法もある。 V_2 “下”は“他下去了”（彼が降りた）のような自動詞の用法もあり、“下楼”（階段から下りる）のような他動詞の用法もある。“上下”（上下する）は“山上修了公路，汽车上下很方便”（山の上で道路が整備されたので、車で登ったり、降りたりするのが便利だ）のように、自動詞としても、“上下楼太累”（階段を登ったり、降りたりするのは疲れる）のように、他動詞としても用いられる。“进出”（進出する）の V_1 “进”は“他进来了”（彼が入った）のような自動詞の用法もあり、“进屋”（部屋に入る）のような他動詞の用法もある。 V_2 “出”は“他出去了”（彼が出かけた）のような自動詞の用法もあり、“出门”（門を出る）のような他動詞の用法もある。“进出”（進出する）は“进出这个门”（この門を入ったり、出たりする）のように、他動詞としても、“资金进出”（資金を儲けたり、使ったりする）のように、自動詞としても用いられる。

③ 中国語の動詞の VV 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 13 になる。中国語の動詞の VV 型は V_1 と V_2 の結合関係は並列関係、または対立関係となる。 V_1 と V_2 が並列関係となる場合、 V_1 と V_2 がともに他動詞の場合では、VV 全体も他動詞として用いられる。 V_1 と V_2 がともに自動詞では、VV 全体も自動詞として用いられる。 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合では、VV 全体は他動詞、自動詞と自他両用動詞として用いられる。 V_1 が自動詞で、 V_2 が自他両用動詞の場合では、VV 全体は自動詞として用いられる。 V_1 が他動詞で、 V_2 が自他両用動詞の場合では、VV 全体は他動詞、または自他両用動詞として用いられる。 V_1 が自他両用動詞で、 V_2 が他

動詞の場合では、VV 全体は他動詞、または自他両用動詞として用いられる。V₁が自他両用で、V₂が自動詞の場合では、VV 全体は自動詞として用いられる。V₁と V₂が対立関係となる場合、V₁と V₂がともに他動詞の場合では、VV 全体は自動詞、または他動詞として用いられる。V₁と V₂がともに自他両用動詞の場合では、VV 全体は自他両用動詞として用いられる。

表 13 中国語の動詞の VV 型語全体の自他性と V の自他性

V ₁ 、V ₂ の結合関係	V ₁ 、V ₂ の自他性	VV 全体の自他性
並列関係	V ₁ 、V ₂ ともに他動詞	他動詞
	V ₁ 、V ₂ ともに自動詞	自動詞
	V ₁ 、V ₂ ともに自他両用動詞	自動詞、他動詞、自他両用動詞
	V ₁ ：自動詞 V ₂ ：自他両用動詞	自動詞
	V ₁ ：他動詞 V ₂ ：自他両用動詞	他動詞、自他両用動詞
	V ₁ ：自他両用動詞 V ₂ ：他動詞	他動詞、自他両用動詞
	V ₁ ：自他両用動詞 V ₂ ：自動詞	自動詞
対立関係	V ₁ 、V ₂ ともに他動詞	自動詞、他動詞
	V ₁ 、V ₂ ともに自他両用動詞	自他両用動詞

5.4.2 AV 型における日中動詞の自他性

5.4.2.1 日本語のサ変動詞の AV 型

① V が他動詞の場合

V が他動詞の場合では、AV 全体が他動詞となる場合しかない。

例：重視する、確認する、無視する など

「重視する」の動詞要素 V は「～を見る」のような他動詞用法を持つ。「重視する」は「重く見る」という意味で、「～を重視する」のように他動詞として用いられる。「確認する」の動詞要素 V は「～を認める」のような他動詞用法を持つ。「確認する」は「はっきり確かめる」という意味で、「～を確認する」のように、他動詞として用いられる。他も同様な解釈が可能。

② V が自動詞の場合

V が自動詞の場合では、AV 全体が自動詞となる場合しかない。

例：同居する、平行する など

「同居する」の動詞要素 V は「～が/に居る」のような自動詞用法を持つ。「同居する」は「一緒に住む」という意味で、「～が同居する」のように、自動詞として用いられる。「平行する」の動詞要素 V は「～が行く」のような自動詞用法を持つ。「平行する」は「同一平面上にある二直線が交わらない。また、空間の直線と平面、あるいは平面と平面が交わらない」という意味で、「～が平行する」のように、自動詞として用いられる。他も同様な解釈が可能。

③ V が自他両用動詞の場合

V が自他両用動詞の場合では、AV 全体が自他両用動詞となる場合しかない。

例：確立する（本データでは 1 語のみ）

「確立する」の動詞要素 V 「立」は単独では「立つ」という自動詞の形もあり、「立てる」という他動詞の形もある。AV 全体になると、「～が確立する」、「～を確立する」のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。

④ 日本語のサ変動詞の AV 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 14 になる。日本語のサ変動詞の AV 型は動詞要素 V が他動詞の場合、AV 全体は他動詞として用いられる。V が自動詞の場合、AV 全体は自動詞として用いられる。V が自他両用動詞の場合、AV 全体は自他両用動詞として用いられる。そして、AV 型のサ変動詞の前字と後字の結合関係はすべて修飾関係である。

表 14 日本語のサ変動詞の AV 型語全体の自他性と V の自他性

V の自他性	AV 全体の自他性
他動詞	他動詞
自動詞	自動詞
自他両用動詞	自他両用動詞

5.4.2.2 中国語の動詞の AV 型

① V が他動詞の場合

V が他動詞の場合では、AV 全体が他動詞となる場合しかない。

例：実施（実施する）、確認（確認する）、冷蔵（冷蔵する）など

“実施”（実施する）の動詞要素 V は“施工”（工事をする）などのように他動詞として用いられる。“実施”（実施する）は“实施新的办法”（新しい方法を実施する）のように他動詞として用いられる。“確認”（確認する）の動詞要素 V は“认错”（過ちを認める）などのように他動詞であり、“确认”（確認する）は“确认规则”（規則を確認する）のように他動詞となる。他も同様な解釈ができる。

② V が自動詞の場合

V が自動詞の場合では、AV 全体が自動詞となる場合しかない。

例：同居（同居する）、平行（平行する）（本データでは 2 語のみ）

“同居”（同居する）の動詞要素 V は“家居成都”（成都に住んでいる）などのように、自動詞の用法を持ち、“同居”（同居する）は“他们同居了”（彼らは同居している）のように、自動詞として用いられる。“平行”（平行する）の動詞要素 V は“千里之路行于足下”（千里の道も一歩から）などのように、自動詞の用法を持ち、“平行”（平行する）は“两条直线平行”（2 つの直線は平行している）のように、自動詞として用いられる。

③ V が自他両用動詞の場合

V が自他両用動詞の場合では、AV 全体が自他両用動詞となる場合しかない。

例：确立（確立する）、冷冻（冷凍する）（本データでは 2 語のみ）

“确立”（確立する）動詞要素 V “立”は単独では、“坐立不安”（いても立ってもいられない）という自動詞の形もあり、“立宪”（憲法を制定する）という他動詞の形もある。AV 全体になると、“制度确立了”（制度が確立した）、“确立制度”（制度を確立する）のように自動詞としても他動詞としても用いられる。“冷冻”（冷凍する）の動詞要素 V “冻”は単独では、“河水冻了”（河が凍る）という自動詞の形もあり、“冻肉”（肉を凍らす）という他動詞の形もある。AV 全体になると、“鱼虾冷冻了”（魚介が凍った）、“冷冻鱼虾”（魚介を凍らす）のように自動詞としても他動詞としても用いられる。

④ 中国語の動詞の AV 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 15 になる。中国語の動詞の AV 型の動詞要素 V が他動詞の場合、AV 全体は他動詞として用いられる。V が自動詞の場合、AV 全体は自動詞として用いられる。V が自他両用動詞の場合、AV 全体は自他両用動詞として用いられる。そして、AV 型のサ変動詞の前字と後字の結合関係はすべて修飾関係である。

表 15 中国語の AV 型語全体の自他性と V の自他性

V の自他性	AV 全体の自他性
他動詞	他動詞
自動詞	自動詞
自他両用動詞	自他両用動詞

5.4.3 MV 型における日中動詞の自他性

5.4.3.1 日本語のサ変動詞の MV 型

① V が他動詞の場合

V が他動詞の場合では、MV 全体が他動詞となる場合しかない。

例：実施する、専攻する など

「実施する」の動詞要素 V「施」は「～を施す」のような他動詞の用法を持つ。「実施する」は「予定されていたことを実際に行う」という意味で、「～を実施する」のように、他動詞として用いられる。「専攻する」の動詞要素 V「攻」は「～をおさめる」のような他動詞の用法を持つ。「専攻する」は「ある学科・学問を専門に研究する」という意味で、「～を専攻する」のように、他動詞として用いられる。他も同様な解釈ができる。

② V が自動詞の場合

V が自動詞の場合 MV 全体が自動詞となる場合しかない。

例：不足する（本データでは 1 語のみ）

「不足する」の動詞要素 V「足」は「～が足りる」のように自動詞の用法を持つ。「不足する」は「足りない」という意味で、「～が不足する」のように自動詞として用いられる。

③ V が自他両用動詞の場合

V が自他両用動詞の場合では、MV 全体が自他両用動詞となる場合しかない。

例：完備する、実現する、再現する など

「完備する」の動詞要素 V「備」は「～が備わる」のような自動詞の用法もあり、「～を備える」のような他動詞の用法もある。「完備する」は「設備・制度などが欠けることなくすっかり備わっている、またはすっかり備える」という意味で、「～が/を完備する」のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。「実現する」の動詞要素 V「現」は「～が現れる」のような自動詞の用法もあり、「～を現す」のような他動詞の用法もある。「実現する」は「計画・希望などが実際にかなえられる」という意味で、「～が/を実現する」のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。他も同様な解釈ができる。

④ 日本語のサ変動詞の MV 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 16 になる。日本語のサ変動詞の MV 型の動詞要素 V が他動詞の場合、MV 全体も他動詞として用いられる。V が自動詞の場合、MV 全体も自動詞として用いられる。V が自他両用動詞の場合、MV 全体も自他両用動詞として用いられる。つまり、日本語のサ変動詞の MV 型の語全体の自他性は動詞要素 V によって決まる。そして、MV 型のサ変動詞の前字と後字の結合関係はすべて修飾関係となる。

表 16 日本語のサ変動詞の MV 型語全体の自他性と V の自他性

V の自他性	MV 全体の自他性
他動詞	他動詞
自動詞	自動詞
自他両用動詞	自他両用動詞

5.4.3.2 中国語の動詞の MV 型

① V が他動詞の場合

V が他動詞の場合では、MV 全体が他動詞となる場合しかない。

例：专攻（専攻する）（本データでは 1 語のみ）

“专攻”（専攻する）の動詞要素 V “攻”は“攻城”（城を攻める）のように他動詞の用

法を持つ。“专攻”（専攻）は“专攻外语”（外国語を専攻する）のように、他動詞として用いられる。

② V が自動詞の場合

V が自動詞の場合では、MV 全体が自動詞となる場合しかない。

例：不足（不足する）（本データでは 1 語のみ）

“不足”（不足する）の動詞要素 V “足”は“分量足”（量が足りる）のような自動詞の用法を持つ。“不足”は“质量不足”（質が足りない）のような自動詞として用いられる。ただ、4.4.2.2 でも述べたように、“不足”は動詞のほかに、形容詞として用いられる場合もある。

③ V が自他両用動詞の場合

V が自他両用動詞の場合では、MV 全体が自他両用動詞となる場合しかない。

例：再现（再現する）、再生（再生する） など

“再现”（再現する）の動詞要素 V “现”（現）は“出现”（現れる）のような自動詞の用法と“现身”（姿を現す）のような他動詞の用法がある。“再现”（再現する）は“往日再现”（過ぎた日々がもう一度現れる）、“再现当时的情景”（当時の風景を再現する）のように自動詞としても他動詞としても用いられる。“再生”（再生する）の動詞要素 V “生”は“生于成都”（成都で生まれる）のような自動詞の用法もあり、“生孩子”（子どもを生む）のような他動詞の用法もある。“再生”は“尾巴再生”（尻尾が再生する）、“再生纸”（再生紙）のように自動詞としても他動詞としても用いられる。

④ 中国語の動詞の MV 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 17 になる。中国語の動詞の MV 型は日本語のサ変動詞の MV 型と同様に、V が他動詞の場合、MV 全体も他動詞として用いられる。V が自動詞の場合、MV 全体も自動詞として用いられる。V が自他両用動詞の場合、MV 全体も自他両用動詞として用いられる。つまり、中国語の動詞の MV 型の語全体の自他性は動詞要素 V によって決まる。そして、MV 型のサ変動詞の前字と後字の結合関係はすべて修飾関係となる。

表 17 中国語の動詞の MV 型語全体の自他性と V の自他性

V の自他性	MV 全体の自他性
他動詞	他動詞
自動詞	自動詞
自他両用動詞	自他両用動詞

5.4.4 VN 型における日中動詞の自他性

5.4.4.1 日本語のサ変動詞の VN 型

① V が他動詞の場合

ア. VN 全体が自動詞となる場合

例：読書する、防水する、失礼する など

「読書する」の動詞要素 V「読」は「～を読む」のように他動詞の用法を持ち、「防水する」の動詞要素 V「防」も同様に「～を防ぐ」のように他動詞の用法を持つ。そして、2 つの語の前字と後字は補足関係（「補足関係」については本論文の 3.2.1 を参照）である。さらに、「～を読書する」、「～を防水する」といった用法がないため、VN 全体は自動詞のみ用いられる。他も同様な解釈ができる。

イ. VN 全体が他動詞となる場合

例：執筆する、観戦する、送信する など

「執筆する」の動詞要素 V「執」は「～を執る」という他動詞用法を持ち、「観戦する」の動詞要素 V「観」も同様に他動詞として用いられる。2 つの語の前字と後字は補足関係である。そして、「執筆する」と「観戦する」は「～を観戦する」、「～を執筆する」のように、他動詞として用いられる。他も同様な解釈ができる。

ウ. VN 全体が自他両用動詞となる場合

例：取材する、投稿する、創刊する など

「取材する」は「記事や作品の材料をある物事・事件などから取り集める」という意味で、前字と後字は補足関係である。「投稿する」は「新聞・雑誌などに掲載してもらうことを願って原稿を送る」という意味で、前字と後字は補足関係である。「取材する」の動詞要素 V「取」と「投稿する」の動詞要素 V「投」は 2 つとも他動詞で、VN 全体は「～に/を取材する」、「～に/を投稿する」のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。他も同様な解釈ができる。

以上のアイウをまとめると、VN型のサ変動詞の動詞要素Vが他動詞の場合、動詞要素Vと名詞要素Nは「NをVする」の意味関係を持ち、前字と後字の結合関係は補足関係である。そして、VN全体は自動詞、他動詞、自他両用動詞として用いられる。

② Vが自動詞の場合

Vが自動詞の場合では、VN全体が自動詞となる場合しかない。

例：安心する、就職する、下車する など

「安心する」は「気がかりなことなく心が安らぐ」という意味で、前字と後字は補足関係である。「就職する」は「職に就く」という意味で、前字と後字は補足関係である。そして、「安心する」の動詞要素V「安」と「就職する」の動詞要素V「就」がともに自動詞であり、VN全体も「～が安心する」、「～に就職する」のように自動詞として用いられる。他にも同様な解釈ができる。なお、「下車する」と共起する格助詞は場所のデ格である（例：大阪で下車する など）。

③ Vが自他両用動詞の場合

ア. VN全体が自動詞となる場合

例：入場する、入学する、育児する など

「入場する」と「入学する」の動詞要素V「入」は単独では「入る」という自動詞の形もあり、「入れる」という他動詞の形もある。しかし、VN全体になると、「入場する」、「入学する」は「～が/に入場する」、「～が/に入学する」のように、自動詞として用いられ、前字と後字は補足関係である。他にも同様な解釈ができる。

イ. VN全体が他動詞となる場合

例：出荷する、決意する、出力する など

「出荷する」の動詞要素V「出」は「出る」という自動詞の用法もあり、「出す」という他動詞の用法もあるが、VN全体、「出荷する」は「荷物を積み出す、特に、商品を市場に出す」という意味で、「～を出荷する」のように、他動詞として用いられる。前字と後字は補足関係である。「決意する」の動詞要素V「決」は「決まる」という自動詞の用法もあり、「決める」という他動詞の用法もあるが、VN全体、「決意する」は「自分の意志をはっきりと決める」という意味で、「～を決意する」のように、他動詞として用いられる。前字と後字は補足関係である。他にも同様な解釈ができる。

ウ. VN 全体が自他両用動詞となる場合

例：出店する、脱毛する（本データでは2語のみ）

「出店する」の動詞要素 V「出」は「出る」という自動詞の形もあり、「出す」という他動詞の形もあるが、VN 全体、「出店する」は「店を出す」という意味で、「～に/を出店する」のように、自動詞としても他動詞としても用いられる。前字と後字は補足関係である。

「脱毛する」の動詞要素 V「脱」は「脱ぐ」という他動詞の形もあり、「脱げる」という自動詞の形もあるが、VN 全体、「脱毛する」は2つの意味があつて、「毛がぬけ落ちる」という意味の場合は「～が脱毛する」のように自動詞として用いられる。「美容のために不要な部分の毛を取りのぞく」という意味の場合は「～を脱毛する」、他動詞として用いられる。「脱毛する」の前字と後字は補足関係である。

以上のアイウをまとめると、VN 型のサ変動詞の動詞要素 V が自他両用の場合、動詞要素 V と名詞要素 N は「N を V する」、「N に V する」といった意味関係を持ち、前字と後字の結合関係は補足関係である。VN 全体は自動詞、他動詞、自他両用動詞として用いられる。

④ 日本語のサ変動詞の VN 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 18 になる。日本語のサ変動詞の動詞要素 V が他動詞の場合、VN 全体は自動詞、他動詞、自他両用動詞として用いられる。V が自動詞の場合、VN 全体は自動詞用法しか持たない。V が自他両用動詞の場合、VN 全体は自動詞、他動詞、自他両用動詞として用いられる。そして、VN 型のサ変動詞の前字と後字の結合関係はすべて補足関係となる。

表 18 日本語のサ変動詞の VN 型語全体の自他性と V の自他性

V の自他性	VN 全体の自他性
他動詞	自動詞
	他動詞
	自他両用動詞
自動詞	自動詞
自他両用動詞	自動詞

	他動詞
	自他両用動詞

5.4.4.2 中国語の動詞の VN 型

日本語のサ変動詞の VN 型と異なって、中国語の動詞の VN 型においては、動詞要素 V は他動詞用法しかない。しかも、VN にはすでに目的語となる名詞要素 N が入っているので、VN 全体はさらに目的語を取ることができない。例えば、“读书”（読書する）など。“读书”（読書する）の V は“读”で、“读报”（新聞を読む）、“读资料”（資料を読む）などのように、他動詞として用いられる。しかし、“读书”（読書する）の場合はすでに“书”という名詞要素が入っているので、そのほかのものを“读书”（読書する）の後に加えることができない。つまり、“读书”（読書する）は目的語が取れない。よって、“读书”（読書する）は他動詞ではなく、自動詞として用いられる。したがって、VN 全体の自他性は V の自他性に関係がなく、VN 型の動詞はすべて自動詞であると言えよう。

一方、第 4 章で述べたように、VN 型の語については、その前字と後字の結合関係によって、同一の VN 型の語でも、品詞性が異なる場合もある。

例：投资（投資）、录音（録音） など

① 前字と後字が修飾関係の場合

“投资”（投資）は「投入した資金」という意味であり、“录音”（録音）は「記録した音声」という意味である。つまり、N は語全体の意味の中心となり、V は N を修飾する要素となる。よって、VN 全体は名詞として用いられる。

② 前字と後字が補足関係の場合

“投资”（投資）は「資金を投入する」という意味であり、“录音”（録音）は「音声を記録する」という意味である。つまり、V は語全体の意味の中心となり、N は V を補足する要素となる。よって、VN 全体は動詞として用いられる。

以上の内容をまとめると、表 19 になる。中国語 2 字漢語動詞の VN 型は前字と後字の結合関係によって、品詞が変わる。前字と後字が修飾関係の場合、VN 全体は名詞となり、前字と後字が補足関係の場合、VN 全体は動詞となる。VN 型の動詞の V はすべて他動詞であるが、VN 全体の自他性は V の自他性に関係がなく、すべて自動詞である。

表 19 中国語の VN 型について

V の自他性	前字と後字の結合関係	VN 全体の品詞性
他動詞	修飾関係	名詞
	補足関係	自動詞

5.4.5 VA 型における日中動詞の自他性

5.4.5.1 日本語のサ変動詞の VA 型

① V が他動詞の場合

V が他動詞の場合では、VA 全体が他動詞となる場合しかない。

例：証明する、説明する（本データでは 2 語のみ）

「証明する」の動詞要素 V「証」は「～をあかす」のように他動詞の用法を持つ。「証明する」は「明らかにあかす」という意味であり、「～を証明する」のように他動詞として用いられる。「説明する」の動詞要素 V「説」は「～を説く」のように他動詞の用法を持つ。「説明する」は「わかりやすく述べる」という意味であり、「～を説明する」のように、他動詞として用いられる。

② V が自他両用動詞の場合

ア. VA 全体が他動詞となる場合

例：延長する、改良する、保湿する など

「延長する」の動詞要素 V「延」は「～を延ばす」のような他動詞用法もあれば、「～が延びる」のような自動詞用法もある。「延長する」は「～を延長する」のように、他動詞として用いられる。「改良する」の動詞要素 V「改」は「～を改める」のような他動詞用法もあれば、「～が改まる」のような自動詞用法もある。「改良する」は「～を改良する」のように、他動詞として用いられる。他も同様な解釈ができる。

イ. VA 全体が自動詞となる場合

例：発達する（本データでは 1 語のみ）

「発達する」の動詞要素 V「発」は「～が/を発する」のように、自他両用動詞である。「発達する」は「～が発達する」のような自動詞としてのみ用いられる。

ウ. VA 全体が自他両用動詞となる場合

例：拡大する、改善する、減少する など

「拡大する」の動詞要素 V「拡」は「～を拡げる」、「～が拡がる」のように、他動詞としても自動詞としても用いられる。「拡大する」は「～を拡大する」、「～が拡大する」のように、自他両用動詞となっている。「改善する」の動詞要素 V「改」は「～を改める」、「～が改まる」のように、他動詞としても自動詞としても用いられる。「改善する」は「～を改善する」、「～が改善する」のように、自他両用動詞となっている。他も同様な解釈ができる。

以上のアイウをまとめると、V が自他両用動詞の場合、後字が前字を補足し、VA 全体は他動詞、自動詞、自他両用動詞として用いられる。

③ 日本語のサ変動詞の VA 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 20 になる。日本語のサ変動詞の VA 型の動詞要素 V が他動詞の場合、VA 全体も他動詞として用いられる。V が自他両用動詞の場合、VA 全体は他動詞、自動詞、自他両用動詞として用いられる。そして、日本語のサ変動詞の VA 型の前字と後字の結合関係はすべて補足関係となる。

表 20 日本語のサ変動詞の VA 型語全体の自他性と V の自他性

V の自他性	VA 全体の自他性
他動詞	他動詞
自他両用動詞	他動詞
	自動詞
	自他両用動詞

5.4.5.2 中国語の動詞の VA 型

日本語のサ変動詞の VA 型と異なって、中国語の動詞の VA 型の動詞要素 V は自他両用動詞の用法がない。他動詞としてのみ用いられる。VA 全体の自他性については以下のようになる。

① VA 全体が他動詞となる場合

例：扩大（拡大する）、说明（説明する）（本データでは2語のみ）

“扩大”（拡大する）の動詞要素 V “扩” は単独では、“扩军”（軍隊を拡大する）のように他動詞として用いられる。“扩大”（拡大する）は“扩大生产”（生産を拡大する）のように他動詞として用いられる。“说明”（説明する）の動詞要素 V “说” は単独では、“说话”（話をする）のように他動詞として用いられる。“说明”（説明する）は“说明原因”（原因を説明する）のように他動詞として用いられる。前字と後字の結合関係について、後字が前字を補足する補足関係となっている。

② VA 全体が自動詞となる場合

例：保湿（保湿する）（本データでは1語のみ）

“保湿”（保湿する）の動詞要素 V “保” は単独では、“保家卫国”（国と家を守る）のように他動詞として用いられる。“保湿”（保湿する）は“要注意保湿”（保湿するのを気をつける）のように自動詞として用いられる。前字と後字の結合関係について、後字が前字を補足する補足関係となっている。

③ VA 全体が自他両用動詞となる場合

例：减少（減少する）、改善（改善する）、改良（改良する）など

“减少”（減少する）の動詞要素 V “减”（減）は“减价”（値段を下げる）のように他動詞として用いられる。“减少”（減少する）は“生产减少”（生産が減少する）という自動詞の用法もあり、“减少生产”（生産を減少する）という他動詞の用法もある。“改善”（改善する）の動詞要素 V “改” は“改文章”（文章を修正する）のように他動詞として用いられる。“改善”（改善する）は“生活改善”（生活が改善する）という自動詞の用法もあり、“改善生活”（生活を改善する）という他動詞の用法もある。前字と後字の結合関係について、後字が前字を補足する補足関係となっている。他も同様な解釈ができる。

④ 中国語の動詞の VA 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 21 になる。中国語の2字動詞の VA 型について、動詞要素の V がすべて他動詞となり、VA 全体は他動詞、自動詞、自他両用動詞として用いられる。そして、VA 型の前字と後字の結合関係は補足関係となる。

表 21 中国語の動詞の VA 型全体の自他性と V の自他性

V の自他性	VA 全体の自他性
他動詞	他動詞
	自動詞
	自他両用動詞

5.4.6 NV 型における日中動詞の自他性

5.4.6.1 日本語のサ変動詞の NV 型

① V が他動詞の場合

ア. NV 全体が他動詞となる場合

例：意図する、幻想する、公認する など

「意図する」の動詞要素 V「図」は「～を図る」のように、他動詞の用法を持つ。「意図する」は「あることを実現しようとする」という意味で、「～を意図する」のように、他動詞として用いられる。「幻想する」の動詞要素 V「想」は「～を想う」のように、他動詞の用法を持つ。「幻想する」は「実際にはありえないことを現実の事柄のように想像する」という意味で、「～を幻想する」のように他動詞として用いられる。他も同様な解釈ができる。

イ. NV 全体が自他両用動詞となる場合

例：電話する（本データでは 1 語のみ）

「電話する」の動詞要素 V「話」は「～を話す」のように、他動詞の用法を持つ。「電話する」は「電話機を使って通話する」という意味で、「～に/を電話する」のように、自他両用動詞として用いられる。

以上のアイをまとめると、NV 型のサ変動詞の動詞要素 V が他動詞の場合には、N と V は「N のように V する」、「N で V する」の意味関係を持ち、前字と後字の結合関係は修飾関係である。NV 全体は他動詞、自他両用動詞として用いられる。

② V が自動詞の場合

V が自動詞の場合では、NV 全体が自動詞となる場合しかない

例：機能する（本データは 1 語のみ）

「機能する」の動詞要素 V「能」は「～能う」という自動詞の用法を持つ。「機能する」

は「ある物事に特性として備わっている働きが作用する」という意味で、「～が機能する」のように自動詞として用いられる。(ここの「機能する」の動詞要素「能」の解釈については『漢字源 (改訂第 5 版)』を参照)

③ V が自他両用動詞の場合

V が自他両用動詞の場合では、NV 全体が他動詞となる場合しかない。

例：中止する (本データでは 1 語のみ)

「中止する」の動詞要素 V「止」は「～が止まる」、「～を止める」のように、自動詞と他動詞の用法を持つ。「中止する」は「途中でやめる」という意味で、「～を中止する」のように、他動詞として用いられる。

④ 日本語のサ変動詞の NV 型のまとめ

以上の内容をまとめると、表 22 になる。日本語のサ変動詞の NV 型の動詞要素 V が他動詞の場合、NV 全体が他動詞、自他両用動詞として用いられる。V が自動詞の場合、NV 全体も自動詞として用いられる。V が自他両用の場合、NV 全体は他動詞として用いられる。そして、日本語のサ変動詞の NV 型の前字と後字の結合関係はすべて修飾関係となる。

表 22 日本語のサ変動詞の NV 型語全体の自他性と V の自他性

V の自他性	NV 全体の自他性
他動詞	他動詞
	自他両用動詞
自動詞	自動詞
自他両用動詞	他動詞

5.4.6.2 中国語の動詞の NV 型

中国語の動詞の NV 型が圧倒的に数が少なく、本データでは“中止”(中止する)の 1 語しかない。“中止”(中止する)の動詞要素 V “止”は単独では、“步伐不止”(足並みをとまらない)のように、自動詞の用法もあり、“止步”(立ち止る、歩みを止める)のように、他動詞の用法もある。“中止”(中止する)は“比赛中止了”(試合が中止された)のように、自動詞としても、“中止比赛”(試合を中止する)のように、他動詞としても用いら

れる。前字と後字の結合関係について、前字が後字を修飾する修飾関係となる。

以上の内容をまとめると、以下の表 23 になる。

表 23 中国語の動詞の NV 型語全体の自他性と V の自他性

V の自他性	NV 全体の自他性
自他両用動詞	自他両用動詞

5.5 まとめ

以上、構成要素に基づいて、日本語と中国語の 2 字漢語を 6 タイプに分けて、それらの自他性を分析した。その結果、2 字漢語が日本語として用いられる際と中国語として用いられる際には、2 字漢語全体の自他性と動詞要素の自他性の関係がほとんど同じ場合もあれば、まったく異なる場合もある。

ア. VV 型の場合

6 タイプの中で、この VV 型の 2 字漢語は日中両語において最も語数が多い。しかも、さまざまな場合に分けられる。

まず、 V_1 と V_2 が並列関係の場合、日本語のサ変動詞は V_1 と V_2 の自他性によって、VV 全体の自他性は 7 つの可能性がある。日本語のサ変動詞の場合、① V_1 と V_2 がともに他動詞の場合には、VV 全体は他動詞または自動詞として用いられる。② V_1 と V_2 がともに自動詞の場合には、VV 全体は自動詞として用いられる。③ V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合には、VV 全体は他動詞、自動詞、自他両用動詞として用いられる。④ V_1 が自動詞で、 V_2 が自他両用動詞の場合には、VV 全体は自動詞として用いられる。⑤ V_1 が他動詞で、 V_2 が自他両用動詞の場合には、VV 全体は他動詞または自他両用動詞として用いられる。⑥ V_1 が自他両用動詞で、 V_2 が他動詞の場合には、VV 全体は他動詞、自他両用動詞として用いられる。⑦ V_1 が自他両用動詞で、 V_2 が自動詞の場合には、VV 全体は自動詞として用いられる。中国語の動詞として用いられる際、①だけは日本語と違って、VV 全体が他動詞のみに用いられる。そのほか②～⑦は日本語のサ変動詞と同じである。つまり、 V_1 と V_2 がともに自動詞、またはどちらか片方が自動詞の場合、VV 全体も自動詞として用いられる。 V_1 と V_2 の一方が他動詞、もう一方が自他両用動詞の場合、VV 全体は他動詞または自他両用動詞として用いられる。 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合、VV 全体が他動詞、自他両用動詞の用法を持つ。 V_1 と V_2 ともに他動詞の場合、VV 全体は中国語では他動詞と

して用いられるが、日本語では他動詞または自動詞として用いられる。ただ、自動詞として用いられる語の数はそれほど多くない。

次に、 V_1 と V_2 が対立関係の場合、日本語のサ変動詞は V_1 と V_2 の自他性によって、VV 全体の自他性は 3 つの可能性がある。① V_1 と V_2 がともに他動詞の場合、VV 全体は自動詞として用いられる。② V_1 と V_2 がともに自動詞の場合、VV 全体も自動詞として用いられる。③ V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合では、VV 全体は他動詞、自他両用動詞として用いられる。しかし、中国語の動詞は日本語と異なる。 V_1 と V_2 がともに他動詞の場合、VV 全体は自動詞または他動詞として用いられる。 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合では、VV 全体は自他両用動詞として用いられる。つまり、 V_1 と V_2 は対立関係の場合、日本語と中国語の差異が見られる。しかも、 V_1 と V_2 の自他性から VV 全体の自他性を推測しにくい。

イ. AV 型の場合

動詞要素 V の自他性と 2 字漢語 AV 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞と中国語の動詞が同じである。AV 全体の自他性は動詞要素 V で決まる。つまり、V が他動詞の用法を持つ場合、AV 全体も他動詞として用いられる。V が自動詞の用法を持つ場合、AV 全体も自動詞として用いられる。V が自他両用動詞の用法を持つ場合、AV 全体も自他両用動詞として用いられる。

ウ. MV 型の場合

動詞要素 V の自他性と MV 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞と中国語の動詞が同じになる。MV 全体の自他性は動詞要素 V で決まる。つまり、V が他動詞の用法を持つ場合、MV 全体も他動詞として用いられる。V が自動詞の用法を持つ場合、MV 全体も自動詞として用いられる。V が自他両用動詞の用法を持つ場合、MV 全体も自他両用動詞として用いられる。

エ. VN 型の場合

この VN 型では、V の自他性と VN 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞と中国語の動詞はまったく異なる。日本語のサ変動詞については、V が他動詞または自他両用動詞の場合、VN 全体は自動詞、他動詞、自他両用動詞として用いられる。V が自動詞の場合、VN 全体は自動詞の用法しか持たない。中国語の動詞において、動詞要素 V はすべて他動詞で、VN 全体は自動詞の用法しかない。

オ. VA 型の場合

この VA 型では、V の自他性と VA 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞と中国語の動詞は対応していない。日本語のサ変動詞について、V が他動詞の場合、VA 全体も他動詞として用いられる。V が自他両用の場合、VA 全体は他動詞、自動詞、自他両用動詞として用いられる。中国語の動詞の動詞要素 V は他動詞の用法のみ持っている。VA 全体は他動詞、自動詞、自他両用動詞として用いられる。

カ. NV 型の場合

6 タイプの中では、この NV 型の 2 字漢語が最も少ない。しかも、動詞要素 V の自他性と VA 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞と中国語の動詞は差異が見られる。日本語のサ変動詞については、V が他動詞の場合、NV 全体は他動詞または自他両用動詞として用いられ、V が自他両用の場合、NV 全体は他動詞として用いられる。中国語の 2 字動詞について、V が自他両用動詞の場合、NV 全体も自他両用動詞である。

第6章 中国語母語話者によるサ変動詞の誤用について

6.1 サ変動詞と共起する格助詞について

これまでの漢語動詞の語構成研究は、造語パターンを分類・整理することに重点を置いており（野村 1999 など）、漢語動詞が文中で統語的にどのように振る舞うかという研究は遅れていると言える。ただ、仁田（1980）は次の例を挙げながら、語構成と文構造の関わりについて指摘している。

例： *馬カラ落馬スル。

*自転車カラ落馬スル。

上記の例について、仁田（1980）は次のように説明する。「具体的内容を備えた文の構成要素を、語が語の内的構造において含んでいるがゆえに、当の語は、文形成への参加にあたって、既に含んでいるところの構成要素を取る必要がないし、また、それと矛盾・相反する内容を有した同種の構成要素をとることができない。」つまり、「落馬スル」については、動詞要素の「落」はすでに「馬」という統語的構成要素を取っているので、「落馬スル」の語全体はさらに統語的要素を取ることはできない。そこで、仁田（1980）は「落馬スル」のような漢語動詞を分析するに当たっては、一般化して、「文の構造といったものを考えることが、語の語構成を考察することになり、語の構成のあり方を考察することが、文の内的構造のあり方およびその意味解釈を理解することになる」（仁田 1980:328）と述べている。このことは漢語動詞、いわゆるサ変動詞を考察する際には、2 字漢語の語構成と 2 字漢語が文中で果たしている役割を見る必要があることを示唆している。

この節では、サ変動詞を文の中に用いて、それと共起する格助詞を考察する。そこで、サ変動詞がどの格助詞を取るのかについては、『明鏡国語辞典（第2版）』、『大辞泉（1998）』、『大辞林（第3版）』の3つの辞典に基づいて分類した。

6.1.1 他動詞となるサ変動詞の場合

日本語のサ変動詞は他動詞となる場合、それと共起する格助詞は「を」である。今回のデータでは、ヲ格を取る他動詞が最も多く、VV 型、AV 型、MV 型、VN 型、VA 型、NV 型、つまり、すべてのタイプにはヲ格を取る語がある。特に、VV 型の動詞には多数存在している。（具体的にどのような 2 字漢語があるかについては、本論文末尾の添付資料 2 を参照）以下、ヲ格を取る他動詞として用いられるサ変動詞の例である（ガ格の項は省略して例示してある）。

例：日本語 <u>を使用する</u> 。(VV 型)	『明鏡国語辞典（第 2 版）』
面接では適性 <u>を重視する</u> 。(AV 型)	『明鏡国語辞典（第 2 版）』
ドイツ製のレンズ <u>を専用する</u> 。(MV 型)	『明鏡国語辞典（第 2 版）』
講演 <u>を録音する</u> 。(VN 型)	『明鏡国語辞典（第 2 版）』
事情 <u>を説明する</u> 。(VA 型)	『明鏡国語辞典（第 2 版）』
戦争のない未来 <u>を幻想する</u> 。(NV 型)	『大辞泉（1998）』

以上のように、「使用する」、「重視する」、「専用する」、「録音する」、「説明する」、「幻想する」と共起する格助詞は「を」になる。

6.1.2 自動詞となるサ変動詞の場合

日本語のサ変動詞が自動詞となる場合、共起する格助詞はガ格のほかに、二格などが挙げられる。それ以外に経路や起点の場所を表すヲ格も含めて考えることができる。すべての自動詞はガ格を取るが、中にはガ格と二格、またはガ格と場所のヲ格といった 2 つの格助詞を同時に取る場合もある。

① ガ格のみを取るサ変動詞

ガ格のみを取るサ変動詞には、VV 型、AV 型、MV 型、VA 型、NV 型がある。（具体的にどのような 2 字漢語があるかについては、本論文末尾の添付資料 2 を参照）以下はガ格を取る自動詞として用いられるサ変動詞の例である。

例：救世主 <u>が出現する</u> 。(VV 型)	『大辞泉（1998）』
三世代 <u>が同居している</u> 家族 (AV 型)	『大辞泉（1998）』
材料 <u>が不足する</u> 。(MV 型)	『明鏡国語辞典（第 2 版）』
心身 <u>が発達する</u> 。(VA 型)	『明鏡国語辞典（第 2 版）』
組織体 <u>がうまく機能していない</u> 。(NV 型)	『明鏡国語辞典（第 2 版）』

② ガ格のほか、二格も取れるサ変動詞

ガ格のほかに、二格も取るサ変動詞には、VV 型、AV 型、VA 型、VN 型がある。（具体的にどのような 2 字漢語があるかについては、本論文末尾の添付資料 2 を参照。）以下はガ格のほか、二格も取れる自動詞として用いられるサ変動詞の例である（ガ格の項は省略して例示してある）。

例：大会 <u>に参加する</u> 。(VV 型)	『明鏡国語辞典（第 2 版）』
---------------------------	-----------------

新しい環境に適応する。(AV 型) 『明鏡国語辞典 (第 2 版)』

すばらしい演奏に感激する。(VA 型) 『明鏡国語辞典 (第 2 版)』

大学に入学する。(VN 型) 『大辞泉 (1998)』

③ ガ格のほか、ヲ格も取れるサ変動詞

ガ格のほか、ヲ格も取れるサ変動詞には、VV 型がある。ここでのヲ格は他動詞が取る作用・動作・行為の対象を表すヲ格ではなく、経路や起点などの場所を表すヲ格である。そのため、本研究においてはこのヲ格を取るサ変動詞は他動詞ではなく、自動詞と見なす(この点に関しては、森田 1995 などを参照)。(具体的にどのような 2 字漢語があるかについては、本論文末尾の添付資料 2 を参照) 以下はガ格のほか、場所のヲ格も取れる自動詞として用いられるサ変動詞の例である。

例：中国を旅行する。(VV 型) 『明鏡国語辞典 (第 2 版)』

6.1.3 自他両用動詞となるサ変動詞の場合

① ガ格・ヲ格を取るサ変動詞

ガ格・ヲ格を取るサ変動詞には、VV 型、AV 型、VA 型、VN 型、MV 型がある。ヲ格を取って他動詞として用いられる場合、このヲ格は他動詞の意味する作用・動作・行為の対象を表すヲ格となる。また、ヲ格を取らずに、ガ格単独で用いられる用法もある。そのため、ここで使うガ格・ヲ格を取るサ変動詞は自他両用動詞である。(具体的にどのような 2 字漢語があるかについては、本論文末尾の添付資料 2 を同様に参照) 以下はガ格・ヲ格を取る自他両用動詞として用いられるサ変動詞の例である。

例：電車が進行する。/手際よく議事を進行する。(VV 型) 『明鏡国語辞典 (1998)』

制度が/を確立する。(AV 型) 『明鏡国語辞典 (1998)』

会社が/を創業する。(VN 型) 『明鏡国語辞典 (1998)』

症状が改善する。/待遇を改善する。(VA 型) 『明鏡国語辞典 (1998)』

夢が/を実現する。(MV 型) 『明鏡国語辞典 (1998)』

以上のように、「進行する」、「確立する」、「創業する」、「改善する」、「実現する」と共にしている格助詞は「が」、「を」である。

② 二格・ヲ格を取るサ変動詞

二格・ヲ格を取るサ変動詞には、VV 型、AV 型、VN 型がある。(具体的にどのような 2

字漢語があるかについては、本論文末尾の添付資料 2 を参照) この種のサ変動詞は自動詞の場合にはガ格のほか、二格を取り、他動詞の場合にはガ格のほか、ヲ格を取る。以下はこうした二格・ヲ格を取る自他両用動詞として用いられるサ変動詞の例である。

例：車に注意する。/部下の失態を注意する。(VV 型) 『明鏡国語辞典 (1998)』

乗客救出が犯人逮捕に優先する。/仕事よりも家庭生活を優先する。(AV 型)

『明鏡国語辞典 (1998)』

バッテリーに/を充電する。(VN 型)

『明鏡国語辞典 (1998)』

以上のように、「注意する」、「優先する」、「充電する」と共起する格助詞はガ格のほか、「に」、「を」となる。

6.2 中国語母語話者によるサ変動詞の誤用についての仮説

第 4 章では、語構成という視点から日本語のサ変動詞と対応する中国語 2 字漢語全体の品詞性とその中国語 2 字漢語を形成する前字と後字それぞれの品詞性および前字と後字の結合関係を考察した。そこで、以下の結果が得られた。

① 日本語ではサ変動詞として用いられるが、それに対応する中国語 2 字漢語は動詞として用いられるほか、動詞以外の品詞、つまり名詞、形容詞、副詞としても用いられる。

② サ変動詞と対応する中国語においては、名詞となる場合には名詞要素が含まれる NN 型、VN 型、AN 型のほかに、名詞要素が含まれない VV 型、AA 型の名詞もある。構成要素に名詞要素がない場合には、中国語としての名詞全体 (2 字漢語) は動作・行為をする人、あるいは職業を表す「専有名詞」、または動作・行為、あるいは他の抽象概念を表す「抽象名詞」(「専有名詞」、「抽象名詞」について本論文の 25 頁の注 10 と注 11 を参照) である。中国語 2 字漢語全体として形容詞になる語には形容詞要素が含まれる AA 型、VA 型、MA 型、AV 型のほか、形容詞要素が含まれない VN 型、VV 型の形容詞もある。その場合には、形容詞は動作・行為の結果・状態を表している。2 字漢語が動詞となる場合にはすべて構成要素として動詞要素が含まれている。

つまり、サ変動詞と対応する中国語の品詞性は多様である。また 2 字漢語全体を見れば各品詞の語構成もさまざまである。したがって、中国語母語話者が日本語のサ変動詞を学習する際、母語の干渉を受け、誤用する可能性があると考えられる。石・王 (1983) によると、中国語では副詞として用いられ、日本語では自動詞で用いられる同形漢語が学習上難しいとされている。また、中川 (2008) によれば、中国語では形容詞として用いられ、日

本語ではサ変動詞として用いられる同形漢語が難しいと指摘されている（例えば、「緊張する」、「低下する」などがある）。したがって、これらの先行研究によれば、中国語母語話者にとっては、サ変動詞と対応する中国語が形容詞、あるいは副詞として用いられる場合、誤用が出やすいと予測される。

一方、第5章では、中国語においてはサ変動詞と対応する2字漢語の動詞のみを扱い、語の構成要素に基づいて、日本語と中国語をVV型、AV型、MV型、VN型、VA型、NV型の6タイプに分けて、日本語、中国語のそれぞれのタイプについて自他性を分析した。こうした分析に基づけば、VV型の日本語と中国語の自他性の対応関係が最も多様性に富んでいる。それに対して、AV型とMV型の日本語と中国語の自他性は対応している。VN型の中国語動詞はすべて自動詞であるが、日本語では自動詞とは限らず、対応しているとは言えない。同じように、VA型、NV型においても日本語と中国語の自他性は対応していない。つまり、2字漢語全体の自他性と動詞要素の自他性との関係が日本語と中国語ではほとんど同じである場合もあれば、まったく異なる場合もある。中国語母語話者にとって、日本語を学習する際、それらの関係は同じ場合には習得しやすく、異なる場合には誤用になりやすい可能性がある。

このように、上記の内容から、中国語母語話者によるサ変動詞の誤用について、以下の仮説が立てられる。

- ① サ変動詞と対応する中国語が形容詞、または副詞として用いられる場合、誤用になりやすい。（石・王 1983、中川 2008 に基づく仮説）
- ② 日中両語の自他性の対応関係が最も多様なVV型のサ変動詞に関し、自他性の習得が最も難しく、最も誤用になりやすい。
- ③ 日中両語で自他性が対応していない場合も多いVN型、VA型、NV型は比較的誤用になりやすい。
- ④ 日中両語で自他性が対応しているAV型とMV型については、学習者にとって、誤用の可能性が低い。

以下では、これらの仮説を中国語母語話者の学習状況から検証してみる。そのために、本論文ではアンケート調査を行うことにする。

6.3 自他性の誤用に関するアンケート調査

本研究のアンケート調査では、具体的に以下の2つの設問を行う（具体的なアンケート

調査の内容については、本論文末尾の添付資料 3「アンケート調査質問紙用紙」を参照)。

①「下記の日本語の文を読んで、_____に対する適当なものを選択肢の中から選びなさい。複数の格助詞が可能だと思う場合は複数選択してもよい」

②「下記の日中同形漢語を使って、日中異なる品詞ごとにすべて文を作ってください」

それぞれの設問については、下記のような課題を提示している。

例：

① 風力_____利用した発電。

A が B を C に D どちらでもない

② 提案する/提案

①の選択問題では、学習者が当該の課題として与えられた日本語のサ変動詞の自他性について習得しているかどうか、そしてどのような誤用が出るかなどを考察する。②の作文では、学習者の中国語の 2 字漢語の習得度と日本語の 2 字漢語の習得度の相関性を探る。このように、アンケート調査を通じて、日本語の 2 字漢語に関する中国語母語話者の学習実態を考察し、誤用の原因がどこにあるのかを明らかにする。

アンケート調査で使用している 2 字同形漢語について、①の選択問題では 30 語を提示し、②の作文問題では 5 語を提示している。つまり、計 35 語が今回のアンケート調査で使われている。この 35 語は使用頻度の高いサ変動詞の 425 語（本論文 1.2 の研究方法を参照）の中から、教科書でもよく用いられ、日本語能力試験の出題基準の語彙リストでも出現率が高い語を抽出したものである。そして、語構成の各タイプが占める割合、サ変動詞と共起する格助詞なども考慮して、抽出する 2 字漢語を調整した。結果として、本アンケート調査では、以下のような 2 字漢語を選んでいる。

まずは、①の選択問題で使われている 2 字漢語について説明する。

ア. 他動詞として用いられる 2 字同形漢語（計 10 語）

利用する、確認する、加工する、観戦する、執筆する、冷凍する、実施する、延長する、追加する、告白する

語の構成要素から見ると、「利用する」は VV 型、「確認する」、「冷凍する」は AV 型、「加工する」、「観戦する」、「執筆する」は VN 型、「延長する」、「追加する」、「告白する」は VA 型、「実施する」は MV 型である。

イ. 自動詞として用いられる 2 字同形漢語 (11 語)

参加する、挑戦する、入学する、違反する、読書する、登場する、安心する、影響する、就職する、反対する、感激する

語の構成要素から見ると、「参加する」、「挑戦する」、「違反する」、「影響する」、「反対する」は VV 型で、「読書する」、「登場する」、「安心する」、「就職する」は VN 型で、「感激する」は VA 型である。日本語のサ変動詞が自動詞となる場合では、格助詞のガ格のほかに、二格や場所のヲ格が取れる場合もある。本調査で使用する自動詞となる 2 字同形漢語にはガ格のみを取るタイプとガ格のほか、二格も取れるタイプがある。ガ格のみを取るタイプには、「読書する」、「安心する」、「登場する」がある。ガ格のほか、二格も取れるタイプには、「参加する」、「挑戦する」、「入学する」、「違反する」、「影響する」、「感激する」、「就職する」、「反対する」がある。

ウ. 自他両用として用いられる 2 字同形漢語 (9 語)

取材する、確立する、破壊する、開始する、減少する、実現する、投稿する、注意する、感謝する

語の構成要素から見ると、「取材する」、「投稿する」、「注意する」は VN 型、「破壊する」、「開始する」、「感謝する」は VV 型、「確立する」は AV 型、「減少する」は VA 型、「実現する」は MV 型である。上記のイ.でも述べたように、自動詞の場合には、格助詞のガ格のほかに、二格が取れる場合もある。この自他両用として用いられる 2 字同形漢語はガ格・ヲ格を取るタイプと二格・ヲ格を取るタイプがある。ガ格・ヲ格を取るタイプは「取材する」、「確立する」、「破壊する」、「開始する」、「減少する」、「実現する」であり、二格・ヲ格を取るタイプは「投稿する」、「注意する」、「感謝する」である。

次に、②の作文問題の中で使われている日本語と中国語 2 字同形漢語について説明する。

(計 5 語)

「提案する/提案」、「決断する/決断」、「緊張する/紧张 (緊張)」、「低下する/低下」、「比較する/比较 (比較)」

語の構成要素から見ると、「提案する/提案」は VN 型、「決断する/決断」、「緊張する」、「比較する」は VV 型、「低下する」は AV 型である。中国語の“紧张”と“低下”は AA 型である。“比较”は VV 型でもあり、MM 型でもある。

品詞性について、日本語の場合はすべてサ変動詞であり、「提案する」、「緊張する」、「低下する」は自動詞、「決断する」は自他両用動詞、「比較する」は他動詞である。中国語の場合、“提案”は名詞で、“決断”は名詞としても動詞としても用いられる。また、“紧张”と“低下”は形容詞で、“比较”は動詞としても副詞としても用いられる。

アンケート調査の質問文では、サ変動詞と共起する格助詞を選択させている。それは学習者の習得状況を考察するためには、文の要素が複雑でないほうが学習者の習得状況を把握しやすいためである。今回は『明鏡国語辞典（第2版）』と『大辞泉（1998）』の中から例文を選んで、質問文を作ることにした。

今回のアンケート調査の対象は日本の大学に在学している中国語母語話者の日本語学習者で、中級から上級レベルの計37人である。調査対象の日本語のレベルを中級から上級までにした理由は以下の通りである。それは現在、日本語を教える現場にいる教師から「データ（今回のアンケート調査の35語の2字漢語）を見ると、ほぼ中級レベルの語彙だと思う。もし、中級から上級くらいの学習者を対象とすれば、彼らの学習状況をはっきり把握できるのではないか」、「自他について究明したい初級の学習者はほとんどいない。中級後半から気付く場合が多いので、対象を中級以上にしたほうがいいと思う」と言われたからである。つまり、これは中級から上級レベルの学習者をアンケート調査の対象とすると日本語教育に役立つといったアドバイスと考えられる。今回の調査対象となる日本語のサ変動詞は国立国語研究所（2006）における使用頻度の高い語の5000番までから抽出した2字同形漢語で、計425語である（抽出方法は1.2 研究方法のところを参照）。上記の日本語教師によれば、それらは教科書や日本語能力試験にもよく出てくる語彙であり、しかも、中級レベルの語彙である。そこで、アンケート調査の対象を日本語レベルが中級、あるいは中級から上級へと進む過程の学習者に限定した。アンケートを実施した際、学習者に中国語で設問を説明した。選択問題は正解が1つのようなアンケートと違って、4つの選択肢の中から1つだけが正解である問題だけではなく、2つとも正解である問題も出した。学習者が設問を読まず、直接に選択していくことを防ぐため、事前に①の設問の最初に2つの選択肢を選ぶ場合があると説明した。作文問題に関しては、学習者に日本語の文と中国語の文、両方ともを作ること。それに加えて、当該の2字漢語については異なる品詞ごとに1文を作るように要請した。

6.4 アンケート調査の結果

アンケート調査の第1の設問部分の選択問題は30問あり、第2の設問部分の作文は5問ある。今回の調査対象は37名となっているが、そのうち、7人が作文部分を回答していなかったため、有効な回答用紙は30人分しか得られていない。今回のアンケート調査の集約結果はその30人の回答結果となる。

まず、第1の選択問題については、選択肢A、B、C、Dの中から適切な格助詞を選ぶことになっているが、複数の格助詞が可能な質問を設けているため、正解が1つだけではない場合がある。よって、有り得る回答は以下の通りである。

表 24 選択問題における有り得る回答

正解 (誤答を選択していない場合)	完全な正解	正解が1つの場合に、正解(1つ)を回答
		正解が2つの場合に、正解(2つ)を回答
	不十分な正解	正解が2つの場合に、1つの正解しか回答していない
誤答 (誤答が含まれている場合)	正解が1つの場合で、誤答を1つないし複数選択している場合、あるいは正解と同時に誤答を選択している場合	
	正解が2つの場合で、誤答を1つないし複数選択している場合、あるいは正解と同時に誤答を選択している場合	

上記の表24から分かるように、アンケート調査の選択問題に関する学習者の回答にはいくつかのタイプの正解と誤答がある。正解のグループは、誤答は選択されていない場合とする。正解はさらに、「完全な正解」と「不十分な正解」とに分けられる。

完全な正解は、正しい選択肢を漏れなく選んだ場合を指す。それは問題によって、1つしか選べない場合と2つ選べる場合がある。例えば、「風力____利用した発電」という質問に対しては、Bの「を」が正しい答えとなる。この場合、正解が1つしかない。他方、「会議____開始する」という質問に対して、Aの「が」を選んでも、Bの「を」を選んでも、正しい文が成り立つことができ可能である。この場合、正解が2つある。完全な正解は2つの正解を選んだ場合を指す。

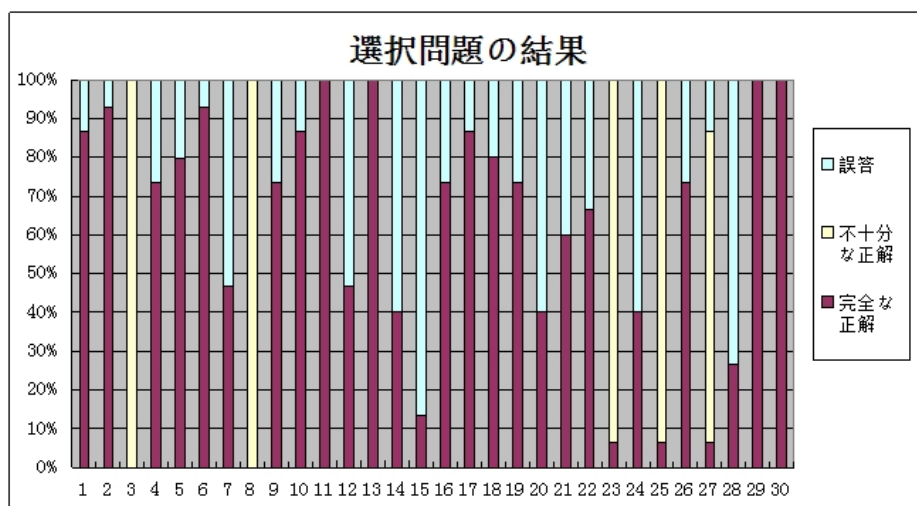
不十分な正解は、正しい選択肢が2つある場合に、その中の1つしか選んでいない場合

を指す。例えば、先の「会議____開始する」という質問においては、A の「が」と B の「を」の 2 つの正解があるが、学習者がそのうちのどちらか 1 つの正解しか選んでいない場合には、不十分な正解となる。

誤答の場合は必ず回答の中に誤答が含まれている場合とする。設問の種類によって、2 種類に分けることが可能である。正解が 1 つしかない場合には、ほかの 3 つの誤答のどれかを選んでしまう場合と正解と同時に誤答を選択する場合がある。同じように、正解が 2 つある場合には、ほかの 2 つの誤答のどれかを選んでしまう場合と正解と同時に誤答を選択する場合がある。

具体的に学習者が選択問題に対し、どのように回答をしたのかについて、下記の表 25 で示す。

表 25 選択問題の結果



上の表からわかるように、正解率が非常に高い問題（11、13、29、30 など）や正解率がかなり低い問題（15、20、28 など）がある。つまり、この表から日本語のサ変動詞の中には中国語母語話者にとって、習得しやすいタイプや習得しにくいタイプがあることがわかる。

次に、作文問題については、日本語と中国語の 2 字同形漢語を使って、異なる品詞ごとに日中両語において 1 つずつ文を作るが、日本語として使用する場合と中国語として使用する場合の両方で、すべての品詞について文を作った学習者がいない。設問 1 だけは誤用が出なかったが、2 から 5 の設問に対しては、誤用が出た。

以下、具体的にアンケート調査の選択問題と作文問題について分析・考察を行うこととする。

6.5 アンケート調査の分析と考察

6.5.1 選択問題についての分析

上記 6.4 の表 25 からわかるように、今回のアンケート調査において、正解率が非常に高い問題もあれば、正解率がかなり低い問題もある。つまり、日本語の 2 字漢語を用いたサ変動詞は中国語母語話者にとって、習得しやすいタイプもあれば、習得しにくいタイプもある。以下、正解率の高い質問項目と誤答率の高い質問項目のなかから典型的なものを取り出し、結果を分析していく。また、アンケート調査では、調査後に回答者にフォローアップインタビューも行っており、選択肢問題の分析においては適宜インタビューの結果も加えて、補足説明する。

6.5.1.1 正解率が比較的高い問題について

① 正解率が 100% の場合

今回のアンケート調査では、正解率が 100% の問題が 4 つ（11、13、29、30）あった。それらはすべて正解が 1 つの場合（表 24 を参照）のみで、正解が 2 つの場合はなかった。以下、上で挙げた各問題について具体的に分析する。

ア. 問 11 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
	A が	B を ¹⁴	C に	D どちらでもない
安全____確認する。		30		

問 11 の質問文は「安全____確認する」で、B の「を」が正解である。日本語の「確認する」は AV 型で、他動詞として用いられる。それと対応する中国語の“确认”（確認）も AV 型で、他動詞として用いられる。この設問において、誤用が出なかった原因は日本語と中国語の語構成と自他性が同じであるからと考えられる。

¹⁴ 正解となる選択肢のところは灰色になっている。以下も同様である。

イ. 問 13 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
大学____入学する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
			30	

問 13 の質問文は「大学____入学する」で、C の「に」が正解である。日本語の「入学する」は VN 型で、自動詞として用いられる。それと対応する中国語の“入学”も VN 型で、自動詞として用いられる。この設問においても、誤用が出なかった原因は上の問 11 と同様に日本語と中国語の語構成と自他性が同じであるからと考えられる。

ウ. 問 29 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
車____注意する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
			30	

問 29 の質問文は「車____注意する」で、C の「に」が正解である。日本語の「注意する」は VN 型で、自動詞として用いられる。それと対応する中国語の“注意”も VN 型で、自動詞として用いられる。この問題において、誤用が出なかった原因は日本語と中国語語の構成と自他性が同じであると考えられる。

エ. 問 30 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
新型旅客機____登場する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
	30			

問 30 の質問文は「新型旅客機____登場する」で、A の「が」が正解である。日本語の「登場する」は VN 型で、自動詞として用いられる。それと対応する中国語の“登場”（登場）も VN 型で、自動詞として用いられる。この設問においても、日本語と中国語の語構成と自他性が同じであることが誤用が出なかった原因と考えられる。

② 他の正解率が高い問題について

今回のアンケート調査では、他の正解率が高い問題として、1、2、6、17 などがある。以下、これらの各問題について具体的に分析する。

ア. 問 1 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
風力____利用した発電。	A が	B を	C に	D どちらでもない
	4	26		

問 1 の質問文は「風力____利用した発電」で、B の「を」が正解である。この問題において、B を選択したのは 26 人で、誤答の A を選択したのは 4 人である。日本語の「利用する」は VV 型で、前字と後字が並列関係となっていて、他動詞として用いられる。それと対応する中国語の“利用”も VV 型で、他動詞として用いられる。つまり、日本語と中国語の語構成と自他性は同じである。この問題についてあまり誤用が出なかったのも、そこに原因があると思われる。

イ. 問 2 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
大会____参加する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
		2	28	

問 2 の質問文は「大会____参加する」で、C の「に」が正解である。この問題において、誤答の B を選択したのは 2 人で、正解の C を選択したのは 28 人である。日本語の「参加する」は VV 型で、前字と後字が並列関係となっていて、自動詞として用いられる。それと対応する中国語の“参加”は VV 型で、前字と後字が並列関係となっていて、他動詞として用いられる。日本語と中国語で語構成が同じであるが、自他性がまったく違う。誤用が出た 2 人の学習者の場合は中国語、いわゆる母語の干渉のため、サ変動詞の自動詞を他動詞と誤ったと考えられる。ただ、誤用した人がきわめて少ない理由については、インタビュー調査の結果に基づけば、日本語学習の現場で、教師がサ変動詞「参加する」を取り出して、中国語との自他性の違いを説明するケースが多く、そのために、自他性の誤用が少ないものと思われる。

ウ. 問 6 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
魚____冷凍する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
	2	28		

問 6 の質問文は「魚____冷凍する」で、B の「を」が正解である。この問題において、

Bを選択したのは28人で、誤答のAを選択したのは2人である。日本語の「冷凍する」はAV型で、他動詞として用いられる。それと対応する中国語の“冷冻”もAV型で、他動詞として用いられる。つまり、日本語と中国語の語構成と自他性は同じである。この設問において誤用があまり出なかったのは、そこに原因があるのであろう。

エ. 問17について

質問文	各選択肢を選択した人数			
試験____実施する。	Aが	Bを	Cに	Dどちらでもない
	4	26		

問17の質問文は「試験____実施する」で、Bの「を」が正解である。この問題において、Bを選択したのは26人で、Aを選択したのは4人である。日本語の「実施する」はMV型で、他動詞として用いられる。それと対応する中国語の“实施”はAV型で、他動詞として用いられる。つまり、日本語と中国語の語構成は違うが、自他性は同じである。しかし、日本語のMV型も中国語のAV型も、前字が後字を修飾する結合関係となっており、2字漢語全体の自他性は動詞要素のVによって決まる。そのため、誤用があまり出なかったと考えられる。

6.5.1.2 誤答率が比較的高い問題について

① 正解が1つの場合

今回のアンケート調査において、全員が誤答した設問はなかった。しかし、正解が1つの設問において、誤答率が比較的高い問題は12、14、20、24、28などがある。以下、具体的にそれらの問題について分析する。

ア. 問12について

質問文	各選択肢を選択した人数			
限界____挑戦する。	Aが	Bを	Cに	Dどちらでもない
	2	14	14	

問12の質問文は「限界____挑戦する」で、Cの「に」が正解である。この問題において、Cを選択したのは14人、誤答のAを選択したのは2人、誤答のBを選択したのは14人である。日本語の「挑戦する」はVV型で、自動詞として用いられる。それと対応する中国語の“挑战”（挑战）もVV型であるが、他動詞として用いられる。日本語と中国語は同じ語構成を持っているが、自他性が異なっている。この問題の誤用について言えば、日本語

の「挑戦する」を中国語のように他動詞だと判断してしまい、Bの「を」を選択しているのである。つまり、母語からの干渉と言える。誤答のAは格助詞の問題だと考えられる。6.1.2でも述べたように、日本語のサ変動詞が自動詞として用いられる場合、それと共起する格助詞は「が」のみの場合や「が」・「に」両方が取れる場合などがある。「挑戦する」の自動詞用法について、行為の対象が「が」と共起できると間違えて、2人の学習者はAを選んだと考えられる。

イ. 問 14 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
規則____違反する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
	2	16	12	

問 14 の質問文は「規則____違反する」で、C の「に」が正解である。この問題において、C を選択したのは 12 人、誤答の A を選択したのは 2 人、誤答の B を選択したのは 16 人である。日本語の「違反する」は VV 型で、自動詞として用いられる。それと対応する中国語の“违反”（違反）も VV 型であるが、他動詞として用いられる。日本語と中国語は同じ語構成を持っているが、自他性が異なっている。この問題について、16 人、つまり半分以上の学習者が母語の干渉を受けて、日本語の「違反する」を中国語のように他動詞だと判断してしまい、誤用が出たのである。誤答の A を選択した学習者は日本語の「違反する」と共起する名詞との格関係を間違っただと考えられる。

ウ. 問 20 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
法案____反対する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
	6	10	12	
	2			

問 20 の質問文は「法案____反対する」で、C の「に」が正解である。この問題において、C を選択したのは 12 人、誤答の A を選択したのは 6 人、誤答の B を選択したのは 10 人、B と C の両方とも選択したのは 2 人である。日本語の「反対する」は VV 型で、自動詞として用いられる。それと対応する中国語の“反对”も VV 型であるが、中国語の場合は自他両用動詞として用いられる。日本語と中国語は同じ語構成を持っているが、自他性がまったく同一とは言えない。B の「を」を単独で、あるいは B の「を」と C の「に」を両方とも選択した場合は中国語いわゆる母語からの干渉で、誤用につながったと考えられる。

エ. 問 24 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
	A が	B を	C に	D どちらでもない
経済____発展する。	12	14	4	

問 24 の質問文は「経済____発展する」で、A の「が」が正解である。この問題において、A を選択したのは 12 人、誤答の B を選択したのは 14 人、誤答の C を選択したのは 4 人である。日本語の「発展する」は VV 型で、前字と後字が並列関係となり、自動詞として用いられる。それと対応する中国語の“发展”（発展）も VV 型で、前字と後字も並列関係となっているが、自他両用動詞として用いられる。日本語と中国語は同じ語構成を持っているが、自他性が一致していない。そこで、中国語母語話者の日本語学習者にインタビューした結果、「中国語に他動詞の用法があるので、日本語にも他動詞の用法があると思った」などの回答が得られた。つまり、母語からの干渉が誤用の原因となることがわかった。

オ. 問 28 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
	A が	B を	C に	D どちらでもない
公演____一週間延長する。	16	8	2	
	4			

問 28 の質問文は「公演____一週間延長する」で、B の「を」が正解である。この問題において、B を選択したのは 8 人、誤答の A を選択したのは 16 人、誤答の C を選択したのは 2 人で、A と B の両方を選択したのは 4 人である。日本語の「延長する」は VA 型で、他動詞として用いられる。それと対応する中国語の“延长”（延長）も VA 型であるが、自他両用動詞として用いられる。日本語と中国語は同じ語構成を持っているが、自他性がまったく一致しているとは言えない。この問題において、A と B の両方の選択肢を選んだ場合は中国語に影響されたと考えられる。A だけを選択した学習者にインタビューした結果、「中国語が自他両用なので、日本語も同じでしょう。でも、『公演』が前にあるから、『延長』が自動詞だと判断した」などの回答を得た。中国語は語順によって、動詞が自動詞か他動詞かを判断することができる（例えば、“发展经济”（経済を発展させる）の場合、動詞“发展”（発展する）は他動詞となり、“经济发展”（経済が発展する）の場合、動詞“发展”（発展する）は自動詞となる。つまり、“经济”（経済）と“发展”（発展）の語順に基づき、動詞“发展”（発展する）の自他性が変わる）。これらの学習者の場合はそのことが

日本語の自他性の判断に影響したと思われる。

② 正解が2つの場合

今回のアンケート調査において、正解が2つの場合は問3、8、23、25、27、合わせて計5問ある。この5問においては、すべて誤答率が高かった。以下、具体的にそれらの問題について分析する。

ア. 問3について

質問文	各選択肢を選択した人数			
	A が	B を	C に	D どちらでもない
体重____減少する。	14	16		

問3の質問文は「体重____減少する」で、Aの「が」とBの「を」が正解である。（「を」を正解とすることについては、必ずしも慣用となっていないという見方もあるが、具体例については『大辞泉（1998）』を参照）この問題において、Aを選択したのは14人、Bを選択したのは16人である。日本語の「減少する」はVA型で、自他両用動詞である。それと対応する中国語の“减少”もVA型で、自他両用動詞である。日本語と中国語では語構成と自他性が同じであるが、学習者が一方しか選択していないのは、その語の用法について十分に習得していなかった、あるいはまだ学習の途中にあるからと理解できる。

イ. 問8について

質問文	各選択肢を選択した人数			
	A が	B を	C に	D どちらでもない
会社____創業する。	1	29		

問8の質問文は「会社____創業する」で、Aの「が」とBの「を」が正解である。この問題において、Aを選択したのは1人、Bを選択したのは29人である。日本語の「創業する」はVN型で、自他両用動詞として用いられる。それと対応する中国語の“创业”（創業）もVN型であるが、中国語の場合は自動詞として用いられる。日本語と中国語の語構成は同じであるが、自他性が異なっている。そこで、日本語学習者にインタビューした結果、「中国語の場合は自動詞だとわかっているが、日本語はわからない。わからないとき、いつも他動詞として使う」などの回答が得られた。つまり、わからない日本語のサ変動詞に対しては、日本語学習者は他動詞を選ぶ傾向が見て取れる。

ウ. 問 23 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
制度____確立する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
	6	22		
	2			

問 23 の質問文は「制度____確立する」で、A の「が」と B の「を」が正解である。この問題において、完全な正解を選択したのは 2 人だけで、そのほかは A を選択したのが 6 人、B を選択したのが 22 人である。日本語の「確立する」は AV 型で、自他両用動詞として用いられる。それと対応する中国語の“确立”（確立）も AV 型で、自他両用動詞として用いられる。日本語と中国語においては、語構成と自他性が同じである。しかし、中国語の場合、自他両用動詞であるが、他動詞として用いられる場合が多いため、B の「を」を選択した学習者が多かったのであろう。

エ. 問 25 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
会議____開始する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
	16	12		
	2			

問 25 の質問文は「会議____開始する」で、A の「が」と B の「を」が正解である。この問題において、完全な正解を選択したのは 2 人だけで、そのほかは A を選択したのが 16 人、B を選択したのが 12 人である。日本語の「開始する」は VV 型で、自他両用動詞として用いられる。それと対応する中国語の“开始”（開始）も VV 型で、同じように自他両用動詞として用いられる。日本語と中国語では語構成と自他性が同じであるが、学習者が一方しか選択していないのはその語について、十分に習得していなかった、あるいはまだ学習の途中にあるからと理解できる。

オ. 問 27 について

質問文	各選択肢を選択した人数			
夢____実現する。	A が	B を	C に	D どちらでもない
	6	18	4	
	2			

問 27 の質問文は「夢____実現する」で、A の「が」と B の「を」が正解である。この問題において、完全な正解を選択したのは 2 人で、そのほかは A を選択したのが 6 人、B を選択したのが 18 人、C を選択した人も 4 人いる。

日本語の「実現する」は MV 型で、自他両用動詞として用いられる。それと対応する中国語の“实现”(実現)は AV 型で、同様に自他両用動詞として用いられる。日本語と中国語では語構成のタイプは異なっているが、日本語のサ変動詞の MV 型と中国語の 2 字漢語動詞の AV 型の語全体の自他性は両方とも動詞要素の V によって決まるため、「実現する」と“实现”(実現)の自他性は同じである。しかし、中国語の場合、自他両用動詞であるが、他動詞として用いられる場合が多いため、B の「を」を選択した学習者が多かったのであろう。誤答の C は格助詞の選択の間違いの問題だと考えられる。6.1.2 でも述べたように、日本語のサ変動詞が自動詞として用いられる場合、それと共に起する格助詞は「が」のみの場合や「が」・「に」両方が取れる場合などがある。「実現する」の自動詞用法について、格助詞が「に」も共起できると間違えて、4 人の学習者は C を選んだと考えられる。

6.5.1.3 選択問題のまとめ

選択問題において、正解率が比較的高い問題は以下のような 2 字同形漢語の場合である。

①日本語でも中国語でも AV 型になっている 2 字漢語の場合と日本語としては MV 型であるが、中国語としては AV 型の 2 字漢語の場合。これらの場合は日本語においても中国語においても、動詞要素の V によって 2 字漢語全体の自他性が決まり、しかも、同じ自他性になる。(例えば、問 11、問 17 など)

②日本語でも中国語でも VN 型になっていて、しかも両方とも自動詞の用法を持つ 2 字漢語の場合。中国語の 2 字漢語動詞の VN 型はすべて自動詞となっているから、日本語のサ変動詞も自動詞として用いられる場合は、誤用が出にくいと考えられる。(例えば、問 13、問 29 など)

一方、誤答率が比較的高い問題は以下のような 2 字同形漢語の場合である。

①日本語としても中国語としても VV 型になっていて、日本語と中国語の自他性が異なる 2 字漢語の場合。特に、日本語のサ変動詞が自動詞として用いられる際、誤用が出やすい。(例えば、問 12、問 14、問 20 など)

②日本語としても中国語としても VA 型になっている 2 字漢語の場合。日本語と中国語で自他性が一致する場合は比較的多いが、必ずしも習得が十分とは言えない。(例えば、問

28 など)

③日本語としても中国語としても VV 型、AV 型、VA 型となり、自他性も同じである 2 字漢語の場合。母語である中国語の用法習慣により、日本語を判断するため、誤用が出る。例えば、日本語と中国語がともに自他両用動詞として用いられる AV 型についても、中国語においては他動詞の用法がよく使われているため、日本語も他動詞として用いられると思い込んで、誤用になってしまう場合など。(例えば、問 23 など)

ここで正解率が比較的高い場合と誤答率が比較的高い場合をまとめてみると、以下のようになる。つまり、日本語と中国語の語構成、自他性が同じである場合、学習者が習得しやすく、誤用があまり出ないが(例えば、問 6、問 11、問 17 など)、場合によっては中国語の用法に影響され、誤用になってしまうこともある(例えば、問 23)。一方、日本語と中国語で語構成は同じであるが、自他性が異なる場合、学習者の母語である中国語の干渉を受けて誤用になりやすい(例えば、問 12、問 14、問 20 など)。

6.5.2 作文問題についての分析

今回のアンケート調査では、作文問題を 5 つ出している(設問は日中両語で異なる品詞ごとにすべて文を作ってもらうことを求めている)。以下は学習者の回答から典型的な例を抽出して、各問題の回答について考察していく。

①「提案する/提案」について

この場合、日本語はサ変動詞で、他動詞であるが、中国語は名詞の用法しかない。日本語と中国語の品詞はまったく異なっている。

回答例：新しいアイデアを提案する。

新しい方法を提案する。

提案通过了。(提案を可決した。)

这是一个很好的提案。(これはいい提案だ。)

以上の回答からわかるように、日本語の「提案する」については、学習者は「～を提案する」のように、他動詞として用いている。中国語の“提案”は名詞として用いられる。この問題においては、誤用が出なかった。日本語でも中国語でも、正しい品詞で文を作ったことがわかる。

②「決断する/決断」について

この場合、日本語はサ変動詞で、自他両用動詞である。中国語は名詞の用法と自動詞の用法がある。この語については、日本語と中国語の品詞と自他性において差異が見られる。

回答例：私が決断します。

彼と別れることを決断した。

我做了决断。(私が決断をした。)

是时候该做出决断了。(そろそろ決断をしないといけないときになっている。)

以上の回答からわかるように、日本語の「決断する」については、学習者は「～が決断する」のような自動詞の文と「～を決断する」のような他動詞の文の両方を作っている。回答者人数から見れば、自動詞の文を作ったのは 15 人で、他動詞の文を作ったのも 15 人である。つまり、自動詞の文と他動詞の文の作成者は半分ずつとなっている。中国語の“決断”について、“做了决断”(決断をした)、“做出决断”(決断をする)のように、学習者はすべて名詞の文を作った。実際に、中国語の“決断”は名詞のほかに、動詞としても用いられる。古典である《吕氏春秋・决胜》には“勇则能决断”(勇敢であれば、決断することができる)という文があり、そこの“決断”は動詞の用法である。また同様に《续孽海花》の第四十八回には“我拿不定主意，所以请先生和超如替我决断一下子”(私はなかなか決められないから、先生と超如を頼んで、私の代わりに決断してください)という文があり、そこの“決断”も動詞の用法である。もちろん、現代中国語の中でも“決断”は動詞として用いられるが、名詞の用法より使う頻度が少ないため、学習者は名詞と見なしたと考えられる。

③「緊張する/紧张」について

この場合、日本語はサ変動詞で、自動詞である。中国語は形容詞として用いられる。日本語と中国語の品詞はまったく異なっている。

回答例：私は緊張しています。

彼と会う前にすごく緊張している。

*試験の前に、私はとても緊張です。

我很紧张。(私はとても緊張している。)

他一到考试就非常紧张。(試験になると、彼は非常に緊張してくる。)

以上の回答からわかるように、日本語の「緊張する」について、学習者は「～が(は)

緊張する」のような自動詞の文を作った。しかし、アンケート調査の質問に「緊張する」と書いてあるのに、「とても緊張です」という形を取って、日本語の「緊張する」を形容詞（ナ形容詞）として扱う誤用が出ている。しかも、回答例ではすべて挙げていないが、5人が同様な誤用をしている。中国語の“紧张”は“很紧张”（とても緊張する）、“非常紧张”（非常に緊張する）のように、形容詞の用法を持つ。学習者が母語の干渉を受け、日本語の「緊張する」も形容詞だと誤解してしまった可能性がある。そのため、こうした品詞に関する誤用が出たと考えられる。

④「低下する/低下」について

この場合、日本語はサ変動詞で、自動詞である。中国語は形容詞として用いられる。日本語と中国語の品詞はまったく異なっている。

回答例：能力が低下している。

地位が低下する。

*彼の能力が低下です。

*彼の運動能力は比較的に低下です。

这款手机功能低下。（このタイプの携帯電話の機能はよくない。）

他的免疫能力低下，所以经常生病。（彼の免疫力はよくないので、よく病気になる。）

以上の回答からわかるように、日本語の「低下する」について、学習者は「～が低下する」のように自動詞の文を作った。しかし、③と同じように、アンケート調査の質問に「低下する」と書いてあるのに、「～が低下です」という形を取って、日本語の「低下する」を形容詞（ナ形容詞）として扱う誤用が出ている。しかも、7人もこのような誤用が出た。中国語の“低下”は形容詞であるため、学習者が母語の干渉を受け、日本語の「低下する」も形容詞（ナ形容詞）だと誤解してしまった可能性がある。そのため、品詞に関する誤用が出たと考えられる。

⑤「比較する/比较」について

この場合、日本語はサ変動詞で、他動詞であるが、中国語は他動詞と副詞として用いられる。つまり、中国語の品詞には動詞のほか、副詞もある。

回答例：A と B を比較したら、A を選んだ。

A 商品と B 商品を比較した上で、A 商品を買うことにした。

比较长短。(長さを比較する。)

与去年的平均气温相比较, 今年的平均气温上升了 0.5 度。

(去年の平均気温と比較すれば、今年の平均気温は 0.5 度上がった。)

以上の回答からわかるように、日本語の「比較する」について、学習者はすべて「～を比較する」のように他動詞の文を作った。つまり、日本語の場合は誤用が出なかった。中国語の“比较”について、“比较长短”(長さを比較する)、“相比较”(～と比較する)のように、学習者はすべて動詞の文を作った。実際には、中国語の“比较”は動詞のほかに、副詞としても用いられる。現代中国語である《论人民民主专政》には“错误和挫折教训了我们, 使我们比较地聪明起来了”(錯誤と挫折が我々に教訓を与え、我々を賢くさせてきた)という文があり、その“比较”は副詞の用法である。また、《东方》第五部第十五章には“这时敌我双方的炮火都比较岑寂”(このとき、敵軍と我が軍隊の砲火は比較的しんと静まっている)という文があり、その“比较”は副詞の用法である。現代中国語では、動詞と副詞の用法はほぼ同じように使われているが、学習者に対して、動詞の文しか作っていない理由をインタビューで聞いた。その際には、「日本語が他動詞なので、中国語も同じ用法があるから、日本語と中国語が同じだと思った。副詞の用法をすっかり忘れていた」などの回答が得られた。

以上の①～⑤までの考察内容をまとめると、次のことがわかる。日本語が動詞であっても、中国語において形容詞として用いられる 2 字漢語の場合、誤用になりやすい(例えば、「緊張する」、「低下する」)。その原因は母語である中国語からの干渉である。また、中国語において、名詞として用いられる 2 字漢語には誤用が少なかった(例えば、「提案する」)。それでは、中国語が形容詞の場合でも名詞の場合でも日本語のサ変動詞と品詞が異なるのに、なぜ中国語で形容詞の場合には誤用が多かったのか。それについては、次のように考えられる。中国語の形容詞の中には、動詞に近い用法を持つものがある。例えば、“天气冷了”(天気が寒くなった)など。この文において、“冷了”は述語部分となっているが、“冷”は動詞ではない。実際は“天气冷了”(天気が寒くなった)の元の形は“天气变冷了”(天気が寒くなった)で、そこでは変化を表す“了”が付いているため、動詞の“变”を省略してある。そのため、形容詞の“冷”は動詞のように見える。このように形容詞と動詞が文の中で同じ位置にあるため、たとえ名詞とははっきり分けられても、形容詞と動詞は品詞上、位置関係では区別しにくい。そのため、誤用が出やすいと考えられる。つまり、日

本語と中国語の品詞が異なる場合、中国語の理解が日本語の理解に影響を及ぼすことがわかる。

6.6 まとめ

第6章ではまず、『明鏡国語辞典（第2版）』、『大辞泉（1998）』、『大辞林（第3版）』といった3つの日本語の辞書にしたがい、サ変動詞と共起する格助詞に基づいて、サ変動詞を他動詞、自動詞、自他両用動詞に分類した。それから、第4章と第5章の考察結果から次のような仮説を立てた。（本論文 6.2 の仮説の再掲）

- ① サ変動詞と対応する中国語が形容詞、または副詞として用いられる場合、誤用になりやすい。
- ② 日中両語の自他性の対応関係が最も多様な VV 型のサ変動詞に関し、自他性の習得が最も難しく、最も誤用になりやすい。
- ③ 日中両語で自他性が対応していない場合も多い VN 型、VA 型、NV 型は比較的誤用になりやすい。
- ④ 日中両語で自他性が対応している AV 型と MV 型については、学習者にとって、誤用の可能性が低い。

これらの仮説を検証するために、日本語サ変動詞の語構成、自他性および格助詞を参考にしながら、使用頻度の高い2字漢語を選択し、中国語母語話者を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査を通じて、中国語母語話者の学習実態を考察し、誤用の原因がどこにあるかを明らかにしようとした。調査内容は選択問題と作文問題に分け、選択問題は30問、作文問題は5問とした。調査の結果として、以下のことがわかった。

選択問題については、日本語・中国語に関し、次のような3つのタイプの場合に正解率が高かった。1つ目は日本語も中国語も AV 型になっている2字漢語の場合（例えば、確認する/确认、冷凍する/冷冻）、そして2つ目は日本語は MV 型であるが、中国語は AV 型の2字漢語の場合（例えば、実施する/实施）、3つ目としては日本語も中国語も VN 型になっていて、しかも両方とも自動詞の用法を持つ2字漢語の場合（例えば、入学する/入学、注意する/注意）である。一方、次の2つの場合は誤用になりやすい。つまり、日本語も中国語も VV 型になっていて、日本語と中国語の自他性が異なる2字漢語の場合（例えば、挑戦する/挑战、違反する/违反、反対する/反对など）と日本語も中国語も VA 型になっている2字漢語の場合（例えば、延長する/延长、）である。それ以外にも、日本語でも中国

語でも VV 型、AV 型、VA 型となり、しかも自他性が同じである 2 字漢語（例えば、VV 型：開始する/开始、AV 型：確立する/确立、VA 型：減少する/減少など）については、母語である中国語の自他の使用頻度などに影響されて、日本語を判断する場合には、自他に関して誤用が出やすい。つまり、日本語と中国語の語構成と自他性が同じである場合、学習者が習得しやすく、誤用があまり出ないが、場合によっては中国語の自他の用法の使用頻度などに影響され、誤用になってしまう場合もある。一方、日本語と中国語の語構成は同じであるが、自他性が異なる場合、学習者は母語である中国語の干渉を受けて、誤用になりやすい。

作文問題については、日本語が動詞であるのに対して、中国語では形容詞として用いられる 2 字漢語の場合、誤用になりやすい（例えば、緊張する/紧张、低下する/低下）。そして、日本語と中国語の品詞が異なる場合、母語である中国語の品詞が日本語の品詞理解に影響を与えることも明らかになっている。

以上のアンケート調査の結果を事前の 4 つの仮説と照らしてみると、以下のことがわかる。

仮説①の「サ変動詞と対応する中国語が形容詞、または副詞として用いられる場合、誤用になりやすい」については、作文問題において中国語では形容詞の用法がある場合、2 字同形漢語となる日本語のサ変動詞に誤用が現われた。例えば、作文問題の「緊張する/紧张」、「低下する/低下」などが挙げられる。中国語に副詞の用法がある場合（例えば、“比较（比較）”）、今回の学習者は当該の語の中国語の副詞の用法を忘れたため、日本語の学習には直接影響が出なかった。

仮説②の「日中両語の自他性の対応関係が最も多様な VV 型のサ変動詞に関し、自他性の習得が最も難しく、最も誤用になりやすい」については、ともに VV 型で日本語と中国語の自他性が異なる場合に、とりわけ日本語に自動詞の用法しかない場合（例えば、挑戦する/挑战、違反する/违反、反対する/反对など）、誤用が出た。しかし、日中両語において 2 字同形漢語の自他性が同じであっても、学習者は母語である中国語の自他の使用頻度の差などに影響され、誤用になってしまうこともある（例えば、開始する/开始）。

仮説③の「日中両語で自他性が対応していない場合も多い VN 型、VA 型、NV 型は比較的誤用になりやすい」に関しては、今回のアンケート調査では、VN 型はそれほど誤用が出なかったが（例えば、入学する/入学、登場する/登场など）、VA 型の場合は誤用が出た（例えば、延長する/延长、減少する/减少）。このような誤用に関する差については今後の

課題としたい。なお、今回のアンケート調査では、NV 型の語は使用していない。

仮説④の「日中両語で自他性が対応している AV 型と MV 型については、学習者にとって、誤用の可能性が低い」については、今回のアンケート調査でも同じ結果を得た。（例えば、確認する/確認、実施する/実施）

第7章 おわりに

本研究は、中国語母語話者の日本語教育に対する貢献を目指し、2字同形漢語を用いた使用頻度の高い日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語を語構成という視点から対照し、誤用の原因を探る手掛かりとした。以下、具体的にまとめてみる。

まず第1章で本研究の目的、方法などを述べたあと、第2章では日中同形漢語のそれぞれの語彙体系の中での位置づけを行い、第3章では日中両語の2字漢語の語構成を中心とした先行研究をまとめた。第4章では、2字漢語が日本語ではサ変動詞になるが、中国語ではどのような品詞になるのかを考察し、さらに中国語で当該の品詞になる2字漢語の個々の構成要素がどのような品詞で、どのような組み合わせになっているのかを分析した。第5章では、2字漢語の個々の構成要素と自他性との関わりについて、日本語・中国語を個々に分析するとともに、日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の動詞の自他性の異同についても考察した。さらに第6章では、中国語母語話者の日本語学習者がサ変動詞を学習する際、どのような誤用が出るのか、その原因がどこにあるのかを知るため、アンケート調査を行った。そこでは第4章、第5章の結果に基づき、2字漢語の学習に関わる仮説を立て、検証してみた。これら6章までの考察の結果を今後の中国語母語話者の日本語学習にどのように活用できるか、この第7章でまとめてみる。

7.1 日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の品詞性について

語構成という視点から日本語のサ変動詞と対応する中国語の品詞性およびその中国語を形成する前字と後字の品詞性、結合関係を考察して、以下の結果が得られた。(本論文の第4章を参照)

① 日本語ではサ変動詞として用いられるが、中国語では動詞以外の品詞、つまり、名詞、形容詞、副詞としても用いられる。

② サ変動詞と対応する中国語では、2字漢語が名詞になる語には名詞要素が含まれるNN型、VN型、AN型もあり、名詞要素が含まれないVV型、AA型もある。名詞要素がない場合、その名詞は専有名詞、または動作・行為の抽象名詞である(「専有名詞」、「抽象名詞」については本論文25頁の注10と注11を参照)。2字漢語が形容詞になる語には形容詞要素が含まれるAA型、VA型、MA型、AV型と同時に、形容詞要素が含まれないVN型、VV型もある。これらVN型、VV型の形容詞の場合、動作・行為の結果・状態を表している。2字漢語が動詞になる語にはすべて動詞要素が含まれている。

これらのことから、サ変動詞に対応する中国語 2 字漢語の品詞は名詞、形容詞、動詞などとなる場合があり、多様であること、また 2 字漢語が動詞となっている場合にはすべて動詞要素を含んでいることは日本語学習において注目してよい。

7.2 日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の動詞の自他性について

構成要素に基づいて、日本語と中国語 2 字漢語を VV 型、AV 型、MV 型、VN 型、VA 型、NV 型の 6 タイプに分けて、それらの自他性を分析した。その結果、日本語と中国語とのそれぞれで用いられる際、2 字漢語全体の自他性と動詞要素の自他性の関係がほとんど同じ場合もあれば、まったく異なる場合もある。(下記の分類における具体的な 2 字漢語の例については後の表 27 を参照)

① VV 型の場合

日本語、中国語の 2 字漢語の分類に用いた 6 タイプの中で、この VV 型の 2 字漢語は日中両語において最も語数が多い。しかも、さまざまな場合に分けられる。

まず、 V_1 と V_2 が並列関係の場合（「並列関係」、「対立関係」については、本論文の 3.2 を参照）、 V_1 と V_2 がともに自動詞、またはどちらか片方が自動詞の場合、VV 全体も自動詞として用いられる。 V_1 と V_2 の一方が他動詞、もう一方が自他両用動詞の場合、VV 全体は他動詞、または自他両用動詞として用いられる。 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合、VV 全体は自動詞、他動詞、または自他両用動詞の用法を持つ。ここまでの場合においては、日本語のサ変動詞の VV 型と中国語の動詞の VV 型が持つ自他性のタイプについては同じである。ただ、日本語の自他性のタイプが同じ中国語の自他性のタイプに必ず対応するとは限らない。一方、 V_1 と V_2 がともに他動詞の場合、VV 全体は中国語では他動詞として用いられるが、日本語における VV 全体は他動詞、または自動詞として用いられる。ただ、自動詞として用いられる語の数はそれほど多くない。

次に、 V_1 と V_2 が対立関係の場合、日本語と中国語において自他性の差異が見られる。日本語のサ変動詞は、 V_1 と V_2 がともに他動詞の場合では、VV 全体は自動詞として用いられる。 V_1 と V_2 がともに自動詞では、VV 全体も自動詞として用いられる。 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合では、VV 全体は他動詞、または自他両用動詞として用いられる。一方、中国語の動詞は、 V_1 と V_2 がともに他動詞の場合では、VV 全体は自動詞または他動詞として用いられる。 V_1 と V_2 がともに自他両用動詞の場合では、VV 全体は自他両用動詞として用いられる。今回のデータでは、中国語の V_1 と V_2 がともに自動詞の場合はなかつ

た。この場合については今後さらに調査する必要がある。

② AV 型の場合

AV 型に含まれる動詞要素 V の自他性と 2 字漢語 AV 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞も中国語の 2 字漢語動詞とともに動詞要素 V の自他性が同じである。つまり、動詞である 2 字漢語 AV 全体の自他性は V によって決まる。V が他動詞の用法を持つ場合、AV 全体も他動詞として用いられる。V が自動詞の用法を持つ場合、AV 全体も自動詞として用いられる。V が自他両用動詞の用法を持つ場合、AV 全体も自他両用動詞として用いられる。

③ MV 型の場合

MV 型に含まれる動詞要素 V の自他性と 2 字漢語 MV 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞も中国語の 2 字漢語動詞とともに動詞要素 V の自他性と同じになる。つまり、動詞となる 2 字漢語 MV 全体の自他性は含まれる動詞要素 V によって決まる。V が他動詞の場合、MV 全体も他動詞として用いられる。V が自動詞の場合、MV 全体も自動詞として用いられる。V が自他両用動詞の場合、MV 全体も自他両用動詞として用いられる。

④ VN 型の場合

VN 型に含まれる V の自他性と 2 字漢語 VN 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞と中国語の 2 字漢語動詞の間で対応していない。日本語のサ変動詞については、V が他動詞または自他両用動詞の場合、VN のサ変動詞は自動詞、他動詞、自他両用動詞として用いられる。V が自動詞の場合、VN のサ変動詞は自動詞の用法しか持たない。それに対して、中国語の VN 型の 2 字漢語動詞について、V が他動詞の場合しか存在せず、VN 全体としては逆に自動詞の用法しか持たない。

⑤ VA 型の場合

VA 型に含まれる V の自他性と 2 字漢語 VA 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞と中国語の 2 字漢語動詞の間にはほとんど対応関係がない。日本語のサ変動詞については、V が他動詞の場合、VA 全体も他動詞となる。V が自他両用の場合、VA 全体は他動詞、自動詞、自他両用動詞として用いられる。それに対して、中国語の 2 字漢語動詞の動詞要素 V は他動詞の場合しか存在しない。ただし、2 字漢語 VA 全体としては他動詞、自動詞、自他両用動詞として用いられる。

⑥ NV 型の場合

日中両語の動詞に関する 2 字漢語を分けた 6 タイプの中では、NV 型の 2 字漢語が最も少ない。しかも、NV 型に含まれる V の自他性と 2 字漢語 NV 全体の自他性の関係については、日本語のサ変動詞と中国語の 2 字漢語動詞の間には違いが見られる。日本語のサ変動詞については、V が他動詞の場合、NV 全体は他動詞、自他両用動詞として用いられ、V が自他両用動詞の場合、NV 全体は他動詞として用いられる。それに対して、中国語の 2 字漢語動詞については、V が自他両用動詞の場合しかない。その場合、2 字漢語動詞 NV も自他両用動詞となる。

以上の内容をまとめると、表 26 になる。ただし、2 字漢語の構成要素の品詞に基づくタイプ分けや自他性の判断、動詞の有無（無い場合は×印で表す）、用例などについては、今回分析に用いたデータに基づく。

表 26 日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の動詞の自他性

タイプ		動詞要素 V の日中両語における自他性	日本語のサ変動詞の自他性	中国語の動詞の自他性
VV 型	V ₁ と V ₂ が並列関係	V ₁ と V ₂ がともに他動詞	自動詞（例：恋愛するなど）、他動詞（例：使用するなど）	他動詞（例：使用など）
		V ₁ と V ₂ がともに自動詞	自動詞（例：関係するなど）	自動詞（例：妊娠など）
		V ₁ と V ₂ がともに自他両用動詞	自動詞（例：出現するなど）、他動詞（例：開発するなど）、自他両用動詞（例：移動するなど）	自動詞（例：失敗など）、他動詞（例：違反など）、自他両用動詞（例：开发など）
		V ₁ が自動詞、V ₂ が自他両用動詞	自動詞（例：死亡するなど）	自動詞（例：死亡）
		V ₁ が他動詞、V ₂ が自他両用動詞	他動詞（例：設備するなど）、自他両用動詞（例：継続するなど）	他動詞（例：禁止など）、自他両用動詞（例：競争など）

		V ₁ が自他両用動詞、 V ₂ が自動詞	自動詞（例：休憩するな ど）	自動詞（例：存在）
		V ₁ が自他両用動詞、 V ₂ が他動詞	他動詞（例：表示するな ど）、自他両用動詞（例： 決断する）	他動詞(例：請求など)、 自他両用動詞（例：思 考など）
	V ₁ とV ₂ が対立 関係	V ₁ とV ₂ がともに他 動詞	自動詞（例：呼吸する）	自動詞（例：呼吸）、他 動詞（例：加減）
		V ₁ とV ₂ がともに自 動詞	自動詞（例：勝負する）	×
		V ₁ とV ₂ がともに自 他両用動詞	他動詞（例：加減する）、 自他両用動詞（例：上下 する）	自他両用動詞（例：上 下など）
AV 型	自動詞	自動詞（例：同居するな ど）	自動詞（例：同居など）	
	他動詞	他動詞（例：重視するな ど）	他動詞（例：確認など）	
	自他両用動詞	自他両用動詞（例：確立 する）	自他両用動詞（例：確 立など）	
MV 型	自動詞	自動詞（例：不足する）	自動詞（例：不足）	
	他動詞	他動詞（例：実施するな ど）	他動詞（例：専攻）	
	自他両用動詞	自他両用動詞（例：実現 するなど）	自他両用動詞（例：再 現など）	
VN 型	自動詞	自動詞（例：安心するな ど）	×	
	他動詞	自動詞（例：読書するな ど）、他動詞（例：執筆 するなど）、自他両用動 詞（例：取材するなど）	自動詞（例：投資など）	

	自他両用動詞	自動詞（例：入学するなど）、他動詞（例：出荷するなど）、自他両用動詞（例：出店するなど）	×
VA 型	自動詞	×	×
	他動詞	他動詞（例：証明するなど）	自動詞（例：保湿）、他動詞（例：拡大など）、自他両用動詞（例：減少など）
	自他両用	自動詞（例：発達する）、他動詞（例：延長するなど）、自他両用動詞（例：拡大するなど）	×
NV 型	自動詞	自動詞（例：機能する）	×
	他動詞	他動詞（例：意図するなど）、自他両用動詞（例：電話する）	×
	自他両用動詞	他動詞（例：中止する）	自他両用動詞（例：中止）

7.3 アンケート調査の結果と日本語教育への示唆

今回のアンケート調査は日本の大学に在学している、日本語のレベルが中級から上級の中国語母語話者を対象とした（本論文 6.3 を参照）。アンケートは選択問題と作文問題の 2 つに分けて行った。結果について再度要約すると、以下のようになる。

選択問題において、日本語と中国語の語構成、自他性が同じである場合、学習者は習得しやすく、誤用もあまり出ないが、場合によっては中国語の 2 字漢語の自他性の使用頻度などに影響され、誤用になってしまった回答もある。一方、日本語と中国語で語構成は同じであるが、自他性が異なる場合、学習者は母語である中国語の干渉を受けて誤用になりやすい。

作文問題においては、日本語が動詞であって、中国語においては形容詞となる２字漢語が誤用になりやすい。そして、日本語と中国語の品詞が異なる場合、中国語の２字漢語の品詞が日本語の２字漢語の品詞理解に影響することも明らかになった。

今回のアンケート調査によって、中国語母語話者の日本語サ変動詞の習得状況の一端を捉えることができた。この調査結果を踏まえて、中国語母語話者のための日本語教育への提言を試みる。

これまで日本語教師が日本語の２字漢語を教える際、漢語を学習者にそのまま覚えさせて、漢語の語構成についてはほとんどふれていない。この場合、学習者は２字漢語の構造や中国語の２字漢語との語構成上の異同を知らずに学習を進めてしまう可能性がある。語構成を学習者に教えれば、日本語における２字漢語がどのように構成されているのか、その意味や用法の理解に役立つ。そしてサ変動詞の場合、その２字漢語が自動詞なのか他動詞なのか、それとも自他両用動詞なのかも学習の過程で一度立ち止まって考えやすくなる。そのため、学習項目として、２字漢語の語構成に関する知識を学習者に教えることは有用性があると考えられる。

しかし、２字漢語の語構成に関する知識を学習項目として日本語学習に導入する場合、どの時期にどのように教えればいいのか、重要な問題となってくる。当然、基礎段階での導入は難しい。なぜなら、学習者はまだ日本語を始めたばかりで、さまざまな知識を覚えなければならない、このときに導入することは学習者に混乱を及ぼす可能性が高いからである。基礎段階で学習者は日本語の漢語についてのイメージができたあと、語構成に関する知識を学習項目として徐々に導入すればよいと考える。

日本語教師にとっては、日本語と中国語はまったく違う言語であり、日本語の漢語は中国語の漢語とは文法的にも同じではないということを学習者に教えることが重要に思われる。中国の大学の中国人日本語教師は、日本語と中国語両言語における同形漢語が多いため、漢語については詳しく説明しなくても、学習者はおおむね理解できるであろうという先入観を持っている。さらに、日本語としての漢語の使い方がわからないときには中国語の漢語の使い方をそのまま応用すればよいと学習者に教える教師もいる。その際、学習者は自分の持っている中国語の知識に基づいて、日本語の漢語を理解しようとする。今回のアンケート調査からもわかるように、こうした中国語母語話者の日本語学習のあり方が日本語における２字漢語の誤用の原因となっている可能性もある。例えば、作文問題において、日本語の「緊張する」と「低下する」に対して、かなりの数の日本語学習者は動詞と

して用いた日本語文を作らず、形容詞として用いた文を作った。その理由は中国語では“緊張”(緊張)、“低下”(低下)が形容詞であるために、母語の干渉を受けたものと思われる。しかし、学習者に対して、すでに持っている中国語の知識をまったく使わないように求めることはきわめて困難である。ただ日本語の漢語は日本語であり、中国語の漢語はあくまでも中国語であると意識させることは必要であろう。このようにすれば、中国語母語話者が日本語の2字漢語、例えばサ変動詞に出会った場合、それを日本語として意識し、2字漢語の語構成を分析し、各構成要素の品詞性を考えて学習する際にも役立つであろう。上記の「緊張する」、「低下する」の「緊」「張」「低」「下」は日本語の語の構成要素として用いられているに過ぎず、中国語における漢語の構成要素と同じように見なすことはできない。中国語の“紧”(緊)、“张”(張)、“低”、“下”はすべて形容詞に対し、日本語における「緊」、「張」、「下」は動詞要素で、「低」は形容詞要素である。そして、日本語において形容詞要素の「低」は動詞要素の「下」を連用修飾している。これらのことから、中国語とは異なり、「緊張」、「低下」の2字漢語を用いたサ変動詞が可能となる。このように学習者に意識させれば、日本語と中国語の品詞上の違いにも理解が及ぶことになるであろう。

次に、本研究では自他性に関して、日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の2字漢語動詞を語の構成要素に基づき6タイプに分けた。日本語のサ変動詞においては、中国語の自他性と同じであるものもあれば、違うものもある。そこで、学習者には先に自他性が同じであるタイプの2字漢語を教えて、そのあとに違うタイプの2字漢語について文法的に詳しく説明し、学習者に2字漢語を用いたサ変動詞について理解してもらった方がよいであろう。今回のアンケート調査からもわかるように、日本語と中国語の語構成および自他性が同じである2字漢語、つまり、AV型、MV型、さらには自動詞の用法を持つVN型の2字漢語が習得しやすいため、これらをまず学習者に教えればよいと考える。AV型、MV型の2字漢語においては、日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の2字漢語動詞ともに、動詞要素Vの自他性によって、2字漢語全体の自他性が決まる。VN型の2字漢語については、中国語の場合、このタイプの2字漢語すべてが自動詞となっているため、日本語のサ変動詞が自動詞の用法を持つ場合には、中国語母語話者も理解しやすい。一方、VV型、VA型などのような日本語と中国語の自他性に相違があるタイプの2字漢語、いわゆる、日本語と中国語の語構成は同じであるが、自他性が異なる2字漢語については、学習者が日本語のこれら以外の2字漢語をかなり使いこなせるようになった状況の元で教えたほうがよいと思われる。VV型とVA型のタイプにおいては、2字漢語の個々の構成要素

により 2 字漢語全体がさまざまな用法を持つことができるため、用法については細かい説明が必要となる。そのため、学習者においては日本語の漢語に関する文法上の知識も要求される。したがって、日本語と中国語に異同があるタイプの 2 字漢語については、学習の順をあとに持ってきてもよい。

また、実際の教育現場において活用できるような学習素材を提供できるように、日本語と中国語の 2 字漢語習得に関してはなお一層研究を進める必要がある。現在、中国語母語話者の 2 字漢語習得の研究はまだ母語である中国語の影響を確認する段階にとどまっていると言える。

これまでの日本語と中国語の 2 字同形漢語についての先行研究は主に、意味的相違および品詞的相違に関するものが多い。それに対して、語構成に関する研究はそれほど多いとは言えない。日本語サ変動詞の語構成に関する研究は、野村（1999）などがあるが、それらは造語パターンを分類・整理することに重点が置かれており、2 字漢語が統語的にどのように振る舞うかという研究はまだ十分とは言えない。一方、中国語との対照では、荒川（2002）などによって同形語を構成する語基の意味について研究が行われているが、語構成という視点から、日中両言語の品詞的異同、動詞の自他性の判断などの研究は必ずしも十分とは限らない。したがって、本論文はこうした研究状況を踏まえて 2 字漢語の分析・考察を行ったものであるが、今後もなお一層日本語と中国語の 2 字同形漢語について、語構成の異同と統語的振る舞いについての研究が必要となる。

7.4 問題点および今後の課題

本研究では、語構成という視点から、使用頻度の高い日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語との対照研究を行った。そこで、対象研究となるサ変動詞は国立国語研究所（2006）『現代雑誌 200 万字言語調査語彙表』公開版（ver.1.0）、上位 5000 番（和語、漢語、外来語などを含める）までの 2 字の同形漢語の中から抽出したものである。使用頻度の高い 2 字漢語を用いて分析したため、学習言語としての日本語のサ変動詞の一般的傾向は示すことができたと思われる。しかし、量的には 425 語と数が限られている。そのため、日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の動詞の自他性を分析するとき、日本語と中国語の用例数としては十分とは言えない。今後はさらに、データを充実させる必要がある。

一方、今回は日本語と中国語の 2 字同形漢語に限って調査対象としたが、日本語の中には、2 字漢語のほかに、3 字漢語、4 字漢語もある。例えば、2 字漢語の統語的振る舞いと

4字漢語の統語的振る舞いは必ずしも同じとは限らないであろう。例えば、「ハイジャック機が空港に着陸した。」の文では、「着陸」は「～する」という形が使えるが、「強制着陸」は「～する」という形が使えず、「ハイジャック機が空港に強制着陸した」は非文となる（ここでの例と判断は小林 2004 によるものである。ただ、日本語母語話者の中には「強制着陸する」という表現を認める者もいる）。一方、「排除」の場合は、「強制排除」が「～する」という形で使える。たとえば、「警察がデモ隊を排除した」と同様に、「警察がデモ隊を強制排除した」も可能となる。したがって、2字漢語だけではなく、他の3字や4字の同形漢語なども考察の対象となろう。こうした2字同形漢語以外の他の同形漢語についての分析・考察は今後の課題としておきたい。

参 考 文 献

- 荒川清秀（1979）「中国語と漢語—文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて」『愛知大学文革論叢』61号,1-28頁
- 荒川清秀（1988）「複合漢語の日中比較」『日本語学』5号,56-67頁
- 荒川清秀（2002）「日中漢語語基の比較」『国語学』53号,84-96頁
- 荒川清秀・那須雅之（1992）「中国語の想造語力—二字漢語を中心に—」『日本語学』5号,75-85
- 庵功雄（2009）「中国語話者による漢語サ変動詞の自他の習得」『中国語母語話者による日本語動詞の自他の習得』2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集,82-84頁
- 五十嵐昌行（1996）「表現（日本語）時の母語干渉—山東大学語言文学事例報告」『日語学習与研究』3号,41-43
- 大河内康憲（1992）「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』411-447頁
- 奥津敬一郎（1967）「自動詞化・他動詞化および両極化転形」『国語学』70号,46-66頁
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- 許嘉璐（1991）『中国中学教学百科全書（語文卷）』瀋陽出版社
- 金若静（1987）『同じ漢字でも　これだけ違う日本語と中国語』学生社
- 黄漢生（1981）『現代漢語（語法修辞）』書目文献出版社
- 国立国語研究所（2006）『現代雑誌 200 万字言語調査語彙表』公開版（ver.1.0）
- 国家語言文字工作委员会（2008）『現代漢語常用詞表（草案）』
- 顧士熙（2004）『現代漢語常用詞用法詞典』中国書籍出版社
- 侯仁鋒（1997）「同形語の品詞の相違についての考察」『日本学研究』6号,78-88頁
- 小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 史存直（1982）『語法新編』華東師範大学出版社
- 朱京偉（2002）「構成要素の分析から見る中国製漢語と和製漢語」『日語学習与研究』111号,17-31頁　對外經濟与貿易大学
- 朱德熙（1982）『語法講義』商務印書館
- 沈国威（1993）「現代中国語における日本製漢語」『日本語学』7号,41-49
- 石堅・王健康（1983）「日中同形語における文法的ズレ」『日本語・中国語対応表現用例集』5号,56-82頁
- 盛玉麒（2003）『現代漢語』高等教育音像出版社

- 曾根博隆（1988）「日中同形語に関する基礎的考察」『総合科学研究』30号 明治学院大学
- 橘純信（1994）「現代中国語における中日同形語の占める割合」『国際関係学部研究年報（日本文学）』15号,99-116頁 日本大学国際関係学部
- 建石始（2009）「日中両言語における自他概観」『中国語母語話者による日本語動詞の自他の習得』2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集,79-81頁
- 中国小学教学百科全书（1993）『中国小学教学百科全书（語文巻）』瀋陽出版社
- 張志剛（2010）「語構成による漢語動詞の自他使用の予測可能性：形容詞性要素と動詞性要素からなる漢語動詞の場合」『言語社会』4号,415-423
- 張静（1987）『漢語語法問題』 中国社会科学出版社
- 陳毓敏（2003）「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得研究の概観—意味と用法を中心に—」『第二言語習得・教育の研究最前線』日本語文化学会 96-113頁
- 角田太作（2008）『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語—』くろしお出版
- 飛田良文・呂玉新（1986）「『中国語と対応する漢語』を診断する」『日本語学』6,72-84
- 中川正之（1985）「日本語と中国語の対照研究—日中語対照研究会の紹介を兼ねて—」『日本語学』7月号,94-104
- 中川正之（1992）「特集・外から見た日本語 語構成」『月刊言語』21-1,28-33 大修館書店
- 中川正之（2008）『日中漢字語の記述的研究—とくに日中同形語をめぐって—』博士論文
- 仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院
- 日本語教育学会（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
- 野村雅昭（1999）「サ変動詞の構造」森田良行教授古稀記念論文集刊行会（編）『日本語研究と日本語教育』1-23頁 明治書院
- 野村雅昭（2000）「漢語」『現代日本語必携』53,37-42頁
- 潘鈞（1995）「中日同形詞詞義差異原因浅析」『日語学習与研究』18-23頁
- 菱沼透（1980）「中国語と日本語の言語干渉—中国人学習者の誤用例—」『日本語教育』42号,58-72
- 文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 彭飛（1998）「日本語と中国語の対照研究が抱える諸問題をめぐって（1）」『無差』5号,27-44
- 松下達彦（2009）「マクロに見た常用漢字語の日中対照研究—データベース開発の過程から—」『桜美林言語教育論叢』5号,117-131頁

三浦昭（1984）「日本語から中国に入った漢語の意味と用法」『日本語教育』53号,102-112

頁

宮島達夫（1993）「日中同形語の文体差」『阪大日本語研究』5号,1-18頁

村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

森田良行（1987）「自動詞と他動詞」『国文法講座6』明治書院

森田良行（1995）『動詞の意味論的文法研究』明治書院

林祥楣（1991）『（全国高等教育自学考试教材漢語语言文学專業）現代漢語』語文出版社

呂叔湘（1955）『漢語語法論文集』科術出版社

Hopper,P.J. and S.A. Thompson.1980.Transitivity in grammar and discourse. Lg.Vol.56:251-99

辞書

中国社会科学院語言研究所（2008）『現代漢語詞典（第5版）』商務印書館

中国社会科学院語言研究所（2004）『新華字典（第10版）』商務印書館

北原保雄（2010）『明鏡国語辞典（第2版）』大修館書店

藤堂明保（2010）『漢字源（改訂第5版）』学習研究社

松村明（1998）『大辞泉』小学館

松村明（2006）『大辞林（第3版）』三省堂

例文出典

吕不韦《吕氏春秋・决胜》2007年 哈尔滨出版社

毛泽东《论人民民主专政》1975年 人民出版社

《人民日报》2010年10月~12月 人民日报出版社

人民网 2009年12月 人民日报社

巍巍《东方》2005年 人民文学出版社

张鸿《续孽海花》1982年 黑龙江人民出版社

添付資料1 日本語のサ変動詞と対応する中国語の品詞性

(表示については便宜上、すべての2字漢語において「する」を省略した。)

名詞のみ：電話、機能、経験、用意、戦争、勝負、契約、提案、苦勞、勤務、演技、意図、会議、貿易
形容詞のみ：優勝、乾燥、徹底、共通、緊張、混乱、合格、洗練、低下、完備
動詞のみ：使用、利用、販売、営業、参加、結婚、登場、開発、発表、採用、消費、飛行、設定、演奏、専用、通信、期待、確認、購入、実現、指導、変化、完成、体験、輸入、募集、観光、収納、注意、処理、搭載、構成、総合、管理、展開、公演、実施、演出、観測、生産、登録、理解、出版、調整、限定、交換、協力、取材、合計、刺激、担当、解説、経営、指定、変更、成長、治療、満足、挑戦、操作、計算、試験、連載、展示、調査、出場、移動、出力、実行、提供、放送、出発、会話、質問、反対、整備、保護、回復、下車、加工、合唱、失敗、関心、導入、約束、信頼、製造、妊娠、流行、獲得、収録、調理、印刷、吸収、建設、維持、拡大、歓迎、重視、抵抗、分析、露出、解決、加入、設立、抽選、批判、作戦、充電、分割、改革、改善、活用、攻撃、冷蔵、学習、確保、再生、参照、作曲、終了、衝撃、接続、達成、展望、感謝、訓練、準備、追加、防水、観察、再現、当選、入学、保存、上昇、勝利、選挙、掃除、復活、支配、進行、排気、防止、圧倒、強化、支持、取得、成立、否定、変身、診断、設置、操縦、発射、便秘、修理、衝突、進化、審査、進出、創業、代理、入場、認定、訪問、満載、運用、加速、交渉、出現、同居、評判、変動、育児、改造、調教、優先、対局、普及、加減、喧嘩、検討、増加、開設、収容、消化、推薦、整理、創造、調節、描写、依頼、確立、競争、強調、交流、混合、散歩、留学、延長、改良、供給、減少、支援、就職、促進、対抗、防衛、保湿、回答、解放、研修、交差、呼吸、商談、対戦、脱毛、入手、認可、表彰、融資、観戦、記載、禁止、形成、結成、自立、振興、創刊、破壊、感激、考慮、参戦、出産、創立、提出、投入、配置、被害、養成、運営、開業、思考、執筆、測光、提示、入選、反省、判定、冷凍、援助、拡張、許可、失礼、収集、招待、消耗、振動、代謝、投稿、無視、累計、引退、遠征、解答、駆動、決意、合成、死亡、上演、償還、専攻、送信、測定、着陸、中止、停止、派遣、披露、移植、違反、開演、管制、休憩、継続、構築、公認、出席、診療、推進、適応、突破、分解、冒険、補給、入会、革命、応用、対応、発展

動詞・名詞 ：料理、生活、関係、希望、意味、存在、装備、旅行、説明、代表、表現、活動、運動、監督、設計、表示、影響、決定、評価、練習、教育、請求、指揮、開始、負担、録音、作業、記憶、検査、左右、行動、装置、投資、記録、報告、建築、判断、設備、教授、組織、保証、作用、反応、恋愛、主張、想像、証明、実験、要求、上下、労働、象徴、入門、動作、規定、認識、保障、評論、裁判、報道、成人、実践、集合、主宰、看護、攻略、指示、幻想、処分、協議、経過、誤解、議論、決断、区別、告白、創作、信用
動詞・形容詞 ：活躍、安心、平均、安定、成功、充実、勉強、集中、配合、感動、公開、不足、開放、発達、平行、進歩、統一、迷惑、調和、緩和、興奮
動詞・副詞 ：比較

添付資料 2 サ変動詞と共起する格助詞

（表示については便宜上、すべての2字漢語において「する」を省略した。）

他動詞（ヲ格）：経験、用意、契約、提案、意図、洗練、使用、利用、販売、営業、開発、発表、採用、消費、設定、演奏、専用、通信、期待、確認、購入、指導、完成、体験、輸入、募集、観光、収納、処理、搭載、構成、総合、管理、公演、実施、演出、観測、生産、登録、理解、出版、調整、限定、交換、合計、刺激、担当、解説、経営、指定、変更、治療、操作、計算、試験、連載、展示、調査、製作、出力、実行、提供、放送、質問、整備、保護、加工、合唱、導入、約束、信頼、製造、獲得、収録、調理、印刷、吸収、建設、維持、歓迎、重視、分析、設立、批判、分割、改革、攻撃、冷蔵、学習、確保、参照、達成、展望、訓練、準備、追加、観察、保存、選挙、掃除、支配、防止、圧倒、強化、支持、取得、否定、診断、設置、操縦、発射、修理、審査、代理、認定、訪問、満載、運用、交渉、改造、調教、加減、検討、開設、収容、消化、推薦、整理、創造、調節、描写、強調、延長、改良、供給、支援、促進、防衛、解放、入手、認可、表彰、融資、観戦、記載、禁止、形成、結成、創刊、考慮、創立、提出、投入、配置、養成、運営、執筆、定時、反省、判定、冷凍、援助、拡張、許可、収集、招待、無視、累計、駆動、決意、合成、上演、償還、専攻、送信、測定、中止、派遣、披露、移植、管制、構築、公認、診療、推進、補給、応用、料理、希望、研究、意味、装備、説明、代表、表現、監督、設計、表示、評価、練習、教育、請求、指揮、負担、録音、記憶、検査、左右、装置、投資、記録、報告、建築、判

断、設備、教授、組織、保証、主張、想像、証明、実験、要求、象徴、規定、認識、保障、評論、裁判、報道、実践、主宰、看護、攻略、指示、幻想、処分、協議、誤解、議論、區別、告白、創作、信用、開業、配合、公開、開放、自覚、統一、比較

自動詞（ガ格）：機能、戦争、勝負、貿易、優勝、共通、緊張、混乱、合格、低下、結婚、登場、飛行、変化、成長、出場、会話、妊娠、流行、抽選、防水、上昇、勝利、排気、成立、変身、便秘、衝突、進化、出現、同居、変動、育児、対局、喧嘩、交流、散歩、交差、呼吸、自立、参戦、入選、失礼、振動、代謝、引退、遠征、解答、死亡、着陸、休憩、冒險、生活、関係、存在、活動、運動、影響、作業、行動、作用、恋愛、労働、入門、動作、成人、入場、下車、発展、発達、平行、活躍、安心、平均、安定、成功、充実、不足、進歩、調和

（ガ/二格）：満足、反対、抵抗、対応、反応、集合、参加、挑戦、加入、入学、対抗、違反、出席、適応、入会、感激、進出、協力、当選、留学、就職、感動、迷惑

（ヲ格）：出発、突破、旅行、経過

自他両用動詞（ガ/ヲ格）：徹底、実現、展開、移動、回復、失敗、拡大、露出、解決、改善、活用、再生、終了、接続、再現、復活、進行、創業、加速、普及、増加、依頼、確立、競争、混合、接着、減少、回答、脱毛、振興、破壊、出産、思考、消耗、停止、開演、継続、分解、開始、決断、決定、上下、完備、勉強、集中、緩和

（二/ヲ格）：注意、感謝、投稿、優先、充電、作曲、取材、投稿、電話

- A が B を C に D どちらでもない
17. 試験_____実施する。 A が B を C に D どちらでもない
18. 環境_____影響する。 A が B を C に D どちらでもない
19. 地元の企業_____就職する。 A が B を C に D どちらでもない
20. 法案_____反対する。 A が B を C に D どちらでもない
21. すばらしい演奏_____感激する。 A が B を C に D どちらでもない
22. 汚職問題_____関係者から取材する。 A が B を C に D どちらでもない
23. 制度_____確立する。 A が B を C に D どちらでもない
24. 経済_____発展する。 A が B を C に D どちらでもない
25. 会議_____開始する。 A が B を C に D どちらでもない
26. 魚_____加工して練り製品を作る。 A が B を C に D どちらでもない
27. 夢_____実現する。 A が B を C に D どちらでもない
28. 公演_____一週間延長する。 A が B を C に D どちらでもない
29. 車_____注意する。 A が B を C に D どちらでもない
30. 新型旅客機_____登場する。 A が B を C に D どちらでもない

二、下記の日中同形漢語を使って、日中異なる品詞ごとにすべて文を作ってください。

1. 提案/提案
2. 決断/決断
3. 緊張/紧张
4. 低下/低下
5. 比較/比较